

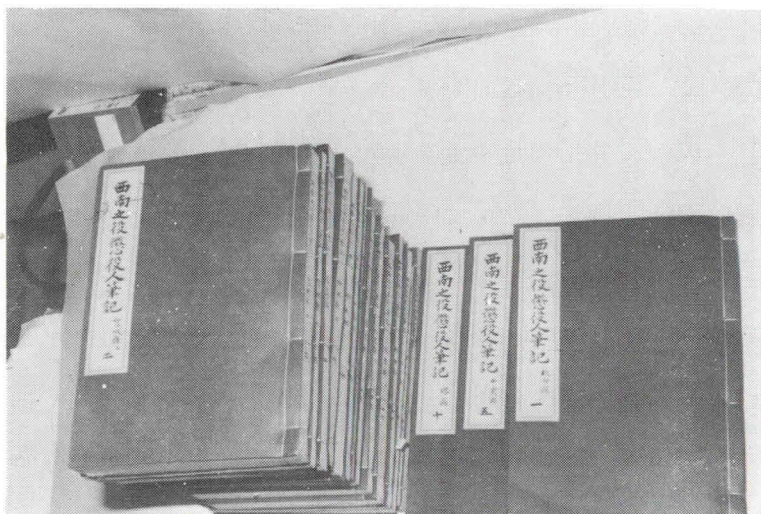
鹿兒島県史料

西南戦争

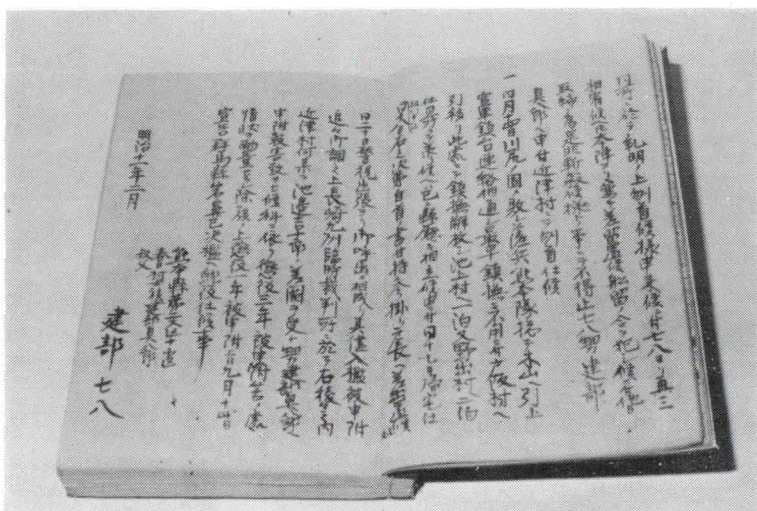
第二卷

題  
字

鎌田 鹿兒島県知事  
要 人



東京大学史料編纂所々蔵



西南之役懲役人筆記 建部七八上申書 (本文696頁)

## 解題

### 一 成立

「西南之役懲役人筆記」は、全国十七府県の監獄者に分れて服役した西南戦争関係国事犯懲役人の上申書の総合集録である。全二十冊より成り立っているが、本書は東京大学史料編纂所々蔵本を底本とした。

成立の経過は、次の明治十一年一月二十八日の太政官達第四号が根源である。

明治十一年太政官達 第四号（一月二十八日）

府県 東京府及賊徒懲役人  
発配無之府県ヲ除ク

鹿兒島逆徒征討始末編輯候ニ付、右賊徒懲役人ノ内其事情及ヒ戦地ノ景状等詳悉致シ候者ハ該事ノ顛末ヲ筆記セシメ、文筆無之者ハ口述書取ニ致シ、書類取集メ早々可差出、此旨相達候事、

（法令全書第十一卷）

この通達に基いて、全国の関係府県の監獄では、西南戦争関係国事犯懲役人の上申書を取りまとめ、それぞれ政府に提出した。その集大成が「西南之役懲役人筆記」として今日に伝えられるものである。なお政府の企図した「鹿兒島逆徒征討始末」は発刊の運びには至らなかったようだ。

懲役人各人も、太政官達の趣旨を理解した上で、それぞれに上申書を提出している。一例をあげれば、

桑幡孫七上申書 （新潟監獄 柁城出身）

今茲ニ本年一月廿八日第四号御達ヲ奉承知候ニ付、右戦争ノ始末不綴ト雖、概略上申仕候也、

龍岡資時上申書 （群馬監獄 都城出身）

今般太政官第四号ヲ以テ、鹿兒島逆徒征討始末編輯候ニ付、右賊徒ノ内其事情及戦地形状等詳悉致候者ハ該事

之顛末云々御達ノ趣巨細承知形行左ニ筆記仕候、  
 とある。他にもこれと類似したものは多数ある。以上のことよって、本書「西南之役懲役人筆記」は、太政  
 官の指令に基いて成立したものであることが了解できる。

二 構成

集大成された「西南之役懲役人筆記」は、左表のように二十冊から成っている。十七県分のものである。上申  
 者の数は合計一〇四五名に及んでいる。

番 号	県 名	冊 数	上 申 者 数
1	秋 田	1	50
2	宮 城	上 1	220
3		下 1	79
4	福 島	1	43
5	千 葉	1	31
6	埼 玉	上 1	52
7		下 1	43
8	神 奈 川	1	2
9	山 梨	1	57
10	堺	1	63
11	広 島	1	12
12	熊 本	1	8
13	青 森	1	50
14	茨 城	1	78
15	群 馬	上 1	30
16		下 1	27
17	栃 木	1	41
18	石 川	1	53
19	岡 山	1	25
20	新 潟	1	81
計		20	1,045

(注) 右の表には東京府(市ヶ谷監獄)関係のものは全然含まれていない。また、長崎県立図書館所蔵の配置表によれば、東京府・鹿児島・岩手・山形県にも懲役人を配置したように記してあるが、これらの上申書は不幸にして探し出し得なかった。しかし末尾に収載した「西南戦記」「戦記景況概略」「東京市ヶ谷在檻者名簿」「丁丑薩隅日肥戦争誌」は、東京府関係分の補遺として参照されたい。なお、右の東京府関係分については、それぞれの史料の末尾の注を参照せられたい。

### 三 形式

(1) 上申書式 太政官達には「文筆無之者ハ口述書取ニ致シ」とあるが、この口述書取式を採ったものはごく少ない。統一的には上申書式を採っている。原則的には各個人別上申書がその殆どを占めているが、稀れに複数の連署上申書も見られる。

(2) 記述の形式 これについては、各監獄毎に指導を加えたらしく、各監獄毎に同様の形式が見られる。しかし、詳細に記述した長文もあれば、また概略を記述した短文もあって、全体的には「区々である」と言った方が適切である。なお、記述の形式は各監獄毎に殆ど同じであるが、その内容はもちろん「各個人差がある」のは当然のことであろう。

(3) 内容の形式 これは、その大部分が各人毎に月日を追った記述であるが、当首に全体的な総括文を揚げ、次いで各人の上申書を載せるといった千葉監獄のような例外もある。

(4) 人名や地名等 これらのことについては、誤認のものが相見られる。資料なしで記憶にのみ頼って書いたものであろうから、無理もないことであろう。本書では、気付いた分については傍注で訂正した。

(5) 日付 これは、本文はもちろん提出月日も、大部分は陽暦を用いているが、一部に陰暦を用いたものも見受けられる。上申書提出月日は明治十一年二月から十一月に及ぶ長い期間にわたっている。

(6) 氏名の署名 氏名のみなのが大部分であるが、堺監獄の如きは拇印、花押まで使っている。なお氏名の上に

冠する族称については、当時除族されているので、平民あるいは旧士族と記したものが殆どである。また、何某の何とその続柄を示したのも稀に見られる。

(7) 地図の挿入 現代版ならば内容の理解を深めるために地図の挿入が採られるが、本書には地図の挿入は一つもない。

#### 四 内容

事件の終了から相当期間を経過して古い記憶をたどりながらの上申書記述であるので、月日をはじめ事件の先後や人名・地名などあいまいなことも多かったであろう。上申書も「右戦争ノ始末不綴ト雖、概略上申仕候也」(新潟 桑幡孫七上申書)と控え目である。

次に印象的なもの数件を拾い上げて全貌を推察する一端とする。

(1) 西郷の動静 薩軍の総大将西郷隆盛の動静を描いたものは殆ど見当らない。僅かに次の二例を拾い得たので紹介する。

群馬 金田徴上申書

八月上旬敵軍日向路ニ進入シ美々津川ヲ渡リ既ニ門川ニ至ル頃ロ、西郷大将熊田駅ノ民家ニ在リテ護衛ノ兵数名ト犬ヲ率ヒ山ニ狩シテ遊フヲ見タリ、

千葉 養田太郎外三名連署上申書

隆盛ノ爰ニ居ルヤ走狗ヲ率キ狡兎ヲ逐フヲ事トス、

右によれば、西郷が好んで愛犬を連れて兎狩りに出かける姿が偲ばれ、忙中閑を得て悠々たる西郷の人間像が浮彫りにされている。

(2) 食糧難 熊本城籠城の官軍が困難したことは想像に難くないが、特に食糧には難渋したと見え、次の上申書がそのことを物語っている。

千葉 深江孝藏上申書

城兵窮困シテ馬ヲ喰フニ至ル、或ハ夜ニ乗シ城外ニ出テ青菜ヲ取ルアリ、また食糧不足については薩軍も同様であつたらしい。次の上申書がそれを証明している。

福島 河野主一郎上申書

道傍ニ生牛七八頭繋キ有ルヲ以テ、我兵執テ去ル、今糧ニ乏シ、屠シテ糧ニ充ツ、

(8) 聯隊旗の奪取 薩軍の第五大隊二番小隊長村田三介が乃木希典少佐（のち大将）の歩兵第十四聯隊旗を奪い取つた話は有名である。この件は次のように記されている。

千葉 深江孝藏上申書

時ニ村田三助聯隊旗ヲ木葉ニ奪ヒ獲テ之レヲ熊本ニ贈ル、城下ニ樹テ大ニ官軍ヲ罵ル、

栃木 石嶺恕吉上申書

同日植木ヲ守リ居候処、官軍ヨリ進撃、賊大勝利ニテ聯隊旗・銃器・弾丸等分捕夥シ、

東京 野村忍介外四名（奇兵隊）連名上申書

此役ヤ我軍頗ル勝利ニシテ十四聯隊旗ヲ得、旗隊中尉某ヲ射殺セリ、

(4) 異色の勇者 懲役人の殆どは除族された旧士族（当時は平民）であるが、異色の者もあった。例えば、埼玉監獄に服役した熊本県第八大区四小区肥後国玉名郡荒尾郷河登村百二拾三番地平民農岸森喜八郎弟岸森源七である。彼は官兵に誰何されて負傷したけれども、勇戦奮闘して官兵を倒して逃れた勇者であった。

(5) 土塁の引崩し

群馬 河野徳之丞上申書

台兵ヨリ長キ竹ニ鈎ヲ付ケ吾カ塁ノ土台ヲ引崩サントス、

これによれば、熊本鎮台兵が長い竹に鈎をつけて薩軍の土塁を引崩そうとしている。笑うに笑えない光景であ



つたろう。

(6) 隊号の設定 薩軍の編制は、はじめ大・中・小・分隊の序数の称であったが、途中から心機一転をねらい再季を期して編制替し、隊号も勇ましい振武・行進・奇兵・正義・干城・雷撃・破竹・鵬翼・常山などとした。

新潟 染川彦八上申書

此時振武・行進・奇兵・正義・干城・雷撃・破竹・鵬翼・常山等ノ隊号アリ、

岡山 中村信雄外五名(熊本隊) 連署上申書

薩軍亦々小隊ノ制ヲ変シテ始テ中隊ノ称アリ、十中队若クハ二十中队ヲ以テ大隊トナス、其隊号ノ如キハ奇兵・行進・振武・正義・干城・雷撃・常山・破竹・鵬翼等ナリ、

(7) 目安箱の設置 吉宗將軍のそれを想起したものが、薩軍派の坂田諸潔は郷里高鍋(宮崎県)において、目安箱を設けて投書を歓迎し、薩軍への悪口を取締り、あるいは強制的に募兵したらしい。次の高鍋士の二人がそのことを上申している。

埼玉 平林忠恕上申書

薩軍ヲ朝敵ト唱へ或ハ故障等申立出兵ヲ肯ゼサル者又ハ敗軍杯ト嘲笑スル者、敵ト見做シ軍律ニ処ス可キ旨ヲ敵達シ、目安箱ヲ出シ、其他種々ノ触示ヲ成シ、数人ヲ捕縛シ或ハ獄ニ下シ、竟ニ農兵迄募兵セラレ、

埼玉 泥谷新上申書

坂田諸潔參軍トナリ本区へ出張、本営ヲ設ケ益兵ヲ募リ目安箱ヲ出シ、薩軍ヲ朝敵ト唱へ出兵ヲ肯セサル者ハ或ハ異論ヲ吐キ出兵妨ケ致シ候者敵ト見做シ、軍律ニ処スル杯様々ノ敵達致シ既ニ捕縛セラレシ者数名ナリ、

(8) 銃器 彈藥の製造

埼玉 松元藤左衛門上申書

同県下二本木町彈藥製造場大小荷駄方ヨリ日々彈藥・兵糧等領手隊へ送致シ、

右に見られるように薩軍の弾薬は、当初は順調であったが、次第に欠乏するに至った。終には銃弾の発砲を制限し、特に砲弾の如きは敵の不発弾を拾って逆に敵に打返すといった笑えない場面もあった。次の上申書にその様子が如実に描かれている。

宮城 貴島良藏上申書

是時ニ当テ我軍弾丸漸乏シ、因テ士卒ニ猥ニ発ヲ禁シ切込ヲ以テ主義トス官軍ヨリ烈シク大砲ヲ発スレハ我軍之ヲ見テ其玉ヲ拾ヒ取り、亦タ官軍ニ発シ返ス、尤モ破烈丸ノ破烈セザルヲ見スマシテ而シテヒロイ、中ンツク大砲ノ弾丸尤モ乏シ田原坂ノ役尤モ烈シキ時ニ士卒弾丸尽テ歎クユヘ會計部ニ取ニヤレハ十発カ或ハ二十発カ取ル、乏シキ事ゴ推知有ンツ、誤ス、故ニ我軍弾丸分捕ヲ尤注目ス、故ニ軍氣ハ大ニ振フト雖モ之レニ少シク窮困々々、

次の例に見られるように、弾丸拾いを商売とする農夫が出るに及んでは、もう論議の沙汰を越えているようだ。

岡山 中村信雄外五名（熊本隊）連署上申書

狡黠ノ農夫争フテ弾丸ヲ拾フテ之ヲ各隊ニ粥キ高利ヲ得ル者甚多シ、以テ戦地ノ概況ヲ想像スヘシ、  
なお、「薩南血涙史」、「西南戦史」も当時の模様を次のように記している。

「薩南血涙史」（薩軍従軍者加治木常樹著） 二九〇頁

又此の方面は二十日以来昼夜連戦し弾薬漸く竭乏するに至りしかば狡兵隊長有馬序介の献策を納れて土民に官軍の落弾を拾はしめ鹿子木大小荷駄に買収せり、其量毎日五六百斤に至る乃ち弾薬を製造して各隊に分与せり、  
「西南戦史」（川崎三郎著） 二五九頁

賊軍、弾丸已ニ竭き村民をして、我軍の射る所を、又拾はしめ、一個二厘五毛の価を以て之を買ふ。然れども唯其券を与ふるのみ。

また、次の例も銃器・弾薬の欠乏に苦しんだ実況で、「宛も餓人ノ食ニ就クカカク」は真に迫まる実況表現である。

埼玉 池田喜兵衛上申書

暫クアリテ衆拔刀敵中ニ切入リ之ヲ撃ツ事無算、加フルニ四斤半砲拾宮余及ヒスナイドル銃八拾挺余・彈葉六千発余ヲ分捕タリ、此時味方素ヨリ銃器・彈葉ニ乏ケレハ、宛モ餓人ノ食ニ就クカ如ク争フテ之ヲ取ル、銃器・彈葉の製造については、管見の限りでは次の数多くの上申書がそのことに触れている。薩軍も各地においてその製造に励んだが、その落日を支えることはできなかつた。

宮城 篠原武次郎上申書

宮城 阪元政右衛門上申書

福島 川崎薨上申書

埼玉 齋藤實猛上申書

埼玉 義岡實義上申書

埼玉 菱田長暢上申書

新潟 染川彦八上申書

群馬 川上親平上申書

千葉 中村政常外六名連署上申書

栃木 高木秀並上申書

岡山 中村信雄外五名（熊本隊）連署上申書

青森 長倉英士上申書

青森 宮春岩次郎上申書

青森 藁谷英孝上申書

東京 野村忍介外四名（奇兵隊）連署上申書

東京 中山盛高上申書

以上の中から著しいものを摘発して全般を推察することにしよう。

埼玉 齋藤實猛上申書

高鍋製作方へ出頭可致旨戸長ヨリ脅迫セラレ、是非ナク出頭、六月十三日頃ヨリ彈藥製造ノ手伝へ仕居候時ニ、

埼玉 義岡實義上申書

然ルニ佐土原廣瀨製造所ハ小銃・大砲・彈藥并器械ヲ製造スル、一日ニ付銃彈ハ一万四五千発ヲ製造出来ナスヲ尽力シ、

群馬 川上親平上申書

一三月中旬比ニテモ候哉県庁ヨリ御用申来出頭候処、大屬松元良藏ヨリ熊本県下肥後国人吉へ出張彈藥製造所設置候様、尤彼地ニハ本営モ有之候間万端指揮ヲ可受旨相達、草道泉同様工人相連レ差越候処、人吉本営ニハ淵邊群平罷在、新町学校ト申所製造場ニ借受置候段申聞、同人指揮ニテ昼夜彈藥并雷管等製造致サセ、尤諸科料ハ本営大小荷駄方ヨリ相渡申候、

一其后時日失念仕候用向有之婦県イタシ居拾日位過候テ又候人吉へ出張候処、其時分熊本県下諸方之味方相敗レ、西郷

隆盛并村田新八等モ人吉へ致滞陣居、新八ヨリ同僚草道泉招呼、鹿兒島県下出水郷之内へ鉛山之場所所有之候間、親平帰旅次第申談兩人之内吾人差越鉛山可取設旨為相達由申聞候ニ付、鉛底之折柄ニテ直様承諾、村田新八エモ申聞工人相連レ出水郷鉛山へ差越、専ラ鋳業ニ従事、人吉製造所其他諸所へ製鉛差送り申候事、一六月十一日官軍出水郷ヲ攻拔キ鉛山エモ打入相成候ニ付、

千葉 中村政常外六名連署上申書

亦高岡・佐土原・高鍋等ノ地ニ製所ヲ設ケ、寺院ノ梵鐘及ヒ時鐘等ヲ買ヒ砲ヲ製シ、市店ノ鉛ヲ購求シ銃彈ヲ製ス、而シテ市店ノ鉛モ尽キ又各戸所持スル所ノ投網ノ鉛ヲ伐リ悉ク納レシム、之レモ尽キ各家蔵スル所ノ錫ノ器具ヲ買フ、又尽ク、終ニ鍋鉄ヲ以テ小丸ヲ鑄ルニ至ル、亦切迫ナラスヤ、

栃木 高木秀並上申書

一同二日富高新町エ一泊、三日延岡城下迄退去し、彈藥方義岡某エ取合、製造之事件を聞しニ、彈丸用鉛払底いたし、古鍋及び鉄之切玉等を製し、聊ツ、出来せりと云へり、

(9) 戦費調達と西郷札発行 戦争には戦費の調達は不可欠の条件である。官軍は国費を使ったことは当然であるが、薩軍はどのような方法で何処からどの位集めたのであろうか。次の上申書によれば、谷山郷戸長は薩軍の募兵に協力すると共に、相当額の公金や公米を差出している。

新潟 松田彌左衛門上申書

私儀明治九年十月谷山郷戸長拜命相勸居候処、翌十年二月西郷隆盛等上京之際、戸長役所屯金四百円位区長之命ニ応シ差出シ、同四月隆盛等ノ本営ヨリ命ヲ受ケ六拾余名募兵シ、或ハ調金合シテ二百三十拾円位右本営エ差送り、同五月隆盛等ノ軍鹿兒島へ襲来ノ節、当郷貢米五百俵位右本営ノ命ニ応シ差送り、同九月隆盛等再ヒ襲来ノ節、本営ノ命ニ応シ十名位募兵ス、此段上申候也、

また次の上申書によれば、大山県令の指示によって、薩軍の会計方や別府・邊見・淵邊隊長らが県庁において金四十万円を受取っている。

青森 鎌田政直上申書

大山綱良差函ヲ受ケ、同隊会計方谷元延清其他隊長別府新介・邊見十郎太・淵邊群平等エ県庁ニ於テ金四拾万円余銘々エ曳渡候儀有之候得共、

以上二件だけで事足りる筈はない。その不足を補う苦肉の一策として案出されたのが周知のいわゆる「西郷札」の発行である。西郷札の製造については、次の上申書に散見する。

宮城 加世田工上申書

六月十四日佐土原ニ於テ金札製造掛トナリ十七万円余ヲ製造シテ日々出来高ヲ宮崎軍務所へ差廻ス、

宮城 木原壯之丞上申書

三日ヲ経テ佐土原紙幣製作掛リトナリ、

埼玉 義岡實義上申書

同所へ鑄製所・製札所ヲ開ク、……製札所ハ国内軍用札ヲ切出ス 鑄制并製札ニ尽カスル者ハ同県下土旅加田工、木原莊之助(丞・中島(馬)甚(七)・市來某ナリ、

青森 藁谷英孝上申書

紙幣ヲ佐土原ニテ製造シ、

なお参考までに、西郷札の製造高について薩南血涙史(八五〇頁)の記事を表示すれば次の通りである。

種類	色	枚数	金高
拾円	濃茶	三、六〇〇枚	三六、〇〇〇円
五円	葡萄鼠	一、六〇〇	五八、〇〇〇
壹円	勝色	三〇、六〇〇	三〇、六〇〇
五拾銭	桃色	二七、六〇〇	一三、八〇〇
貳拾銭	黄色	一〇、六〇〇	二、一二〇
拾銭	生壁色	九、〇〇〇	九〇〇
計		九三、〇〇〇枚	一四一、四二〇円

(10) 城山復帰 九月一日薩軍が郷里城山に入った時は、住民は喜んでこれを迎え、陰に陽に物心両面から薩軍を支援している。「恰米米国ワシントンノ独立ノ如シ」は、聊かオーバーであるが、当時の雰囲気痛感せられる。

官城 長谷場喜藏上申書

我兵ノ城山ヲ恢復スルヤ四民大ニ喜ビ、各職具器握リ甚シキハ肴包丁ヲ提ケ、各所ニ馳集リ官兵ヲ斃ス事数知  
レス、恰米米国革盛頓ノ独立ノ如シ、実ニ九月一日ナリ、

## 例言

一本書は、「鹿児島県史料 西南戦争」全三巻の第二巻として刊行するものである。

一西南戦争で薩軍側に従軍し懲役刑に処せられた者は、国事犯として国内諸府県の監獄署に分散檻置された。本書は、政府が各国事犯に対し、戦地の事情及び景状について、事の顛末を筆記せしめ、提出させた各自の戦地履歴上申書を、一括刊行せんとするものである。底本には東京大学史料編纂所の「西南之役懲役人筆記」(十七県)を用いたが、目下欠本であり行方の分らない東京市ヶ谷監獄署分を補填するため、その一部と思われる私蔵書四点を追補として収載した。

一底本の巻冊番号に従い、次のごとく監獄署ごとに配置し、上申書にも巻冊ごとに内番を附し、上申書が連名のときは、二―三のごとく小番号を附した。

一秋田県	二宮城県(上)	三宮城県(下)	四福島県	五千葉県
六埼玉県(上)	七埼玉県(下)	八神奈川県	九山梨県	十堺県
十一広島県	十二熊本県	十三青森県	十四茨城県	十五群馬県(上)
十六群馬県(下)	十七栃木県	十八石川県	十九岡山県	二十新潟県

とし、なお「追補二―四」は東京市ヶ谷監獄分として附加した。但し、二・三、六・七、十五・十六の上申書番号は(上)(下)別に付した。

一底本のうち一、二、三、四、五、六、七、十四、十五、十六は浄書整本であり、八、九、十、十一、十二、十三、十七、十八、十九、二十は原文のまま整本されている。



一適宜読点「、」及び並列点「・」を附した。

一漢字は原則として当用漢字を使用し、人名・地名等一部正字を使用した。特殊文字のヰ・ㇰ・ㇱ・ㇲ・ㇳ・ㇴ・ㇵ・ㇶ・ㇷ・ㇸ・ㇹ・ㇺ・ㇻ・ㇼ・ㇽ・ㇾ・ㇿは、それぞれシテ・ヨリ・コト・トモ・トキに改めた。

一人名・隊名および旧曆には適宜傍注を附し、地名には昭和五十三年四月一日現在の市町村名を傍注した。なお監獄という特殊環境下に、しかも手元に資料もなく記憶のみに頼って書かれ、多くの誤記・宛字が使用されているので、できるだけ現在の正確な地名に直し、その旨傍注で示した。

一文意の通じない文字または底本の(ママ)は底本通りとし、疑問が残る箇所には(○○カ)と傍注した。

一接続詞「並」「并」と、「余」「予」「干支」は底本通り小さく右寄りに書いた。

一朱書は(朱)と注記し、その部分を「」でかこんだ。

一頭注は、(頭注)と注記し、該行間に転記し、「」でかこんだ。

一朱または墨で訂正された箇所は、訂正された語句を書き、抹消部分は記載しなかった。

一底本の割注は底本通りとし、割注にさらに割注がある場合は|○○○|のようにその行におさめた。

一外国語は底本通り記載した。

一關字は原則として底本の体裁により、一字あけにした。

一原注は底本のまま用い、新たに注を付する場合は、( )を付して原編者の注と区別した。但し、本文中の( )及び「」は底本通りとした。

一摺印及び花押は(摺印)(花押)に改めた。

一巻末に「西南之役懲役人筆記索引」を設けた。氏名、諸府県監獄署番号、上申書番号、出身地、従軍関係等、本巻頁数を掲げて索引とした。また、姓名には適宜傍注した。漢字は原則として当用漢字を使用した。

# 西南戦争 第二卷 目次

口 絵  
解 題  
例 言

## 西南之役懲役人筆記 一 秋田県……………

- 1 伊東祐兼 2 妹尾包道 3 肥田木健雄 4 日下部庄八 5 財部実治 6 柴山景盛 7 原田源太 8 永田勝馬 9 松下紘輔 10 山下雄次郎
- 11 宮春政 右衛門 12 上野幸吉郎 13 石塚七十郎 14 土屋富之進 15 杉原芝平 16 重久純孝 17 菊池重彦 18 山内弥一 19 木原用八 20 白坂篤光
- 21 上野勇四郎 22 猿木宗那 23 末松直道 24 松本利器 25 金津 靖 26 松下助四郎 27 上村勇太郎 28 松永平助 29 福山泰全
- 30 今村市郎 左衛門 31 佐多城右衛門 32 副田雄七郎 33 白浜善右衛門 34 長野金左衛門 35 前田藤五郎 36 相良頼寿 37 有馬八太郎
- 38 朝稲孫左衛門 39 池末須佐水 40 瀬戸口沢右衛門 41 川刃齊輔 42 宇都源之丞 43 栽松仲吾 44 宮原七左衛門 45 野尻源吉 46 生駒助之丞
- 47 山之内正助 48 隅 愛之助 49 大久保越吾 50 川畑嘉之進

## 西南之役懲役人筆記 二 宮城県上…………… 七五

- 1 田実胤重 2 金田金次郎 3 安藤 維 4 寺田泰介 5 弟子丸直次 6 脇田 寛 7 坂元平八郎 8 鎌田 政 9 芦谷八太郎 10 浜田兼長
- 11 平井政拳 12 吉村貞寛 13 伊藤忠助 14 平山小左衛門 15 松井十郎 16 覆並兼起 17 鮫島仲二 18 伊集院兼一 19 貴島良蔵 20 横山通春
- 21 徳永正八郎 22 堀 勝 23 丸岡助次郎 24 勝目新太郎 25 兎玉七之丞 26 高良友益 27 有馬義定 28 大河平隆行 29 奥松新之丞
- 30 三島金之助 31 吉田 精 32 伊集院兼文 33 志和屋良彦 34 竹之内清一郎 35 黒木東朔 36 寺田休五郎 37 重久佐平太 38 佐多浦三省
- 39 大山新助 40 野崎半兵衛 41 園田弥左衛門 42 宇都宇左衛門 43 松崎蔵右衛門 44 加世田 工 45 美代清吉 46 川上郷之丞 47 大野清満

目 次

48 山下金助 49 永野祐喜 50 榎並新五 左衛門 51 山田早苗 52 尾上正右衛門 53 岩元弘平 54 伊地知啓吉 55 山下弥七郎 56 鎌田政敏  
 57 松山善左衛門 58 岩崎伊兵衛 59 東郷惣兵衛 60 讚良彦四郎 61 上村嘉左衛門 62 山口栄吉 63 中村周兵衛 64 面高源之丞 65 有馬八五郎  
 66 成尾常彦 67 寺師権右衛門 68 木原壯之丞 69 稻田新平 70 丸九栄太郎 71 藤井清茂 72 平瀬宗兵衛 73 鎌田竜次郎 74 鎌田央吉  
 75 中原尚政 76 有馬菊治 77 竹下勤兵衛 78 桐原喜右衛門 79 二之方八十次 80 石原近秀 81 久永喜兵衛 82 宮之原良明 83 町田実堅  
 84 永田嘉市 85 高崎親良 86 谷元延清 87 上村勤之丞 88 石神音助 89 児玉実明 90 尾辻佐八 91 帖佐正之進 92 池田兼為 93 本田尚方  
 94 池田正義 95 中根正胤 96 荒田彦七 97 最勝寺精一郎 98 赤塚源太 左衛門 99 西牟田勝太 100 福島武二 101 和田応介 102 永山盛香  
 103 山名龟次郎 104 椎原国幹 105 西方為兵衛 106 山口吉左衛門 107 椎野喜三太 108 柏原勇之進 109 北方盛二 110 梶原村右衛門 111 土屋宗太郎  
 112 永井矢藤太 113 橋元基助 114 黒田清定 115 石塚金助 116 川上弥之助 117 渡辺伴助 118 永田林左衛門 119 飯岡勤左衛門 120 永井四郎  
 121 土岐丑之助 122 二之方寛之助 123 和田六郎兵衛 124 横山矢次郎 125 有馬龍左衛門 126 成田宗淳 127 種子田太八 128 福山吉連 129 郷田彦兵衛  
 130 伊地知謙助 131 土師 盛 132 市来弥藤次 133 井上治右衛門 134 内山仲七郎 135 山口新吉 136 早川兼知 137 中馬秀普 138 前田慶左衛門  
 139 辺見甲之助 140 宮地貞明 141 有馬純治 142 飯牟礼吉兵衛 143 種子島廉四郎 144 宇田津之助 145 榑山喜平次 146 最勝寺半次郎 147 富山吉彦  
 148 市来政平 149 川北陽孝 150 有馬源内 151 大寺伊右衛門 152 瀬戸口慶輔 153 山口松次 154 本山省強 155 松岡岩次郎 156 海老原正兵衛  
 157 永池吉之進 158 床次利左衛門 159 吉富直賢 160 宮原元右衛門 161 谷口政範 162 塚田十右衛門 163 鮫島善之丞 164 酒匂景繼 165 中村郷兵衛  
 166 大山直治 167 池田兼長 168 桐木五左衛門 169 中馬才助 170 松田正之丞 171 神宮司市郎次 172 川崎與兵衛 173 大窪新左衛門 174 万膳正蔵  
 175 鶴丸量衛 176 片之坂弥右衛門 177 田代周一郎 178 瀬之口才蔵 179 荒牧郷十郎 180 塚田仙蔵 181 谷村助七 182 山村隼治 183 山之内源平  
 184 茨田銀一郎 185 山口仁之助 186 木場須賀人 187 海老原盛平 188 坂口平吉 189 有馬信助 190 託摩英蔵 191 書川次郎 192 池田金左衛門  
 193 藤田熊助 194 吉元浅右衛門 195 鶴田喜市 196 愛甲七郎右衛門 197 秋山幸吉 198 木佐木平 199 郡山矢一郎 200 四本八平 201 奈良良迫卯之助  
 202 辺見曾八 203 別府栄輔 204 伊集院兼雄 205 日高祐吉 206 郡山伊平太 207 岡部與助 208 谷川十蔵 209 鳥山平之助 210 永田金兵衛 211 成尾一二  
 212 永吉紋兵衛 213 鮫島平蔵 214 栗野雄八 215 山口市四郎 216 射越金太郎 217 黒江吉之丞 218 肥後百一 219 永田善之進 220 満尾仲右衛門

西南之役 役人筆記

三 宮城原下

1 指宿良徳 2 伊木七之助 3 永田武雄 4 松山一介 5 平原景美 6 有川平之進 7 仁礼兼氏 8 山崎隆雄 9 森元休五郎 10 前田寿左衛門

11 三原経寿12 今吉善左衛門13 牧之瀬良清14 篠原武次郎15 市来政大16 馬場彦二17 河野龍蔵18 尾玉利純19 寺師清近20 宇宿幸吉  
 21 久留十郎22 榎並甚左衛門23 獅子野喜太郎24 池江矩倫25 稻富謙次郎26 肥後隆之助27 川西 勝28 伊藤七左衛門29 森 啓蔵  
 30 下村重賢31 谷山基助32 薬丸兼文33 松崎貞徳34 東郷辰二35 上野忠兵衛36 市来 弘37 桐野源七郎38 井尻祐徳39 植村壮七  
 40 和田助秋41 村田経義42 平山武一43 中村兼業44 長谷場喜蔵45 小幡佳次郎46 橋口仲二郎47 有馬純俊48 野間 勝49 相良角兵衛  
 50 草野藤助51 西田郷之丞52 左近允純明53 加藤景道54 鮫島宗資55 橋口安治56 伊勢芳治57 阪元政右衛門58 吉利一熊59 緒方惟治  
 60 池田能明61 田中勇八62 中山基蔵63 鎌田政法64 廻 政正65 吉田莊太郎66 崎元盛介67 洲村利直68 米良佐平太69 東郷七之丞  
 70 山下美兼71 上原七之助72 伊地知 真73 新徳利秀74 榎田玉喜75 尾玉実得76 吉利 節77 前原胤二78 和田真義79 大山精一

西南之役懲役人筆記 四 福島県……………三三二

1 河郎主一郎2 谷元道貫3 唐仁原 叶4 柿原宗敬5 山下良全6 加藤 淳7 泥谷直養8 高橋直次郎9 河野通般10 有川勘助  
 11 内田武夫12 山下新助13 小倉助次郎14 永嶺信清15 河田勝衛16 賀来権九郎17 佐々布 遠18 鳥山三次19 畷岡栄輔20 黒木源二  
 21 竹廻武重22 竹之下荘五23 川俣政憲24 真勢 一次25 林 七郎次26 三宅新十郎27 青山 競28 山内哲勝29 伊瀬知源左衛門  
 30 樗木利助31 池田貞義32 馬場万之助33 郡司 稔34 安藤幸彦35 中馬喜角36 川崎 華37 臼井吉次郎38 深水嘉平39 平島直之  
 40 浜田良吉41 野島胤八郎42 永田八兵衛42 下田一巳

西南之役懲役人筆記 五 千葉県……………三〇四

1-1 熊本攻城ヨリ延岡ニ至ル戦況略記1-2 高瀬・田原・木留・植木之戦況1-3 木ノ葉・山鹿・鳥ノ栖・隈府戦況1-4 八代方部小川・  
 宮原・川尻・御舟之戦況1-5 馬見原・三田井・日ノ蔭・網ノ瀬ノ戦況1-6 米良山ノ戦略1-7 求麻・人吉方部戦況1-8 鹿兒島方部之戦  
 況1-9 豊後方面之戦況2-1 蓑田太郎2-2 相良休命2-3 篠宮直次2-4 宮原健吉3 蜂須賀助治4 本山貞直5-1 左近允尚行5-2 志岐喜平太  
 6 宇土為栄7 徳丸吉蔵8 八木信行9 小浜半之丞10-1 中村政常10-2 宇都 連10-3 中村政喜10-4 川野道固10-5 有馬純房10-6 柚木崎正因  
 10-7 長野祐之11 高橋専太11-2 加来信門12 深江孝蔵13-1 大島景保13-2 清水 淇14-1 上井 保14-2 野本誠介14-3 東郷実平14-4 益山慶介15 河辺敏公  
 16 村井正綏17 小原武七

西南之役懲役人筆記 六 埼玉県上……………三六八

1 小倉雄介 2 榊山伊右衛門 3 長倉弥九郎 4 山下盛繁 5 和田幸兵衛 6 川野伊左衛門 7 西浦流藻 8 鮫島藤一郎 9 伊東祐藏  
 10 東郷弥彦 11 梶原景一 12 多田成信 13 高山真平 14 前原俊介 15 伊東祐賢 16 桑鶴彦次 17 齊藤実猛 18 稻沢泰三 19 太田原 弘  
 20 平林忠恕 21 田中九八郎 22 長谷場純尚 23 矢野倫安 24 池上盛行 25 窪田七兵衛 26 大木淑慎 27 三洲永次郎 28 細山田正信  
 29 天辰太左衛門 30 丸目織右衛門 31 天辰武左衛門 32 末原熊次 33 桂木良輝 34 尾上吉志 35 四元杏哉 36 赤崎權藏 37 木村謙太  
 38 柳田堅右衛門 39 加藤覺左衛門 40 福山善吉 41 平山佐八郎 42 伊地知敬輔 43 義岡実義 44 泥谷 新 45 阿野安致 46 落合清次  
 47 迫田權五郎 48 原田永次 49 岸森源七 50 鈴木重弘 51 東郷莊之進 52 竹添 節

西南之役懲役人筆記 七 埼玉県下……………四三六

1 植木武一 2 牧元助太郎 3 池田長平 4 植木貞信 5 岩田次郎 6 鮫島中治 7 西村番右衛門 8 野山則吉 9 田原元尚 10 上村雄之丞  
 11 原田喜平次 12 丹生藤四郎 13 瀨辺元一 14 千田源次郎 15 上野敦信 16 松元藤左衛門 17 有馬 猛 18 白石中六 19 前川宗一  
 20 谷山壯太郎 21 槻島祐春 22 伊集院彦七 23 沖 雄次郎 24 武 平介 25 伊勢八郎 26 馬場利八 27 野間九左衛門 28 池田喜兵衛  
 29 鎌田十太郎 30 阿多加内 31 村田経庸 32 野村助左衛門 33 養田長暢 34 市成秀清 35 上野 司 36 黒木栄藏 37 深川仲左衛門  
 38 河内織右衛門 39 松元丑之助 40 土師熊太郎 41 松下吉左衛門 42 石躍岩左衛門 43 吉田小太郎

西南之役懲役人筆記 八 神奈川県……………四九五

1-1 花房庸夫 1-2 丹羽哲郎

西南之役懲役人筆記 九 山梨県……………五〇一

1 山東清武 2 山内基右衛門 3 野村盛賢 4 有馬友助 5 橋本諒助 6 杉野逸藏 7 八木豊治 8 肥後直治 9 郡山誠治 10 和田 勇  
 11 伊東祐啓 12 坂元正一 13 竹下六郎 14 江田 基 15 前田貞一郎 16 日高義正 17 指宿通綱 18 前田源之丞 19 永山正兵衛 20 山下嘉兵衛  
 21 平山英藏 22 小田原要輔 23 乙守宗唯 24 岡本勝知 25 木場宗兵衛 26 愛甲雄藏 27 赤崎元瑞 28 池田庄左衛門 29 田中伝左衛門  
 30 坂木栄後 31 長峯正員 32 野崎丹左 33 加塩捷巳 34 山崎源左衛門 35 日高藤一 36 成尾藤一 37 池田軍治 38 永田幸四郎 39 上村治右衛門  
 40 中馬八郎 41 内山八郎 42 海老原半助 43 神田橋助 44 平嶺治右衛門 45 宮ノ原亮介 46 松山八郎兵衛 47 糞輪孫六 48 小田原秀順  
 49 岩切清兵衛

戦地形状口述書取

50 松下兼文 51 田中太平衛門 52 指宿幸助 53 白尾実記 54 黒田源左衛門 55 石塚甚助 56 山口喜右衛門 57 有馬源右衛門

西南之役懲役人筆記 十 堺県 ..... 五四七

1-1 高田勝四郎 1-2 井上勝之助 1-3 福田静雄 1-4 石川早瀬 1-5 高田鬼丸 1-6 小金丸要太郎 1-7 藤村太三郎 1-8 丸山 麓 1-9 尾本吉次郎  
1-10 安田 保 1-11 原田茂実 1-12 八尋 豊 1-13 伊藤 恕 1-14 佐坐 積 1-15 佐藤虎雄 1-16 北山八郎 1-17 大神三太郎 1-18 宮原徳三郎 1-19 三隅 茂  
1-20 佐藤良太郎 1-21 久野生木 1-22 吉安代四郎 1-23 高城安吉 1-24 紫田兼吉 1-25 岩室文太 1-26 樋口信樹 1-27 貫 龍雄 1-28 田川溝四郎 1-29 西尾定吉  
1-30 徳永伊七郎 1-31 川崎 始 1-32 福竹武平 1-33 上田伊興吉 1-34 多久虎作 1-35 岡本善十郎 1-36 大神 茂 1-37 宮崎謙吾 1-38 福田弥一郎 1-39 西村 桂  
1-40 内海重雄 1-41 永野卯作 1-42 野田敏彦 1-43 白石平之助 1-44 佐々川市作 1-45 石津直五郎 1-46 榎 増次郎 1-47 菅安虎次郎 1-48 明永卯三  
1-49 伊東蔓吉 1-50 疋田 麓 1-51 山崎清吉 1-52 大木政雄 1-53 讚井七次 1-54 片岡徳太郎 1-55 友納徳郎 1-56 有馬彦馬 1-57 原 五郎 1-58 小村直太郎  
1-59 野坂種外 1-60 徳末精夫 1-61 森 震志 2-1 神崎潜一良 2-2 船越開道

西南之役懲役人筆記 十一 広島県 ..... 五五九

1-1 岩間小十郎 1-2 牧柴謙十郎 1-3 深野 二三 1-4 太田 保 1-5 古閑俊雄 1-6 高島義恭 2-1 筑摩宗太郎 2-2 阿部省吾 2-3 佐藤亀四郎 2-4 山本欽治  
2-5 戸倉十太郎 2-6 久保益良

西南之役懲役人筆記 十二 熊本県 ..... 五七四

1 那須拙速 2 新政英治郎 3 松井正堅 4 田中十内 5 佐村左近 6 友井 巖 7 田代信利 8 栗原 繁

西南之役懲役人筆記 十三 青森県 ..... 五八〇

1 宮川貞衛 2 内藤有慶 3 平島重綱 4 野口一馬 5 柳田重周 6 佐土原省吾 7 長倉英士 8 飯田通義 9 辻 八之進 9-2 石峰善十郎  
9-3 凶師助七 10 鎌田政直 11 竹内興一 左衛門 12 甲斐半蔵 13 唐鎌岩輔 14 蒲生才蔵 15 河野悦兵衛 15-1 丸田秀二 15-2 有馬静明 16 篠崎正大  
17 伊丹親衛 18 前田軍左衛門 19 松下兼信 20 宮春岩次郎 21 杉崎喜次郎 22 大内田七兵衛 23 有馬嘉兵衛 24-1 東条吉左衛門 24-2 川崎佐一郎  
25 指宿貞篤 26 津崎直介 27 津崎英吉 28 加世田 一二 29 菊池 繁 30 大始良義昌 31 有馬純信 32 六野豊治 33 藁谷英孝 34 和田一平

34 和田諸介 35 和田一作 36 平嶺篤治 36-2 鷲山九左衛門 36-3 後藤軍次郎 36-4 塩田甚九 37-1 後藤休七 37-2 河野伝治 38-1 井上勝利 38-2 柴田敬  
39 永田半太夫

西南之役懲役人筆記 十四 茨城県……………六一三

1 岩尾弥四郎 2-1 有馬七左衛門 2-2 小城愛兵衛 3 木原武志 4-1 橋口喜平次 4-2 橋口宗一郎 4-3 中尾覚太夫 4-4 松下市助 4-5 林 八之進  
4-6 上野藤之助 5-1 木原権太郎 5-2 野村賢藏 5-3 岩月伊八 6-1 野田強之助 6-2 中村清藏 7-1 海老原為平 7-2 浜田良啓 8 澗元副 9 山口弥九郎  
10 橋口仲五郎 10-1 松下彦次郎 11 高木敬介 12-1 谷口藤次郎 12-2 谷口金吉 12-3 谷口勇右衛門 12-4 谷口万六 12-5 貴島正之進 12-6 松下直之進  
12-7 山元弥兵衛 12-8 橋口助太郎 12-9 中尾彦八 12-10 石塚末太郎 12-11 山元與七郎 12-12 山元佐兵衛 12-13 永田金の丞 12-14 橋口與四郎  
13-1 愛甲半助 13-2 愛甲仲介 13-3 藤田源吾 13-4 安田善次 13-5 竹山誠介 13-6 菱刈隆次郎 13-7 曾木仲ノ丞 13-8 橋口太左衛門 13-9 曾木茂介  
13-10 猿渡藤次郎 14 池田喜左衛門 14-1 有馬利右衛門 14-2 鎌田藤之助 14-3 樋渡仲藏 14-4 都外川正八郎 14-5 池田基右衛門 14-6 池田市兵衛  
14-7 西牟田政介 14-8 長山健彦 14-9 川辺権左衛門 14-10 鎌田助右衛門 14-11 田中孝太郎 14-12 愛甲次右衛門 14-13 池田市兵衛  
14-14 山元善之進 15-1 高城吉之進 15-2 道岡彦二 15-3 和泉周藏 15-4 園田武右衛門 15-5 四元平介 15-6 有馬格介 15-7 遠矢彦志 15-8 有馬雄七  
14-15 野村弥太郎 15-10 愛甲喜介 16 永田與四郎 16-2 坂元彦介 16-3 瀬戸口猪之助 17-1 谷口半右衛門 17-2 松山宮彦 17-3 西牟田竹次郎 17-4 井上静利

西南之役懲役人筆記 十五 群馬県上……………六二七

1 古屋於鬼七 2-1 米良一穂 2-2 日高 昌 2-3 田川鴻三 3 榎 六輔 4 坂木友藏 5 阪梨惟修 6 長 連四郎 7 河野徳太郎 8 龍岡資時  
9 重永藤次郎 10-1 渡辺敬孝 10-2 渡辺正親 10-3 赤星 清 11 三原直記 12 是枝吉藏 13 西川如雲 14 肥田景敏 15 知識友次郎 16 松元直之丞  
17 佐藤一弘 18 篠原源次郎 19 竹下盛隆 20 加藤彦十郎 21 米良雲暉 22 兒玉八次 23 三宅時宗 24 青崎彦六 25 金田 徹 26 山下覚矢

西南之役懲役人筆記 十六 群馬県下……………六九六

1 建部七八 2 神崎周平 3 田中豊彦 4 東 九郎次 5 横山賢二郎 6 佐藤良輔 7 和田治左衛門 8 川上親平 9 貴島要之助 10 竹下小平  
11 河野徳之丞 12 東郷重郷 13 鬼丸源作 14 榎屋兼明 15 池田貞英 16 塚元淳一 17 土岐半介 18 阿万甚五郎 19 伊集院英輔 20 兒玉利謙  
21 山崎武平 22 長崎源藏 23 木佐貫助 24 落合友治郎 25 神田橋正吾 26 平山弥七郎 27 吉永秀武

西南之役懲役人筆記 十七 栃木県……………七五八

- 1-1 山口源十郎 1-2 木佐貫與十郎 2 上野藤市 3 高木秀並 4 有馬覺之助 5 中島直太郎 6 鮫島新藏 7 園田恒之輔 8 吉津和門
- 9-1 上野泰藏 9-2 藤井伝左衛門 9-3 上野嘉左衛門 9-4 小幡團兵衛 9-5 十島彦 9-6 上野伝五左衛門 9-7 染川斎藏 9-8 知識甚八 10 浜田雄藏
- 11 石嶺愨吉 12-1 柳田城之介 12-2 松田有節 12-3 田中弓藏 13 福島仲之丞 14 野崎静助 15-1 小山十次郎 15-2 都外川新五郎 16 田中伊右衛門
- 17-1 菓師寺愨吉 17-2 浜田竜藏 18 上野徳二 19 阿万真澄 20 海江田綱賀 21 上野景賢 22 篠原伊藤次 23 鮫島九郎兵衛 24 斎藤 覚 25 大脇為政
- 26-1 十島四郎左衛門 26-2 天辰甚吉 27 永田正之進 28 郡山権太夫

西南之役懲役人筆記 十八 石川県……………七八七

- 1 寺田浅右衛門 2 川野莊介 3 大山八之丞 4 窪田與兵衛 5 福山伝助 6 重久彦右衛門 7 山村城介 8 前田重正 9 毛利善藏
- 10 肝付吉二 11 有留重善 12 折田半藏 13 稻元 静 14-1 愛甲清介 14-2 断ち切れ 15 岩切甚太夫 16-1 愛甲雄志 16-2 重久彦七 16-3 前田次兵衛
- 16-4 井上喜右衛門 16-5 有馬六郎太 16-6 大内田市兵衛 16-7 宮内善七 16-8 永山伝次郎 16-9 岩元弥七郎 17 曾木隆宣 18 上村栄藏 19 今給黎久清
- 20 長谷場純孝 21 山内孝左衛門 22 宮内喜一郎 23 中村諸右衛門 24 池田盛直 25 今給黎叶衛 26 里村萬次郎 27 安藤寛之介 28 川辺文助
- 29 前園二之助 30 児玉甚太郎 31 西村弥之進 32 川野四郎助 33 井上休之丞 34 末原喜助 35 町田龍之進 36 石神喜次郎 37 上村昌盛
- 38 井上吉継 39 宮崎弥八郎 40 伊地知集彌 41 帖佐豊平 42 慶田才助 43 丸田藤太夫 44 安田東一

西南之役懲役人筆記 十九 岡山県……………八二九

- 1-1 中村信雄 1-2 狩野庄馬 1-3 山県庄次郎 1-4 沼田常雄 1-5 松岡独醒庵 1-6 野上文九郎 2-1 福井代次郎 2-2 山口林三 2-3 高石虎二 2-4 広瀬束治
- 2-5 桜川正太郎 2-6 村松義直 2-7 中野重吉 2-8 河野最一郎 2-9 樋田重茂 2-10 石松藤次郎 2-11 柳 久太郎 2-12 須田広作 2-13 白石貫一 2-14 中里又次郎
- 3 山県庄次郎 4 筑山英太 5 中村信雄 6 二見 丑 7 南方 実

西南之役懲役人筆記 二十 新潟県……………八五九

- 1 桑幡孫七 2 池田吉次 3 凶師静嘉 4-1 中村源藏 4-2 服部良之介 5-1 服部喜寿 5-2 林 一郎 6 池田早之丞 7 鮫島彦一 8 堀之内良介
- 9 大童彦五郎 10 吉信栄吉 11 蜂須賀民之助 12 永田喜平次 13 成尾甚之丞 14 宅万弥之助 15 竹上稲介 16 児玉佐七 17 成尾甚七



追補

- 18 永峯讓之助 19 前田兼邦 20 池水平兵衛 21 成尾庄之丞 22 鮫島 一 23 宅方平袈裟 24 稻留 稅 25 木場才藏 26 山崎実信 27 平田幾之介
- 28 上床半之助 29 山下半兵衛 30 堀内只治 31 有馬純孝 32 成相嘉尾次 33 愛甲良八 34 肝付琢磨 35 山村十右衛門 36 千龜仲太郎
- 37 内之浦嘉兵衛 38 菱田彦藏 39 田原嘉市郎 40 黒木八十次 41 上村善五右衛門 42 山下兼武 43 野間口權之丞 44 吉武省一 45 勝目照雄
- 46 上妻時起 47-1 木佐貫尚之丞 47-2 寺田伊左衛門 47-3 武田武二 47-4 今村源太郎 47-5 井上八之助 47-6 木場八之進 47-7 井上喜七郎 47-8 三石次右衛門
- 47-9 寺田良右衛門 47-10 田口平之進 47-11 原口宇次郎 47-12 酒匂喜右衛門 47-13 福山伝之助 47-14 勝田正之助 48 松田弥左衛門
- 49-1 曾山勇二郎 49-2 古垣市次郎 50 前田佐左衛門 51 岩崎 叶 52 二木軍輔 53 竹迫平介 54 馬渡隆次郎 55 野崎榮介 56 谷村純孝
- 57 原口巖太 58 本村義任 59-1 波多野喜右衛門 59-2 茨木運藏 60 兒島仙藏 61 土岐十助 62-1 境田勇次郎 62-2 松木良右衛門 63 染川彦八
- 1-1 野村忍介 1-2 別府九郎 1-3 伊東祐高 1-4 神宮司助左衛門 1-5 山口盛高 2 中山盛高 3 市ヶ谷監獄署在監者 4 守永 守

(表紙)

西南之役懲役人筆記 一 秋田県

(中表紙)

国事犯懲役人伊東祐兼  
外四十九名戦地形状上申

一 伊東祐兼上申書

私儀

明治八年戊戌三月頃宮崎県管下日向国第十六大区々長被命奉職中、私用ニ付同九年十一月初頃上京仕、同月末頃帰区仕候、然処同十年丑一月下旬頃ニモ候ハン、該区四小区吉田郷(えびの市)之者四五名鹿兒島私学校エ入校シ、間モ無ク帰区シ該区小一区飯野郷土族那須隆祐(えびの市)へ相咄候趣、私学校ハ西郷ヲ始メ都テ不遠内上京ノ賦ニテ、出立ノ仕舞ニ帰区シ、該区ノ区長ハ於私学校ニ、該区ヨリ

該校へ入校スル者ヲ相拒ミ且上京等被致、探索ニ帰県被致タルトノ旁疑ヒ相掛、区長モ被免程ノ評判有之、成程暫時上京ハ被致候得共、全ク右様ノ事件ニハ関係有之間敷ト相答へ置候旨、右隆祐ヨリ直ニ承リ候得共、何分病氣相煩候故、何事モ打捨置、然処鹿兒島表何致騒ケ敷向追々相聞得、二月八日頃ニモ候ハン帰宅仕候処、兼テ懇意ノ有馬惣右衛門参リ、隆祐ヨリ承リ候通疑ノ廉為申聞候得共、全ク右様ノ事件ニハ関係無之旨返答致シ、無左候得ハ桐野利秋並ニ永山彌一郎等ヨリ(四番大隊長)  
(三番大隊長)右該校エ形行申開キ置方可然ト申事ニテ、桐野氏へ罷越右ノ形行及依頼候処、最早私学校ハ西郷隆盛始メ今般中原尚雄等ノ口供ニヨリ、政府へ尋問ノ廉有之、近々上京ノ賦旁混雜今更疑ノ廉一々申開訊ニ行兼、若シ該校ノ者共疑ノ廉色々申者有之候ハ、桐野へ御聞可給旨相答へ置出兵致候様申事ニテ、其坐ニテ入校ヲ相願ヒ候得共疑等相掛居候ハ、旁面働候故此節ハ佐土原並ニ鉄肥辺(白鷹市)ノ有志ノ面々出兵ノ向ニ相見得候ニ付、彼方へ相頼可旨返答承リ罷帰候、  
二月十日頃桐野氏へ右返答承ニ罷越候処、鉄肥高橋某へ相頼置候ニ付、彼方人数へ相加リ出兵候様致承知、

折柄、餓肥川崎某入来ニテ猶又直ニ該人ヘモ及依頼候、

一同十五日午前第八時頃、鹿兒島下町、餓肥問屋ヘ差越、前(鹿兒島港)ノ浜ヨリ、鹿兒島士族川上某・兒玉某、野崎某・前田某、

餓肥士族川崎某・和田某等都合七名ニテ、丸木船ヨリ福

山ヘ着船一泊シ、翌十六日山(山之口)ノ口ヘ一泊シ、翌十七日、餓肥清武町ヘ着シ、直ニ餓肥士族川崎新五郎・伊東直記ノ

旅宿ヘ差越、桐野ヨリ任依頼推参仕万事挨拶ヲ述べ、

暫シテ餓肥三小隊ノ名簿ヲ被差出、惣差引人右川崎新

五郎・伊東直記・高橋某三名也、隊合ト雖トモ從來ノ

組立ニテ老人多ク入隊就テハ色々議論モ相発シ、夫

故差引人伊東直記・川崎新五郎兩名ヲ本営ト定リ、隊

伍ヲ佛式ニ編製相成、私始メ川上某・兒玉某・野崎某・

前田某等本営付屬トナル、

一同月十八日兵隊ヘ彈藥相渡シ、翌十九日午前第八時頃

兵隊並ニ本営迄同所出發シ、高鍋町ヘ一泊シ、翌廿日富

高新町ヘ一泊シ、翌廿一日延岡町ヘ一泊シ、二月廿三日頃、

熊本市保田窪村ヘ着シ、直ニ味方本営ヘ高橋某・川崎某・和田某三名着届ニ出ル、味方合印並手旗相渡リ、

翌廿四日頃、我隊川尻ヘ番兵被申付、同所午前第八時頃、

彦ヘ右川崎某・和田某ヨリ届ニ出ル、直ニ同所三ヶ所ニ

堅メ被申付、同廿八日頃、肥後山鹿(山鹿市)ヘ転營候様申来リ、

翌廿九日同所出發シ、山鹿駅ニ着シ、直ニ味方本営ヘ川崎

某・伊東某着届ニ出ル、翌朝同所熊本市村ニ番兵ス、

三月二日頃、岩村ヨリ南ノ關迄進軍被申付、我三小隊ニ

番大隊十番小隊外三四小隊間道ヲ襲、同所平山村(山鹿市)ヘ官

兵相堅メ居、先鋒ノ隊ニ小隊ヲ以テ相戦、暫シテ官兵岩

村ノ様引揚、夫ヨリ板橋村(三加和町)ヘ一泊シ、翌四日午前第六時

頃同所出立、山鹿ノ内岩村ヘ官兵相堅メ居、先鋒隊相戦

内ニ中軍後軍モ相揃、餓肥一小隊右十番小隊ヲ以テ官

兵台場ヨリ南ノ山手ヨリ相掛リ、暫ク炮撃シ官兵都テ

引揚、跡ヘ戦死三名倒レ居、小銃五六挺・彈藥二千發位

右二小隊ヲ以テ分捕ス、夫ヨリ山鹿ノ様引揚、翌五日

同所鍋田村ニ相堅メ候、

三月廿日頃、植木口相敗レノ報知アリ、直ニ鳥巢村(西合志町)ニ引揚相堅メ候、

一、餓肥四番小隊植木口ニ相堅メ居候処相敗レ候砌、何方ヘ引揚候欵相分ラス、尋方トシテ同所出立、熊本味方二

一 四月二日頃味方二本木本営ヨリ鹿兒島警部並ニ巡查ヘ

ノ書面一通至急持越候様被申付、直様出発シ同月八日

頃鹿兒島県庁へ着、直ニ警部右松某<sup>(祐水)</sup>・中山某<sup>(盛馬)</sup>外屯名ヘ右

書面相渡スニ、兵隊ノ儀ニ付諸所へ巡查兵相募有之、

直様出兵候様申遣ニ付、最寄ノ飯野郷<sup>(えびの町)</sup>へ相待居候様申

事ニテ、翌朝出発シ同十一日頃同所ニ着シ、追々巡查兵

相集リ飯ニ隊伍ヲ組ミ、一日ニ二三小隊ツ、肥後熊本

二本木味方本営へ向ケ操出シ<sup>(操)</sup>、都合八九小隊ニシテ跡

ヨリ三小隊ヲ差引、同所四月十五日頃出発シ人吉町ヘ

一泊、江代<sup>(水上村)</sup>並ニ尾前<sup>(住葉村)</sup>・矢部<sup>(矢部町)</sup>同断、翌廿六日頃木山味方

本営河野四郎左衛門へ引渡シ、夫ヨリ足痛ニテ同所ヘ

三日滞在シ、夫ヨリ矢部病院へ引取療治罷在、然処木山<sup>(益城町)</sup>

方面相敗レ、追々兵隊矢部ノ様引揚直ニ病院モ馬見原<sup>(兼備町)</sup>

並ニ人吉ノ様引直シ、人吉病院へ罷越療治罷在候、

一 五月一日頃同所味方本営村田新八ヨリ参候様申来リ、

罷越候処、國分・都城辺へ売米多ク有之段相聞へ、最早

爰許兵糧モ十分ニ無之故取入度、彼方へ差越区戸長ヘ

引合、売米有之候ハ、石数等至急取調可申遣旨被申付

候、翌朝又村田<sup>(村田新八)</sup>ヨリ参候様申来リ罷越候処、抜米等モ有

之候ハン故、為取締無銃隊四五小隊本営岩元某・大小荷

駄上原某外二名差遣候ニ付、大小荷駄ト相心得万事談

合致候様被申付、翌三日頃同所出発シ飯野町<sup>(えびの町)</sup>へ一泊シ、

翌四日頃莊内<sup>(郡城市)</sup>へ一泊、翌五日頃福山<sup>(福山町)</sup>へ着シ、其日兵隊二

小隊着、本営岩元某ハ元ヨリ手負ニテ近郷ノ温泉へ差

越居候、本営大小荷駄同所へ据置、夫ヨリ当所戸長ヘ

右売米ノ一条引合候処、当所へ売米多ク屯有之段申出、

直ニ石数等取調人吉本営村田某へ申遣シ、直様本営付

大小荷駄篠原某ヲ國分赤谷藏へ出張シ、彼売米モ各々

持主ヨリ彼藏へ追々差廻シ候、

一 五月中旬頃同所海岸へ午前第八時頃軍艦二艘・小蒸気

砲艘・小船百艘位来リ、右軍艦ヨリ砲発シ、味方台場

ヨリ砲発シ、無間小船へ乗込ミ小蒸気引船ニテ同所小<sup>(小磯)</sup>

迫村<sup>(福山町)</sup>へ上陸シ、此日風雨烈敷シテ味方ハ火繩銃ニシテ

砲発スル事能ハス、終ニ坂ノ上迄引揚同所相堅メ居、

午後第三時頃官兵モ本艦へ都テ乗込、直ニ鹿兒島ノ様

出帆シ、此日味方戦死四五名ニシテ大ニ苦戦也、翌日

又右台場へ相堅メ其後追々軍艦一二艘ツ、廻船ニテ砲

発ス、

一 七月十日頃國分<sup>(國分市)</sup>・敷根ノ間味方相堅メノ台場相敗レノ

報知有リ、夫故右堅メノ台場ヲ引揚、柴立本道ヲ相守<sup>(柴立、福山町)</sup>

リ、翌日官軍直ニ福山ヨリ(福山町)牧野原迄相堅メ候、

一同十五日頃味方未明ヨリ柴立本道ヨリ牧野原迄惣進撃

此日切隊三小隊・奇兵二小隊・行進隊二三隊・佐土原隊

一小隊ヲ以テ相戦ヒ、官兵牧野原本道へ小高キ丸岡へ

炮台ヲ築キ北南左右へ小銃隊ヲ相伏セ、味方モ本道ノ小

高キ丸岡ヨリ炮発シ、官兵南ノ方ヨリ横矢烈敷故、味方

丸岡ノ兵後(丘也)へ相廻リ候様号令ヲ相発スルニ、各隊引揚

ノ令ト相心得何トナク都テ引揚、官兵四五町位追撃シ、

味方河例川ヲ相堅メ引揚ノ砌、馬ヨリ右足ヲ驛ラレ歩

行スル事不能、直ニ都城病院へ引取療治罷在候、

一五月廿三日頃河例川方面相敗レノ報知有リ、病院都テ

高岡並ニ宮崎へ引直シ、夫故宮崎ノ様差越養生罷在候、

一同廿六日頃当所味方本営ヨリ名代ヲ以テ、病氣中ノ事

候得共最早都城方面モ相敗レ旁混雜ニ付、人馬手当等

ヲ当区戸長へ相達罷候得共、何分小人数ニテ不行届候

ニ付、元来宮崎県管轄ノ区长ノ事故区长ノ場ト相心得

同所区长所へ差越、人馬手当等致候様被申付、同廿七

日頃同所区长所へ罷在右手当等仕候得共、最早人馬等

モ昼夜出通ニテ出者少ク、旁愚考仕ニ、朝敵ノ命ヲ蒙

リ候テハ実ニ不容易儀ト今更前非悔悟仕自首書同役中

相認居候史ニ、第四旅団大尉岡某午後第三時頃被參、

我々共未夕昼飯等モ不給候ニ付直ニ百名位賄手当致呉

候様被申、直ニ手当致差出、暫シテ兵士兩名被參、參

謀方へ參候様御達ニ付、罷越帰順自首仕候、

一八月二日右參謀ヨリ自宅謹慎被申付候、同三日同所出

立都城町へ一泊、福山町へ一泊、翌五日帰宅仕候、同

廿八日大門口警視出張所ヨリ御呼出ニ付罷出、直ニ旧

客座へ東京警視出張所へ護送相成、夫ヨリ県庁内拘留

所へ護送相成候、

一九月一日旧城内並ニ私学校ニ当リ炮声烈敷相聞へ無間

巡查兩名被參、拘留所都テ御開キ相成罪人七八十名位

四方へ散乱シ、夫ヨリ大橋昌廣同道ニテ帰宅シ、朝飯

給り直ニ官軍へ右形行訴トシテ出行、途中ニ於テ最早

賊徒諸所へ相堅メ候段承り、夫ヨリ天保山ヨリ丸木船

相雇加治木(給良郡)へ渡海シ、同所へ官軍運輸局有之、右局へ

大橋昌廣(下男)悴花崎仙吉御雇相成、彼ノ局へ罷越候処、当

所へ分署モ有之段承り、直ニ分署へ罷出右形行申上候、

然処右仙吉へ御預ケ相成、其夜運輸局へ一泊、翌二日

午前第八時頃右分署ヨリ昌廣兩名御呼出、宮崎警視庁

出張所へ護送相成、直ニ御糺ニ付始末申上候、此日仮

檻倉へ被召入候、夫ヨリ三四度モ御糺相成候、

一九月廿日頃同所裁判所ヨリ御呼出御糺ニ相成、同廿四日搦印被仰付候、

一十月廿五日午後第四時頃、檻倉へ警部ノ御方名御出私共御呼出、明朝ヨリ長崎臨時裁判所へ御差廻ノ段御達シ相成、同廿六日午前第五時頃同所ヨリ三十名名位護送ニテ(日南市)鉄肥町へ着、翌廿七日同所出立外(南郷町)之浦へ着、(このころ)

午後第四時頃蒸気船へ御乗セ付相成、翌廿八日午前第六時頃同所出帆、同廿九日午後第六時頃長崎港へ着船、翌卅日午前第八時頃上陸、直ニ檻倉へ護送、午後第一時頃裁判所へ御呼出ニ付罷出候処、七年懲役被仰付候、同三時頃右檻倉へ、

一十一月三日午後第四時頃蒸気船御乗付相成、午後第十時頃長崎出帆、同七日午後第二時頃横濱へ着、直ニ警察所へ護送相成、午後第四時頃蒸気車へ御乗セ付東京新橋ステーション迄、夫ヨリ陸行ニテ佃島懲役所へ護送相成候、翌々九日午前第八時頃御呼出、秋田県へ御差廻ノ段御達シ、直ニ私始メ五十名護送相成、同廿六日午後第五時当県懲役所へ着仕候、就テハ今般出軍始末御取調ニ付此段概略上申仕候也、

鹿兒島県第二大区小四区

二百七十七番地住

明治十一年年第二月

伊東祐兼

## 二 妹尾包道上申書

私儀

先般出軍仕候其原由タルヤ、客年二月初旬区長野村四郎ナル者鹿兒島ヨリ帰区、其節始メテ県令ヨリ専使申付ラレ各県エ差遣相成ル文章ヲ読覽シ之レヲ信入ス、闔郷ノ人民ハ一人トシテ私学ニ入ル無ト雖トモ、追々人心動揺他郷私学ノ壮士輩等ハ勿論、其他有志ノ面々大ニ競立、勢ヒ猛烈実ニ坐視スルニ忍ビザルノ形勢御座候ニ付、一先出鹿、重テ其実ヲ搜リ、人心ノ方向ヲ定メ令ンカ為メ、(都城土族)龍岡資時(全上、宇上ニ職死)・樺山資胤兩人出鹿方々探索シ、三月ノ初ニテモ候ハン帰区致シ、樺山ヨリ伝承仕候ニ、今般西郷等ノ上京実ニ不容易事件也、此節出兵不致ハ則チ国賊ニテ、悉ク討伐ヲ加フト云説囂然タリ、淵邊直右衛門ニモ過日熊本ヨリ帰県ニ及ビ、同人ノ演述スル言烈シ、就テハ上天朝ノ御為メ、下一郷ノ為メ出軍セスンバ有ヘカラズ、

然ラズンバ後患有ル必然タリト口述ス、其上県令ヨリ西郷隆盛宛ノ書翰モ得タリトテ一見セリ、依之陪々信シ、名義モ有之事候ニ付、弥意ヲ決シ之レニ同意ス、陸續トシテ相集マル者二百三十余名同ク之レニ与ス、龍岡資時はレヲ総括シ、三月八日発郷、同十二日熊本エ着ス、隊号ハ遊撃一番・二番等ト称ス、隊モ亦編製シ一番小隊長龍岡資時、半隊長樺山資胤、分隊長神田橋正吾、二番小隊長東胤正、半隊長長江口盛一、分隊長池田貞英、私ニ於テハ二番小隊ノ押伍ニ撰マレ、即チヨリ熊本城ヲ守之レヲ久ス、后チ日ハ覺エス小川口援兵ヲ命セラレ出軍、戦ハ小川ヲ始トス、戦ヒ敗レテ四班田ヲ固守ス、一番小隊ハ山手ヲ守ル、或日官兵短船ヨリ上陸スルニ会シ待伏セテ是レヲ狙撃ス、近ク能ハスシテ本艦ニ帰ル、日ヲ経スシテ山手応援ヲ命セラレ(八代市宮地)猫坂ニ於テ戦争、本道敗レテ引退ク、此日一番小隊長龍岡資時重創ヲ蒙ル、外戦死手負等巨多也ト雖トモ是レヲ略ス、宇都(宇都)ノ戦ヒニ半隊長樺山資胤戦死ス、外人名ハ略ス、戦ヒ利有ラスシテ引退キ川尻ヲ守ル、二日ニシテ御舟(御船町)ニ転陣ス、該所ヲ守ル数日、或日官軍早且ニ寄来リ、其兵衆ノ鋒キ鋭奮戦スト雖トモ支ル能スシテ木山(益城町)ニ引退ク、此日小隊長柳橋資純・半隊長土持則武死ヲ

決シ深入シテ戦死ス、其他兵士十余名死ス、手負モ亦少トセズ、本營永山彌一郎ニモ退去ニ忍ヒス在家ニ走入リ四方ノ軒ニ放火シ、火ノ廻ルヲ相待屠腹ニ及ベリト、骸骨ハ灰燼中ニ得テ埋メシ一小塚有リ、其後再ビ御舟ヲ取テ守ル、亦破ラル、連戦利有ラズシテ終ニ馬見原(蘇門町)エ引揚ケ、幾モ無フシテ尾前(尾前)ニ引退ク、此地ニ留ル一七日、数度ノ戦ヒニ長官ノ者共戦死・手負等ニテ、順ヲ以テ分隊長ニ上ラレ、人吉ニ引揚ケ滞陣スル二日ニシテ大野村(大野村)援兵ヲ命セラレ、四月下旬転陣ス、台場ハ他隊ヨリ相守候ニ付在家ニ休兵ス、或日一之瀬(一之瀬)ノ守相破レ応援ノ命ヲ受ケ速ニ操出候処、台場ハ勿論要害ナル高岳迄モ乗取ラレ突ニ当リ難ク見ユ、然ト雖トモ各雄ヲ揮テ之レニ当ル、銃手十余名ヲ撰テ岳腹ヨリ発炮、余ハ岳下ヲ引廻シ背面ヨリ連ニ発炮候処、官軍人少ニテ支ル能ハズシテ引退ク、尚追撃シテ本ノ台場迄乗取リ前ノ如ク守ヲ付テ大野村ニ帰陣ス、或日又大口ノ手ヨリ援兵ヲ乞フ、夜未ダ明ケザルニ大野村ヲ発シ上木場(上木場)ニ着ス、双方台場ヲ築ヒテ互ニ応炮セリ、因テ嶮山ヲ経テ官軍ノ横出ニ突出、縦横奮戦五六町モ候ハン追撃候処、官軍要害ヲ取り苜足モ退カス激戦時ヲ移ス、然ル処応援相統キ一層力ヲ得、其上小高キ岡ヨリハ大炮ヲ

連発スルニ依リ、官軍拒ク能ハス台場ヲ捨テ、引退ク、此

日小隊長江口盛一戦死ス、外ニ手負等算有リ、其夜野陣ヲ

張り翌日大野村ニ帰陣ス、幾ク日ヲ経スシテ大野村敗軍

ニテ人吉ニ引揚ケ、程角道ヲ守リ小戦再ビス、隊長池田

貞英始メ三四名手負ス、六月四日各所相破レ退テ旧城内

ニ操込ミ求麻川(球磨)ヲ中ニ置テ拒戦ス、其景況町家ニ放火シ

炮ニテ付タルカ人ノ、焰煙天ニ漲ル、互ニ大小炮ヲ爆発スル雷鳴

ヨリモ尚烈シ、寸間モ炮丸来着セザルナシ、稍暫ク在テ

城近辺ノ人家ニ火相移リ延ビテ城内ニ及ブ、忽チ黒煙ニ

包マレ既ニ出ル処無キガ如ク相成、守ヲ捨テ、大畑ニ引

揚ゲ此日引揚後レテ求麻川ヲ歩渡スル者數、知リス又破死スル者モ數多有ト云、大駒ノ地ヲ守ル、六月十

二日大畑破レテ引退キ吉田(えびの市)ノ上ニ仮守ヲ付ク、官軍追撃

シ互ニ発炮既ニ黄昏ニ及ブト雖トモ勝敗決セズ、因テ各

隊通シ合セ喇叭ノ相凶ヲ以テ進入、夜ニ入り官軍引退キ

炮声絶エ候ニ付本ノ守ニ歸リ、翌日早天ニ馬關田(えびの市)ニ引揚

ケ守ヲ付ク、当所末タ破レザルニ小林ニ引揚ベク本営ヨ

リ相達シ、守ハ他隊ニ譲置キ六月下旬小林エ引揚ケ留ル

コト五日、同所ニ於テ同隊ノ半隊長ニ上ラレ須木口(球磨郡)応援

ノ命ヲ蒙リ、須木ノ内久々瀬ト云所ニ転陣ス、然処植村(球磨郡)

壺屋エ進撃ノ事相発シ、翌日三里余山深ク分ケ入り、正

義七番ノ守場ニ各隊相揃ヒ其夜山泊ニテ払曉ヨリ進軍、

千城四番、振武十五番ト正面ニ掛リ発炮スト雖トモ、官軍

要害ニ抛リ少モ動揺セズ、既ニ弾丸尽ントスル頃正義七

番隊嶮山ヲ押分ケ押登リ背後ニ突出シ官軍ノ後ヲ衝ク、

正面モ亦炮声ヲ盛ニス、終ニ相破レ尾撃シテ植村壺屋ヲ

取ル、日西山ニ没スル頃各隊引揚ケテ守ヲ付ク、其後兩

日ヲ経テ官軍攻撃相成各所破レテ須木ノ内山(須木村)ニ引揚ケ、

守場ノ定マルヲ待ツ、一日ヲ経テ操込シ正義九番ハ龍野

越ヲ守ル、振武十五番ト熊本龍口隊ハ鈴原越ヲ守ル、我

隊ハ奈崎越ヲ守ル、正義七番隊ハ応援隊ニ定ム、或日鈴原

越ニ戦ヲ始ム、程ナク破レテ各隊内山ニ引退ク、野尻口モ

亦大敗軍ニテ紙屋迄引揚ノ報知有之、須木口モ引テ(野尻町)綾ノ

内上畑ヲ守ル、日ヲ経スシテ戦ヒ破レ持永ノ町迄引退キ、

此地ヨリ北ニ当リ壺里有余ノ地ヲ守ル、三日ヲ経スシテ

本道相破レ引退ヒテ佐土原川上ヲ守ル、或日官軍惣進撃

ニ及ビ、米良口破レテ後ノ岡手ニ炮声相響キ、出シ処ヲ

知ラズ成ヌ、仍テ大ニ散乱レ美々津(日向市)ニ会合スル者僅カニ

十余名、一七日位モ候ハン在家ニ休息シ、此地ヨリ山谷ノ

小道ヲ経歴シ、八月十七日帰宅、都城分署ニ於テ帰順自

首仕候処、自宅謹慎被申渡謹慎罷在候処、同月廿五日御



用申来リ其日ヨリ御拘留ニテ、同廿八日鹿兒島警視出張所へ御差廻シ相成、出物蔵檻倉へ入檻罷在候処、九月一日午前十時頃ヨリ炮声シ、如何ナル炮声カト皆人首ヲ傾ケテ疑フ久シ、然処追々其音烈數ク罷成激戦ノ向ニ相伺レ、小銃ハ勿論軍艦ヨリノ炮丸等近傍ニ来着破裂候ニ付、出ントスレド戸開ケズ仍テ檻中ニ暈ヲ以テ楯ヲ取り、何レモ死ヲ決シ少モ動揺セズ謹慎罷在候処、天運未タ尽サルカ、十二時頃ニテモ候ハン、誰タルヲ知ラス馳来リ戸相開キ候ニ付出檻シ、大峯兼昭・財部實治三人同列ニテ加治木分署ニ自首ノ上黄昏ニ及ビ都城ニ帰着、分署ニ届出候処即ヨリ御拘留ニテ、九月八日宮崎エ護送相成、十月廿六日長崎エ差廻サレ、懲役二年ノ命ヲ蒙候、此段御調ニ付上申候、以上、

鹿兒島県管下第百五大区日向国

諸県郡都城二小区二百廿七番地

明治十一年二月十四日

妹尾包道

### 三 肥田木健雄上申書

私儀

明治十年丑二月六日区長役所ヨリ御用有之罷出候処、此節鹿兒島県陸軍大将西郷隆盛政府へ尋問ノ筋有之上京被致候ニ付、当区内ヨリモ兵隊差出候ニ付、一番小隊佐土原藤吾隊兵士ニテ出兵致候様、副区長深水嘉平ヨリ被申付、二月十七日出発イタシ同廿五日頃熊本迎町へ午前十時着致シ、直ニ川尻へ赴キ同所ニ泊番兵致シ居、夫ヨリ二丁新地へ三泊番兵致居、夫ヨリ山鹿へ赴キ二泊イタシ、三月三日岩村へ進撃致シ候処、同所打払鉄炮三挺・胴乱三ツ分取、午後五時比ヨリ同所引取、山鹿へ四泊番兵致居、夫ヨリ同七日頃ヨリ廣村へ赴キ二泊番兵致シ、夫ヨリ火目井村へ七日番兵致シ居候処、三月廿日頃同所引揚味取原へ赴キ一泊、翌廿二日植木へ趣キ同所ニテ午後四時頃ヨリ戦争致シ、其夜同所へ一泊致シ、夫ヨリ鳥ノ巢へ赴キ同所へ一泊致シ、夫ヨリ隈府へ赴キ四泊番兵致居候処、同所ニテ小隊長佐土原藤吾、半隊長阿萬南八郎、兵士七八名程戦死ス、手負八九名程有之、其節老小隊人数散々ニ相成二十四五名程相纏リ候付、其夜梨ノ木坂ニテ番兵致居候処、翌日小隊長ヲ石川孫四郎へ、半隊長ヲ守永守へ申付相成候、同日人数モ相纏リ候ニ付五六日程番兵致シ居候処、同所ヨリ病氣ニ付黒石村出張病院へ入院致シ候ニ

付、其後ハ相分リ不申候、四月下旬矢部ニテ帰隊致シ候  
 処、同所ニテ隊号ヲ奇兵十八番中隊ト相成リ、中隊長ヲ  
 石川孫四郎へ、右小隊長ヲ山ノ城軌へ、右半隊長ヲ和田  
 勇へ、右分隊長ヲ私へ申付ニ相成リ、夫ヨリ猿渡村へ二  
 泊番兵致シ居候処、矢部ヲ引揚椎葉山中ヲ通り、同廿九  
 日頃湯ノ前へ着七日程滞在致、夫ヨリ大山ヲ越へ日向国  
 宮崎へ着、同所ニテ十日程番兵致居候処、五月中旬頃ヨリ  
 同所出発イタシ、富高(日向市)新町細島へ四五日番兵致シ居候処、  
 五月十五日頃ヨリ豊後口へ出張致シ、三國峠ニテ十日程  
 番兵致シ居候処同所ヨリ病氣ニ付病院へ入院致居候、急  
 ニ全快不致彈藥製造ニ操替ニ相成候ニ付、延岡ニテ彈藥  
 製造致居候処、八月十七日同所ニテ降伏仕候、此段形行  
 申上候也、

明治十一年二月

鹿兒島県下日向国那珂郡飫肥  
 第百式大区一小区楠原村  
 肥田木健雄

四 日下部庄八上申書

陸軍大将西郷隆盛ニ応セシ一条、明治十年二月下旬ノ頃、

熊本進軍ノ時戦ノ形状ヲ見物為可致、熊本一夜塘ニ参リ  
 候処、熊本士族中津大四郎ノ頼ヲ受、久本寺ニ於テ本陣  
 ノ給養ヲ勤候内、熊本鎮台武庫士官沼田景勝ノ家内三ツ  
 五ツノ小兒ヲ連レ身ノ置所無ク窮迫ノ次第ヲ聞キ、直ニ  
 自宅ニ連帰潜伏致サセ、夫レ故自分本陣ノ斥候トナリ候  
 処、四月十五日川尻破レニ付熊本・植木所々ノ守兵木山・  
 長峯ニ引揚、此時九本寺本陣ヲ戸島村ニ引揚此所ニテ米  
 金等ノ番兵ヲ龍口隊ト改メ、中津大四郎惣隊長トナリ鹽  
 川成海小隊長トナリ永嶺信清半隊長トナリ松本勝太分隊  
 長トナリ、同廿日保田窪原ニ午前五時ヨリ翌午前五時頃  
 迄戦ヒ、戦死二名、手負二名、此時勝敗不決、直ニ川原ニ引  
 揚、矢野某宅ニ休息候処官軍不意ニ攻撃スル故、味方直ニ  
 切入ニ依テ官軍遂ニ敗走ス、軍曹一名ヲ生捕午後三時頃  
 ヨリ矢部濱町ニ引揚、此処ニ三日滞陣、同廿四日馬見原ニ  
 一泊、那須・椎葉ノ山中ヲ経テ、五月一日人吉ニ着、此  
 所ニ暫ク滞陣、此時鹽川成海小隊長ヲ辞ス、永嶺信清小隊  
 長トナリ松本勝太半隊長トナリ、中津大四郎ノ強テ進ム  
 ルニヨリテ私分隊長トナリ、同十五日ヨリ五家天堤ニ出  
 張、同廿八日午前五時頃ヨリ官軍男獄ヲ攻撃スルニ依テ  
 味方敗走スル故、直ニ天堤ヲ攻撃ニ付午後一時ヨリ六時

迄頃大ニ戦フ、勝敗不決、此日人吉(五木村)・頭地并(水上市)江代數ヶ所ノ破レニ付、午後一時ヨリ此所ヲ引揚、廿九日午前七時頃球摩川ヲ越へ井手(球磨郡山江村)ノ口村一泊、同三十日午前七時比田(八高市)代迄引揚候処同十時頃人吉ニ当リ焼火烈シク炮声天地ヲ動ス、午後一時頃人吉ノ味方敗軍シテ大畑(八高市)へ引退ク、故ニ本隊モ大畑へ引揚ク、此所ニ一泊、六月一日鹿兒島県下加久(えびの市)藤ニ一泊、同二日飯野(えびの市)ヲ經テ小林ニ一泊、此所ニテ桐野利秋ノ指揮ヲ受、須木口ニ出張、直ニ球磨郡榎木村(榎木村)ニ操入、龍口隊・正義九番中隊共ニ地藏峠ニ一戦、敗走シテ銃器・彈藥・刀二本ヲ取ラレ勝夫谷迄退キ、同十三日正義八番応援ニテ直ニ榎木ニ進撃、午前七時頃ヨリ戦ヒ午後六時比官軍敗走シテ花立峠(多良木町)ニ退ク、同十四日亦榎木村へ操入正義九番ハ下榎木ヲ守ル、同七番・振武十五番ハ皆越ヲ守ル、龍口隊永谷守、同七月一日龍口隊・正義九番花立峠ニ進撃シテ直ニ台場二ツヲ乗取、同日正義七番皆越ニ進撃スルニヨリ、官軍直ニ敗走スルヲ追撃シテ上村坪谷(球磨郡上村)ノ本營輜重ヲ乗取り、銃器・彈藥ヲ分取シ官兵五名ヲ生捕、縦火焼之下雖トモ統兵無クシテ空シク皆越ニ引揚尚此所ヲ守ル、同二日龍口隊ハ花立峠ニ終日戦フ、同三日午前六時過キ大霧ニ乘シ隊下十九名ト共ニ台場ニ切入官兵三名

ヲ斃シ銃器・彈藥分取スト雖トモ、半隊長始メ十一名迄仆レ統兵無クシテ遂ニ敗走シテ其屍ヲ揚ル事不能、空シク堂屋敷迄引揚、此所ニ四日番兵ヲ張候処、小林ノ味方敗軍ニ付内山ニ引揚須々原峠ニ守兵ヲ張候処、午前十時頃官軍攻撃スルヲ、味方横撃スルニ依リテ官軍敗走ス、此時鏗節十六本・パン一俵・握飯二俵・笠十一枚ヲ分捕ス、翌日午前七時頃ヨリ官軍攻撃ニ味方敗軍スル故、奈崎越・龍ノ越ノ守兵綾・紙屋(野尻町)ニ引揚ク、此時小隊長永嶺信清、分隊長自分炮丸ニ当リ手負ス、此時ヨリ高岡病院ニ送ラレ、夫ヨリ所々ノ破レニ付、高鍋ニ被送候処、七月下旬ノ頃佐土原破レニ付延岡病院ニ被送候処、耳川破ニ依テ本隊遂ニ延岡ニ引揚、此処ニテ中津大四郎各隊惣軍監トナリ、野口勝藏龍口隊小隊長トナリ、此時自分病院ヨリ帰隊候処直ニ三田井口(高千穂町)応援トシテ八月十日ヨリ延岡ヲ発足、午後六時頃曾木村迄操入、翌十一日壹里計リヲ操出台場ヲ築、奇兵十一番左ノ山手ヲ守、正義六番川越シノ山手ヲ守、蟠龍八番本道ヲ守、龍口隊川岸ヲ固メ候処、同十二日午前五時頃ヨリ官軍攻撃ニ本道ノ味方敗走スルニヨリテ、四中隊共ニ曾木金毘羅峠ニ退キ、此所ニテ防戦シ死傷四十余名アリ、奇兵十一番本道ヲ敗走スル故十余名ヲ生捕ヲ

(延岡市西部)  
レ舞野村迄退キ、此所ニ防戦シテ直ニ破レ、此時私炮丸

ニ当リ手負シテ遂ニ延岡ニ被送候処、門川破レニ付病院

行衛不知、依テ川岸ニ一夜ヲ明ス、同十三日長井村倭野

病院ニ入、同日延岡敗軍ニ付味方惣軍長井村ニ引揚、此

時官軍ニ囲マレシ事四方一里ニ過キス、此時西郷本営ノ

軍議決セサル故、中津大四郎長井神社ニ到リ此所ニテ一

首ノ歌ヲ詠ス、其歌ニ、義ヲ立テ身ハ此山ニ捨置テ名ヲ

後ノ世ニ残ス嬉シサ、卜書シ、西郷ニ送り割腹致シ候処、

同十七日午後六時過ヨリ西郷・桐野ハ奇兵隊ヲ率シ山手

ヲ破リ囲ヲ脱シ候、同十八日此所ニ於テ官軍ニ降ル者数

万人、自分共ニ降伏仕候、同日延岡ニ被送、八月下旬ノ

頃ヨリ島ノ浦ニ被送、十一月一日ヨリ宮崎ニ被送、此所

ニテ入檻被申付、同廿六日ヨリ長崎へ被送、此処ニテ懲

役一年被申付、秋田県ニ護送相成候、私存居候戦地ノ形

状奉申上候也、

熊本県第二大区一小区上立田村

三百式十三番地

明治十一年二月

日下部庄八

### 五 財部實治上申書

私儀

明治十年出軍仕候、其原由タルヤ、当年二月初区長鹿兒

島ヨリ帰区、此節陸軍大将西郷隆盛始メ政府へ尋問トシ

テ上京ノ事件相発シ、県令ヨリ專使ヲ以其趣各県へ申遣

ニ相成ル文章等ヲ初テ読覽シ、之ヲ信ス、区内人心動揺

シ県下ノ壯士輩ハ勿論其他大ニ競立勢甚タ盛ナリ、実ニ

傍觀坐視スルニ不忍ザル形勢御座候ニ付、尚又実情探索

トシテ龍岡資時・樺山資胤鹿兒島ニ出ツ、三月上旬帰区、

樺山ヨリ伝承仕候ニ、陸軍大将西郷隆盛ヲ始メ先月上京、

県下随行凡疋万三千余、今般西郷等ノ上京ハ実ニ容易ナ

ラザル事件ナリ、此節出兵不致ハ則国賊ト云説囂然タリ、

且又淵邊直右衛門ニモ熊本ヨリ募兵ノ為帰県ニ及ヒ同人

ノ演述スル言又烈シ、傍觀スルニ於テハ後憂必然タリ、

就テハ上

天朝ノ御為、下一郷ノ為出兵可然ト口述ス、其上県令ヨリ

西郷隆盛宛ノ書翰 兵出事件ノ文章ノ由モ得タリトテ一見セリ、依リ

テ名儀モ有之事候ニ付陪々信シ、意ヲ決シ之ニ同意ス、

相集ル者式百三十余名、龍岡資時コレヲ総括シ、三月八日該区発足、同十二日熊本へ着ス、隊ヲ編制シテ隊号ヲ遊撃一番・二番ト称ス、一番隊長龍岡資時、同半隊長樺山資胤、同分隊長神田橋正吾、二番小隊長東胤正、同半隊長江口盛一、同分隊長池田貞英トス、私ニハ二番小隊ノ伍長被申付、即チヨリ熊本安政橋ヲ守ル事久シテ、小川口援兵被申付出軍、戦ハ小川ヲ始トス、小川本道戦敗レテ惣軍松橋ニ引、当隊四班田ヲ守、一番小隊ハ山手ヲ守、或日官軍輕舟ヨリ上陸セントス、待伏テ之ヲ狙撃ス、近ク事能ハス本船ニ帰ル、兩日ヲ経テ山手應援ヲ命セラレ猫坂ニテ(八代市官地)戦争、當日大苦戦本道敗レテ惣軍トナル、此日一番小隊長龍岡資時重創ヲ蒙ル、外ニ戦死・手負巨多ナリト雖トモ之ヲ不記、宇都(宇土)ノ夜襲ニ一番半隊長樺山資胤戦死ス、外人名不記、宇都(御船町)ノ戦利アラスシテ引退キ川尻ヲ守ル事二日、其後御舟ニ援兵ヲ命セラレ輒陣シテ守ル事数日、該所ニテ押伍ニ上ラル、或日官軍早旦ヨリ攻撃ス、其兵甚タ多シ、味方奮戦スト雖支ユル能ハスシテ木山ニ引揚ク、此日本營永山彌一郎四方ニ奔走シテ指揮シ、敗ル、ニ及テ在家ニ走入、四方ノ軒ニ放火シ割腹ニ及ヘリト、骸骨ハ灰燼中ニ得テ埋メシ一小隊アリ、一番小隊長柳橋

資純・同半隊長土持則武其他兵士十余名殿シテ戦死ス、其外手負モ又多シ、其后チ再ビ御舟ヲ取テ守ル、又破ラル、連戦利アラス、終ニ矢部、馬見原等ヲ經テ尾前ニ引揚ケ、此地ニ留ル事一七日、其後人吉ニ引揚滯陣スル二日、(音北町)大野村出張ノ命ヲ受、四月下旬輒陣ス、台場ハ他隊ヨリ相守候付、干城ニ番中隊ト在家ニ休兵シテ應援トス、或日(音北町)一ノ瀬ノ守破レテ命ヲ受ケ速ニ操出候ニ、台場ハ勿論要害ナル高岳迄モ乗取ラレ、実ニ当リ難ク相見得、然ト雖トモ各勇ヲ揮テ之ニ当ル、銃手十余名ヲ撰テ岳腹ヨリ炮発、余ハ岳下ヲ引廻シ背面ヨリ炮発致シ候処、官軍人少ニテ支ユル能ハスシテ引退ク、尚追撃シテ本ノ台場迄乗取り、前ノ如ク守ヲ付ケテ大野村へ帰陣ス、或日亦大口ノ手ヨリ援兵ヲ乞フ、未明ヨリ大野村ヲ発シ上木場(音北町)ニ着ス、双方台場ヲ築キテ互ニ応炮ス、因テ嶮山ヲ經テ官軍ノ横合ニ突出、縦横奮戦五六町追撃仕候処、官軍要害ヲ取り一足モ退カス激戦時ヲ移ス、然ル処應援相統キ一層力ヲ得、其上小高キ岡ヨリ大炮ヲ連発スルニヨリ官軍防ク事能ハズ、台場ヲ捨テ引退ク、此日小隊長江口盛一戦死ス、外ニ手負数名、其夜野陣ヲ張り翌日大野村ニ帰陣ス、數度ノ戦ニ長官戦死、手負ニテ分隊長ニ揚ラレ、幾日ヲ經テ

一 秋田県

大野村敗軍ニテ人吉ニ引揚ケ、程角道ヲ守リ小戦再ナリ、  
隊長池田貞英手負外ニ三四名、六月四日各所相破レ退テ  
人吉旧城内ニ操込ミ、球磨川ヲ中ニ置テ拒戦ス、其景況  
町家ニ放火シ炮ニテ付タルカ人、焰煙天ニ漲ル、互ニ大小炮ヲ  
暴発スル雷鳴ヨリモ尚烈シ、寸間モ炮丸来着セザルナシ、  
稍暫ク在リテ城近辺ノ人家ニ火相移リ、延テ城内ニ及ブ、  
忽チ黒煙ニ包マレ既ニ出ル処ナキガ如ク相成リ、守ヲ捨  
テ大畑ニ引揚ゲ此日引揚相後レテ歩済ス者数知レ、大駒ノ地ヲ守ル、  
六月十二日大畑破レニテ引退キ吉田ノ上ニ仮守ヲ付ク、  
官軍追撃シ互ニ発炮既ニ黄昏ニ及ブト雖トモ勝敗不決、  
因テ各隊通シ合セ喇叭ノ相囂ヲ以進入ス、夜ニ入り官軍  
引退キ炮声絶候ニ付本ノ守場へ歸リ、翌日早天ニ馬關田  
ニ引揚ケ守ヲ付ク、当所未破ニ小林ニ引揚ベク本営ヨリ  
相達シ、守リハ他隊ニ譲リ置キ六月下旬小林ニ引揚ケ留  
ル事五日、須木口応援ヲ命ゼラレ須木ノ内久々瀬ト云所  
ニ転陣ス、植村壺屋へ進撃ノ事相発シ、翌日三里余山深  
ク分入り正義七番ノ守場ニ各隊相集リ、其夜山泊ニテ払  
曉ヨリ進軍、干城四番・振武十五番ト正面ニ掛リ発炮ス  
ト雖トモ、官軍要害ニ抛リ少モ動揺セズ、既ニ彈藥尽キ  
ントス、時ニ正義七番嶮山ヲ押登リ突出シ、官軍ノ後ヲ

衝ク、正面モ亦炮声盛ニス、官軍終ニ相破レ、各隊ト追  
撃シ植村壺屋ヲ取ルト雖トモ本ノ台場へ引ク、其後兩日  
ヲ経、官軍攻撃味方敗レテ、惣軍須木ノ内山ニ引揚、龍  
野越ハ正義九番、奈崎越ハ当隊、鈴原越ハ振武十五番・  
熊本龍口隊ト守ル、其後鈴原越敗レテ内山ニ引、此時野  
尻口ノ味方破レテ神屋ニ退ク、須木口モ綾へ引揚上畑ヲ  
守、后チ官軍惣進撃当所モ亦敗レテ持長ニ退キ、夫ヨリ  
佐土原へ引揚ケ各隊ト川手ヲ守ル、八月二日未明ヨリ官  
軍惣撃ス、川上ノ味方ヨリ敗レテ官軍背後ニ出味方ノ後  
ヲ衝ク、依テ惣敗軍トナル、官軍尾撃甚タ急ナリ、当隊  
モ官軍ニ囲マレ散々トナリ進退無途ヲ憂、高橋某・鎌田  
某等兩三名穂北ノ山中ニ潜伏、夜ニ入り山中ノ間道ヲ経  
テ八月六日帰区、都城警視分署へ帰順自首仕自宅謹慎仕  
居候処、同廿五日警視分署ヨリ御用ニテ鹿兒島へ御差回  
シ相成、同廿九日午後十二時鹿兒島警視出張所へ着ス、  
直旧質物藏檻倉へ入檻仕候処、九月一日午前十時頃遽ニ  
炮声イタシ追々烈シク相成リ、軍艦ヨリモ炮発シ当檻ニ  
モ炮丸參リ候得共戸開ケス、依テ疊ヲ以楯トシ必死ニナ  
リテ罷在候処、誰タルヲ不知馳參リ戸ヲ開キ呉候ニ付直  
ニ出檻、大峯兼昭・妹尾包道ト同道シ間道ヲ経テ加治木

警視分署へ出、成行自首仕候上帰区、当地分署へモ即届申上候処拘留相成、同八日宮崎へ御回シニテ、宮崎ヨリ十月廿六日出立ニテ長崎へ御差回シ相成同州日着岸仕候、当日御呼出ニテ懲役被申付候、今般鹿兒島逆徒御征討始末御編輯ニ付、其事情及ビ戦地ノ形状申上候様奉拜承、記憶ノ儘概略書記申上候也、

鹿兒島県第五大区一小区

都城郷下長飯村百三十七番地居住

明治十一年二月

財部實治

## 六 柴山景盛上申書

私儀

明治十年二月十四日第一分署ヨリ御用有之罷出候処、陸軍大将西郷隆盛政府へ尋問ノ筋有之上京ニ付、(田代五郎隊長)式番砲隊分隊長ニテ随行可致段村田新八、(二番大隊長)一等警部中島健彦ヨリ被申付、乍不肖不得止御請仕候、然処第五番大隊、(池上四郎隊長)砲隊一番二番隊長田代五郎、半隊長桂壯介、大小荷駄給養兵士百名、二月十七日午前六時揃ニテ鹿兒島旧厩跡へ集リ、本營西郷隆盛・桐野利秋・篠原國幹・永山彌一郎・池上四

郎・本營付屬奥良之丞・市來宗次郎、本營護兵差引淵邊軍平共ニ八時頃出足陸行、兵隊ニハ上町築地ヨリ乗船イタシ加治木へ着一泊ス、翌十八日午前七時出立横川へ一泊ス、十九日午前七時出立吉田(えびの市)へ一泊ス、廿日永田研吉ト共ニ兵隊ニ先タチ朝五時ヨリ立チ三時比熊本県下人吉へ着、廿一日午前七時出立、川船四十艘計リニ乗船球磨川ヲ下リ、午後四時頃八代へ着一泊、然処熊本城影シク焰上ノ段宿亭主ヨリ承聞ス、翌廿二日午前四時出立宇土へ差越候処、大炮早々可持越報知ヲ得、熊本迄六里ヲ馳行致シ花岡山・段山・土坂村等へ操込攻撃ス、(練)翌廿三日砲三門・二十度搦二門・携日砲二門ヲ安政橋・長六橋・桶屋町辺へ引直ス、田代五郎之ヲ指揮ス、桂壯介ニハ段山ヲ、私シニハ砲三門ヲ引キ出町・赤尾口両所ヲ指揮ス、廿七日午前七時比五番小隊町田權左衛門持場へ城中ヨリ打出候付、北郷萬兵衛隊・自分隊之砲三門ニテ防留メ、四時比官軍城中へ引揚グ、味方ノ死傷數多有之候、其頃田原(桶木町)・木留等ノ戦争盛ニシテ、大小砲声如雷、故ニ毎日斥候ヲ出シ実地見聞ス、川尻同断、七日八日比未明ヨリ城兵安政橋ヲ破リ、御舟・甲佐ニ走ル者三四百名、其余ハ久品寺(丸品寺)村ヨリ米數百俵ヲ城中へ運ブニヨリ、伊集權右衛門・肥

一 秋田県

後宗之助、私ノ隊ト戦フテ勝敗不決、故ニ奮激シ抜刀ヲ以隊下ヲ指揮スル折節、銃丸腰ニ当ルト雖トモ戦急ナルニヨリテ痛ヲ不覺尚戦フ、然処午後四時頃城中へ引揚双方死傷數多有之、然後自分ニハ二本木病院へ四五日、同月十日ヨリ田代五郎・桂壯介半隊ヲ引率シ川尻へ出張候処、田代五郎ニハ松橋ニテ戦死ス、桂壯介ニハ川尻敗軍ノ日手負致ス、四月十五日炮銃隊都テ木山へ引揚ケ相成候、炮隊ニハ川原迄引揚ケ候処、木山本営桐野利秋ノ指揮ニヨリ竹下覺次郎・三原卯一郎ト共ニ御船へ斥候トシテ差越、爰元本営へ一宿、然処翌廿二日未明官軍ヨリノ攻撃ニヨリ、直ニ新納織之丞隊へ加リ防戦致シ候得共終ニ敗北致候付、飯田山ヲ越へ木山本営へ帰ル、然処竹宮(熊本市)口敗軍相成候付応援ヲ乞フニヨリテ、私シニハ一小隊ヲ引率シ急ヲ援候処遂ニ自分ニモ弾丸ニ中リ創ヲ蒙ル、故ニ木山病院へ入り療養相加へ候得共俄ニ平癒不致ニヨリテ、矢部及ヒ馬見原(蘇揚町)・延岡・宮崎病院ヲ歴、終ニ庄内(新城市)へ送ラル、然処当県巡查ヨリ鹿兒島へ官軍上陸諸所へ配兵相成候ニ付此所ニ滞在可致様承候付、十日計リ滞留仕居竊ニ間道ヨリ鹿兒島ノ内郡山花尾(郡山町)厚地村大平門虎之助所ヲ借宅イタシ、養生致シ候処、十月十五日戸長取次ヲ以

警視出張所へ相付帰順自首仕候処、入檻被仰付候、同十七日長崎へ御差送相成候付明十八日長崎へ着船入檻罷在候処、廿二日裁判所ニ於テ一年懲役被仰付十一月三日東京へ御差送相成、同七日着船佃島懲役所へ二泊仕候処、羽後国秋田県へ御差送相成同廿六日到着仕、今日迄懲役仕申候、今般鹿兒島逆徒御征討ノ始末御編輯ニ付、戦地ノ形状可申上旨奉敬承候、然処委曲取寛不申候ニ付大略書記シ差上候也、

明治十一年二月 鹿兒島県第一大区五小区西田  
柴山景盛(四郎兵衛)

七 原田源太上申書

私儀

明治十年二月十日頃区长ヨリ御用有之、区长役所へ罷出候処、此節陸軍大将西郷隆盛・陸軍少将桐野利秋・陸軍少将篠原國幹政府へ尋問之筋有之上京ニ付、第一大隊二番小队半隊長ニテ随行可致旨被申付、不得止承知仕候、然処加治木郷八小队ヲ第一大隊(六番大隊)・國分郷・帖佐郷・山田郷・溝邊郷都合十一小队ヲ第二大隊ト爲シ、二月十五日



午前六時頃ヨリ本営別府晉介、大隊長兒玉強之助、監軍松岡精介・柚木角恒等ノ指揮ニ随ヒ出発イタシ、二月十九日十二時頃熊本県下宮ノ原(宮原町)ヲ通行候処、熊本城ニ当リ焼火ノ黒煙空際ニ蔓延ス、午後三時頃小川へ着宿、翌廿日午前七時頃当所出立正午時分川尻へ着宿、然処他ノ大隊モ追々到着スルニヨリ、第一大隊ヲ六番大隊、第二大隊ヲ七番大隊ト隊号ヲ改ム、今夜十時頃一小隊計リ窮ニ川尻へ押寄せ砲撃致シ候ニ付、不得止本田玄隨隊駆込候処、直ニ散走スルニヨリ銃器三四挺ノ分捕アリ、熊本ノ火焰尚不絶天ヲ焦ス、翌廿一日午後三時頃十一二小隊ヲ(練)操出、其内武五兵衛・水間種美・池田靜治外ニ一小隊合四小隊、別府晉介ノ指揮ニヨリ百貫へ赴ク、然処夜七時比味方ノ斥候へ砲撃イタシ候付、暫ク打合官兵敗走、海軍卒三四名ノ生捕ヲ本営へ送ル、此所ニ於テ両眼鏡・時計・刀三四本・銃器四五挺ノ分捕アリ、味方ノ斥候へ手負・戦死二三人アリ、此処ニ三日哨兵ヲ張ル、外六七小隊(熊本西郷)ハ高橋・榎崎辺へ赴ク、翌廿二日未明熊本城戦争ノ大小砲声夥シク聞ユ、廿三日海軍卒四名バツテラ船ヨリ百貫へ着スルニヨリ之ヲ生捕本営へ送ル、廿五日河内村へ六番大隊ノ五番小隊、六番大隊ノ二番小隊転陣午後六時比

着、廿六日十二時頃バツテラ二艘ヨリ白濱(河内町)へ漕上ルニヨリ、六ノ二番小隊右半隊ヲ池田靜治引キ巖上ニ登リテ、私ニハ左半隊ヲ引キ新田堤へ駆上リ、双方ヨリ烈シク砲発スルニヨリ、船中ヨリ応砲モ不致直ニ去ル、權一本ヲ分取ス、廿七日四時頃四五艘ノ軍艦ヨリ大砲・火矢ヲ頻ニ発ツテ、夜七時比当村大半焼失ス、仍テ二小隊ヲ分配シ新田堤へ伏ス、廿八日例ノ如ク砲発ス、三月一日頃当地ヨリ木留(木留町)へ着スルヤ否ヤ本営村田新八ノ指揮ニヨリ、新納清一郎・水間種美・池田靜治三小隊田原坂ニ赴キ哨兵ヲ張ル、三月三日頃木ノ葉(玉東町)ノ戦争急ナルニヨリ応援トシテ山上ニ駆上リ狙撃候処、官軍岡上ニ登リ横ヨリ撃射ス、仍テ谷ヲ隔テ遠方ヨリ砲戦ス、然処本道ノ守備伊集院權右衛門隊退クニヨリ三門ノ砲ハ地中ニ埋メテ総軍敗潰ス、敗軍ヲ田原へ纏メ軍配シテ哨兵線ヲ張り此地ヲ守ル、然ル処翌朝未明ヨリ官軍敵シク攻撃ス、未台場等ノ備無シト雖トモ必死ニ成リテ防戦ス、然処山鹿口ヨリ石原一郎左衛門外ニ一小隊応援トシテ来ル、石原大砲破裂ニ当リ死ス、六ノ二番小隊ニハ死傷二十名計リナリ、廿一日頃中島健彦田原口本営トナル、廿二日迄十九昼夜ノ連日烈戦、大小砲声如雷彈丸如雨、此間互ニ勝敗アリテ死傷沢

一 秋田県

山ナリ、六ノ二番小隊ニハ残り僅ニ二十余名、銃器等ノ分取アリ、廿二日朝七時比雨霧ニ乗シ官軍窮ニ押寄せ、一ヶ所ヲ打破リ直ニ植木ニ赴ク、植木ニ放火ノ煙上ルヲ見テ之レ蓋シナ、モト七本刃敗レタルナラント、仍テ実地見聞ノ為メ斥候ヲ出ス、此報ニヨリテ初テ敗レタルノ確実ヲ得、各隊評議シテ総軍間道ヨリ鹿ノ子木ヘ引揚ケ、田原口本營ヲ此所ニ直ス、(植木町)向坂ニ於テ大戦争ニ相成リ、四時頃官軍植木ニ敗走ス、官軍ノ死骸阡陌ニ相重ル二百八人ト云フ、味方ノ戦死手負五六名ト聞ク、六ノ二番小隊ヘ生捕一人アリ本營ヘ送ル、廿六日頃扇迫(狭迫カ、植木町)ヘ応援トシテ赴キ遂ニ此所ヲ守リ番兵ヲ張ル、四月三日比植木口味方ヨリ惣進撃スルニヨリ六ノ二番・六ノ五番・六ノ七番小隊ハ早且ヨリ烈シク進撃シ、官軍ヲ破リ十七八ノ台場ヲ乗取リ銃器三四十挺・弾薬万余・足袋六七十足・餅二三俵・土工器械等ノ分捕アリ、官軍ノ死骸モ数多、味方三小隊ノ手負・戦死二十名計リ、戦勝利ヲ得ルト雖トモ各隊進軍ニ不相成故、守リ悪シクシテ軍ヲ元ノ守リヘ退ク、双方台場ヲ敲ニシ守ルニヨリ互ニ破リ難シ、故ニ官軍台場ヲ以迫ル、終ニ距離僅ニ二三十間、六ノ二番小隊ノ守場難所ニシテ白昼往来致シ難ク、夜分弾薬兵糧等運ブニヨリ

兵隊苦痛スト雖、互ニ進撃スルニヨリ銃器・弾薬等ノ分取数多アリ、四月十五日比川尻・熊本・木留・植木・鳥取(西合)等諸所ノ守備都テ(益城町、熊本市)山・長峯(熊本、熊本市)ヘ引揚ケ、鹿ノ子木本營ヲ長峯ニ直ス、御船・竹宮・下南部・上南部等ノ要所ヘ配兵シテ守ル、六ノ二番小隊ニハ下南部ヲ守ル、四月九日頃早朝ヨリ官軍ノ進撃ニヨリ新南部敗レテ長峯迄退クト雖トモ直ニ守返シ元ノ台場ヲ守ル、官軍ノ死骸沢山ナリ、一名ノ生捕ヲ本營ヘ送ル、四斤半炮ノ弾薬二箱・紙管・小銃等ノ分取アリ、然リト雖トモ諸所ノ戦利有ラスシテ今夜深更兵ヲ木山ヘ引揚ケ、翌日午前七時比ヨリ出立矢部ヘ引揚ケ宿陣ス、此所ニ於テ兵隊改制ニ相成総軍ヲ五ツニ分チ、植木口出張ノ兵ヲ振武、城番兵ヲ正義、御船口出張ノ兵ヲ干城、山鹿口出張ノ兵ヲ奇兵、木留口出張ノ兵ヲ行進隊トス、其他熊本県兵アリ、第六番大隊ハ一中隊ニ纏メ振武十一番中隊ト改ム、廿五日頃ヨリ振武隊鹿兒島ニ引直スニヨリ、(十一右小隊長駿島敏介)十一番中隊右半隊ニハ五月二日加治木ヘ着陣、左小隊ニハ蒲生ヘ同日着陣哨兵ヲ張、五十余日此地ヲ守ル、此ノ間軍艦屢々加治木ヘ大砲・火矢ヲ発ツ声雷ノ如ク、弾丸破裂ノ音四方ヘ響クト雖死傷一人モ無ク、味方小銃ナル故之レニ応スルニ術ナシ、他ノ振

武隊ニハ都テ鹿兒島ヘ赴ク、六月廿四日頃鹿兒島大敗、  
總軍吉田・蒲生ヘ引退ク、廿五日比十一番中隊ニハ末吉  
ヘ転陣、廿八日頃志布志ヘ進軍候処官軍既ニ引揚タルヲ  
聞キ、軍ヲ班シ岩川<sup>(大隅町)</sup>ヘ赴クニ、適官軍ト月野ニ出会午前十  
時頃ヨリ戦争ニ相及勝敗不決、夜八時頃ニ至リ軍ヲ岩川  
ヘ引揚宿陣ス、七月二日頃八中隊計リ市成<sup>(輝北町)</sup>ヘ進撃スルヤ、  
正面ハ既ニ懸ラントスル勢ヒヲ見セ反テ背後ノ山手ヨリ  
衝クノ計略ナリト雖トモ、官軍要地ニ抛リ破ル不能、夜十  
二時頃軍ヲ恒吉<sup>(大隅町)</sup>ニ班シ宿陣ス、此日振武十中隊八百引<sup>(輝北町)</sup>ヘ  
懸リ大勝利ヲ得、大砲二門・彈藥・毛布等許多ノ分取アリ  
此処ニ於テ振武十一番中隊ヲ二ツニ分チ、奇兵一番中隊・  
二番中隊トス、七月六日比午前七時比ヨリ奇兵六中隊大  
崎ヘ進撃候処、兼テ敵密ニ柵ヲ結ヒ八方台場ノ設有リテ  
官軍此内ニ籠ルニヨリ、僅一口ヲ明ケ攻ルト雖トモ容易  
ニ進ミ難クシテ抜ク可カラザルヲ知り、且ツ彈藥ハ殆ト  
尽キントスルニヨリ疏擊<sup>(垣)</sup>シテ夜軍ヲ猪俣<sup>(井俣)</sup>ヘ引揚ク、味方  
ノ死傷二三十名、奇兵二番中隊長水間種美戦死ス、此日  
応援ノ振武十中隊ハ途ニテ支ヘラレテ達セス、翌朝六時  
頃ヨリ再大崎ニ進撃候処、途中ニテ官軍ニ支ヘラレ進ム  
コト能ハズ、故ニ喇叭ヲ相図ニシテ惣軍抜刀ヲ打振リ大

音ニテ駈込ミ候処、官軍敗走、逃ルヲ追テ直ニ大崎ニ到  
レハ既ニ潰テ當中人ナシ、今日ノ敗走急ナルニ仍テ駈馳  
スルニ堪ヘズ敷中ニ潜伏スルヲ、私ノ半隊ニテ取囲ミ探  
索イタシ候処、軍曹一名・伍長二名銃劍ヲ以テ刺シ自  
害ス、仍テ銃器一挺・切羽・鉏等ヲ擲ギタル金・地金等ノ分  
捕アリ、爰ニ宿陣ス、七月十四日比当所ヲ引揚末吉ヘ宿  
シ、翌朝六時頃ヨリ嘉例川<sup>(佳例川・榮達共ニ福山町)</sup>・芝立ノ両所ヘ行進隊進撃ス  
ルニヨリ、奇兵六中隊応援トシテ後軍ニ備ヘ進軍候処、  
官軍要所ヲ取り敵ニ防ク、然テ左右ヨリ不図衝出ルニヨ  
リ午後四時比味方敗北ス、敗軍ヲ通山<sup>(財部町)</sup>ヘ纏メ宿陣ス、死  
傷アリ、十九日頃高野<sup>(郡城市)</sup>ヨリ進撃ニ付本營邊見十郎太応援  
ヲ乞フニヨリ、之レニ応シ進軍スト雖トモ黑白不分、夕刻  
ニ至リ遂ニ敗軍ス、兵ヲ高野ニ纏メ宿陣ス、翌廿一日奇  
兵六中隊ヲ莊内<sup>(庄)</sup>ヘ引揚廿二日末吉ヘ転陣、廿三日未明ヨ  
リ二十中隊許リ岩川ヘ進撃、勝敗不決夜総軍末吉ヘ引揚  
宿陣ス、私シニハ奇兵一番中隊左小隊左半隊ヲ引率シ、岩  
川街道ヘ番兵ヲ張ル、然ル処翌朝六時頃官軍頻リニ攻撃  
スルニヨリ、佩刀ヲ抜キ指揮シテ暫時ハ防禦スト雖トモ  
衆寡不敵、且彈藥ハ前日ノ戦争ニ尽キ銃器ハ大半相損ズ  
ルニヨリ、防戦スル不能シテ且戦且走ル、十一時頃ニ至レ

一 秋田県

バ惣軍大敗シ、雜沓奔走四方ニ散乱ス、夫ヨリ私ニハ池田  
靜治ト共ニ諸所ノ山中ニ潜伏シ、八月初旬頃帰宅仕、十  
六日比警視分署へ相付帰順自首仕候、此節鹿兒島逆徒御  
征討ノ始末御編輯ニ付、其事情及戦地ノ形状等ヲ書記シ  
可差上旨奉拜承候処、軼末ノ詳細、戦死手負日限時刻等  
悉ク暗記不仕候ト雖トモ敢テ命ヲ不辭、覺ノ儘概略取調  
べ差上候也、

鹿兒島県下加治木郷第五十九大区

二小区百三十二番地

明治十一年二月

原田源太

八 永田勝馬上申書

鹿兒島一乱ノ事情及戦地ノ形状軼末自己ノ進退等詳細ニ  
筆記シ、早々差出候様、太政官ヨリ御布達ノ旨敬承シ奉  
り候、微軀ノ小任戦場ニ出ル少ク其知ル所記スルニ足ル  
者ナシト雖モ、公命辞スルヲ得ズ録シテ以奉ル、近年洋  
風ノ弊習日ニ蔓延シ国体懼ルベク痛歎スベクシテ、宦家  
モ是ヲ視ザルガ如キヲ疑フ、若シ能ク是ヲ 皇国ノ美習  
ニ挽回スル者アラバ、身命ヲ以国恩ニ報ゼント欲、是平

素ノ志願也、然ルニ明治十年ノ春、陸軍大将西郷隆盛政  
府へ尋問ノ筋アツテ衆ヲ率ヒ上京ス、熊本鎮台谷少将、  
城且四民ノ家ヲ焼事数万、橋ヲ断テ炮ヲ発ツ、物情恟々  
路人織ガ如シ、城中既ニ軍備成り試ニ数千人ヲ以薩人ヲ  
川尻ニ邀撃ス、大将(西郷)少将ト戦フ、何レカ能官賊ヲ分タ  
ン、其上京ノ原因ハ、権臣人ヲシテ隆盛ヲ暗殺セシメン  
ト謀ルニ起ル、其暗殺ノ奸計ハ中原尚雄等ガ口供ニ確然  
タリ、隆盛ノ起ルヤ自己ノ故ヲ以スト雖、姦ヲ糺シ、  
朝廷ヲ清フスルハ則忠ナリ、何ゾ区々ノ小節ヲ事トセン、  
朝廷先ツ清カラバ終ニ挽回ニ至ラン事ヲ謂モヒ、遽ニ熊  
本隊ニ加リ隆盛ニ応ズ、二月二十二日鹿兒島ノ兵、城ニ迫  
ツテ四方ヲ攻ム、熊本隊ハ龍迫谷ノ下ヨリ進ミ、四方ノ  
総軍死力ヲ尽シ少シク段山口ヲ破ルト雖、清正築ク所ノ  
名城ニシテ輒ク抜グ可カラザルヲ以、総テ攻口ヲ寛ロゲ  
熊本隊ハ出京町ニ宿陣ス、然ルニ城ノ応援トシテ鎮台兵  
筑後口ヨリ進入ノ聞ヘアリ、因テ薩軍ハ数隊ヲ残シテ城  
ヲ押ヘ、余ノ総軍ハ城北田原(橋本町)、木留等ニ進軍ス、其進軍  
ニ臨ンデ熊本大隊長池邊吉十郎ノ頼ヲ受、城南春日村ナ  
ル隆盛ノ陣ニ到リシガ、事急ニ弁ゼザルヲ以其傍ニ寓シ、  
時々其陣ニ往キ且説テ曰、鎮台ノ籠ル所名城ト雖、精銳数



佐ニ走ル者二三百、其余ハ久品寺村等ヨリ米穀數百俵ヲ  
 取城ニ入城、兵ノ出ヲ聞ヤ兼テ其覺悟ハ致シツ、本陣ト  
 共ニ敵ヲ尾撃シ、城ヲ屠ラント欲シ、製造ノ數十人ト直  
 ニ馳テ本陣ニ到リシガ、城兵早ク入テ及バズ、吉十郎曰、  
 進テ敵ヲ撃ハ士ノ欲スル処ナレ共彈藥ハ一時モ闕ケ可ラ  
 ザルヲ以戦地ニ出ルヲ留メテ之ヲ依頼ス、此後城ニ乗ル  
 ノ時至ルト雖全軍ノ功ヲ計ツテ製造所ヲ離レザラン事ヲ  
 希フト、故ニ止ム事ヲ得ズ復高橋ニ帰ル、是ヨリ先キ北  
 敵軍艦ニ乗り南方八代ニ上陸ス、味方遽ニ兵ヲ分チ、南  
 ニ駆テ之ヲ拒ギ、利アラズシテ引退キ松橋・宇土モ亦破  
 レ甲佐ヨリ二丁川口(天明町川口)ニ至ル迄、川ヲ融テ炮戦スル事數日、  
 敵勢甚タ熾シナリ、爰ニ於高橋ヨリ書ヲ吉十郎ニ送テ曰、  
 北敵漸減シテ南方益マス強シ、北方ノ台場ニ柵ヲ結ヒ逆  
 茂木ヲ引道路ヲ掘絶チ、一人之ヲ衛レバ万夫モ進ム能ハ  
 ザル嶮ヲ作シ、其兵ノ過半ヲ南方ニ応援シ、強敵ヲ破ル  
 ニシカジ、請薩陣ニ謀レト、其返書ニ、碁石ヲ握ラズシ  
 テハ徒ニ助言トナリ致ス可キ様ナシト云テ、纔ニ楯岡小  
 文吾ノ一小隊ヲ(天明町)学科新地ニ出セシガ、四月十五日味爽遂  
 ニ二丁破レ敵兵流レニ遡テ進ミ、近方ノ村々ヲ放火シ黒  
 煙天ヲ覆ヒ烈火雲ヲ焼キ勢当ル可ラズ、小文吾隊下ヲ指

揮シ横撃、衆寡敵セズ高橋へ退キ、惣軍皆敗レ、兩本陣  
 建軍社ニ転ズル報知ニ付、同ジク転局セントセシガ、共ニ  
 夫卒恐懼狼狽シテ集マラズ、漸ク午時ニ至リ數十人ト高  
 橋ヲ発セシガ、二本木ハ早通路絶タリト聞キ、路ヲ山手ニ  
 取(熊本原)柿原ニ出、龍田山ヲ越、本陣木山ニ在ト聞キ同所ニ到  
 ル、熊本隊モ皆来ル、同十八日熊本隊、鹿兒島其外諸隊  
 ト共ニ御船へ出張、地ノ利悪シクシテ惣軍大ニ敗レ、矢  
 部濱町ニ退キ、其夜敵軍ヲ襲ノ議アリト雖、薩軍一旦引  
 揚ニ決シ、馬見原ヨリ深山幽谷ノ径路ヲ通り、椎葉山中  
(椎葉村)國見峠・胡摩山等ヲ越、羊腸タル嶮路脚踵頂上ニ在ルカ  
 トスレバ人声足下ニ聞フ、折節雨降テ難歩最モ窮リ、且  
 數千ノ人宿スルニ所ナク、山中茅屋ノ擔下牛舎ノ二階兵  
 ナラザル所ナク、稗ヲ食ヒ塩ヲ嘗メ干楚艱難數日ニシテ、  
 人吉ニ至リ、諸隊ト共ニ熊本隊モ人吉ノ南大口口ト北五  
 木口ニ出張ス、人吉ハ其中間ナルヲ以薩陣ノ同局ト共ニ  
 此ニ留リ製造ス、其中隆盛征討ノ命下リ惣督ノ宮御下向  
 ノ聞エアリト雖、浮説巷ニ滿チ未ダ其実ヲ知ラス、却テ  
 敵ノ訛言トシ、益マス製造ヲ励ミ、數人ヲ球磨川ノ上下  
 數里ニ馳、漁網ノ鉛ヲ高価ニ購ヒ、一旦余計ニ得ルト雖  
 限リアル漁網終ニ続キ難キヲ察シ、錫ヲ購ヒ鉛ニ加ル事

半ニシテ製造シ、薩局ニ談シ鉛ヲ以火薬ニ替或ハ分与ヲ  
受ル事多ク、製ヲ努メテ日々大口・五木両口ニ送りシカ  
バ、両口共一旦大ニ勝利ヲ得、大口ハ既ニ海近ク追迫リ、  
五木モ川俣(桑野村)ノ辺迄追退ケ、其後数十日各勝敗アリシカ共、  
錫ヲ加ヘシヨリ彈丸惡シク、遠敵ヲ傷ル事少ナケレバ、  
五月三十日北方遂ニ敗レ、早人吉ニ迫ルニ付一旦大畑(入吉市)ニ  
引揚飯野ニ転シ、故アツテ人吉隊(二心)ノ式ヲ察シ、其防禦場  
ニ到リ視ルニ果シテ一卒ヲ見ズ、大畑ニ過ツテ人吉口鹿  
兒島本陣ニ到リ、村田新八ニ告ゲ、且当時兵士ヲシテ山  
野ニ垣スルガ如ク左右数里ヲ防クハ、数万ノ兵アリト雖  
尚乗ベキノ虚ナキ能ハズ、其虚ヲ窺ヒ急撃ス、此故ニ毎  
戰敗レヲ取ルニアラズヤ、味方地ノ理ニ熟クスレバ、敵  
備敵ナラザル所ヲ諜知シ兵ヲ纏メ間道ヨリ左ヲ衝右ヲ撃  
夜襲朝攻所ヲ定メズ不測ノ突撃致シナハ、其能ク防ク所  
ヲ知らズ、敵モ山野ニ垣スルガ如ク広ク防ザル事能ハザ  
ランカ、是地ヲ替勢ヲ變ズル策ニシテ拒クニ敗レ易ク攻  
ルニ利アル処ナリト云シカ共、今彈藥足ラズ、不日大数  
ヲ得ントス、得バ則進撃セント云ヲ返シテ、兵ハ糧尚敵  
ニ憑ル、況ヤ彈藥ヲヤ、一勝數ヲヲ得ント云シカド遂ニ  
聽レズ、翌日飯野ニ歸ル、飯野ニ在ル処ノ薩ノ同局高岡

ニ移ルヲ以、一旦同シク転ゼシガ、大口遠ク隔ルヲ以局  
ヲ隅州幸田(栗野町)ニ移シ、鉛錫乏シキニ付日州宮崎ニ到リ、桐  
野利秋ニ求テ得ズ、又隅州横川(横川町)ニ返リ桂久武ニ求メシニ、  
鉛乏シウシテ錫許多ヲ分与ス、其後錫亦乏シク、久武周  
旋、令ヲ薩・隅ニ下シ錫器ヲ集メ又是ヲ分与ス、大畑・  
加久藤(えびの市)ノ破ル、ヤ遠ク大口ノ軍威ヲ減ギ、惣軍敗レ、熊  
本隊(兼刈町)ハ本城ニ退キ川内河ノ上流ヲ前ニセシガ、遙ノ川下  
不意ニ破レ諸所皆潰タリト報知ス、依テ局ヲ隅ニ転ス、  
其後諸隊連戦利アラズ、故ニ隅ヲ退キ莊内(牧園町)ヲ通り都ノ城  
ヲ過ギ遂ニ藪池村(二股町)ニ転局ス、爰ニ至テ錫器亦殆ト竭キ分  
与ヲ得ザレバ止事ヲ得ズシテ鍛冶師ニ命シ、鉄ヲ以彈丸  
ヲ鍊ヒ、鑄師ニ命シ鍋釜ヲ以同ク鎔セントス、然レ共兩  
師皆已ニ薩陣ニ役セラレ、数里ノ外ニ求メ老羸纒ニ三四  
人ヲ得タレ共、一日一人ノ鍊スル処彈丸百數十ニ過ズ、  
局中少シク鍛鍊ニ習ヘルニ三人アリ、之ヲ合テ六七人一  
日鍊丸千ニ滿ズ、薩陣ニ鉄ノ鎔丸ヲ乞トモ得ル事僅ニ千  
許、彈藥ノ多少ハ則勝敗ノ係ル処、責其局ニアリ、是ヲ  
以局中百法手ヲ尽シ大ニ心ヲ傷マシム、熊本隊ハ所々ノ  
苦戦ヲ経テ財部又八十文字等ニ防戦スル事十余日、莊内  
不意ニ破レテ十文字等モ亦敗レヌト云テ藪池ニ來ル者數

十輩、共ニ山ノ口ニ退キ加久貫・清武ノ中ノ村ヲ過キ官  
 崎川ヲ渡リ、佐土原・高鍋・都野・美々津ヲ経テ、遂ニ  
 延岡ニ到ル、其来ルヤ路傍並木ノ松ヲ伐リ大砲ヲ造ル者  
 數十ヶ所、既ニ成ル者アリ未ダ成ラザル者アリ、嗚呼其  
 軍小銃ハ鉄丸スラ尚足ラズ、大砲ハ遽ニ木ヲ用ヒテ、軍  
 器全備ノ兵ニ抗ス、其敗ルモ亦宜ナル哉、熊本隊ハ尚又  
 所々ニ苦戦シ、乱軍中吉十郎ノ生死ヲ知ラズ、山崎定平  
 代理シテ軍士ヲ纏メ、退テ門川ニ拒キ、書翰ヲ延岡ニ飛  
 シ、監軍兼務ヲ頼ムニ会ヒ謂ラク、製造所ハ毎ニ遠ク戦  
 地ヲ離レ、監軍ハ必ず戦地ニアラン、兩任務ム可ラズ、  
 何レ一方ヲ辞セント、馳テ門川ニ到ル、門川既ニ破レ本  
 陣退キ来ルニ逢フ、行ユク其辞セン事ヲ請、定平曰、急  
 迫ノ際はヲ如何、延岡ニ到テ再議セント、共ニ散兵ヲ纏  
 メ八月十二日深夜延岡ニ到リ、曾木口ノ破レヲ知ラズ、  
 朝食未ダ終ラザルニ敵兵曾木口ヨリ進ミ銃丸雨ノ注ガ如  
 シ、暫ク拒テ中隊長可児才八重創ヲ受且地形終ニ克ツ可  
 ラザレバ又退テ和田峠ニ屯ス、薩軍嘗テ急使ヲ豊後口ニ  
 馳應援ヲ求ム、豊後口ノ兵ハ初馬見原ヨリ人吉ニ退ク途  
 中ヨリ、薩陣隊ヲ分チ向ハシムル者ナリ、其兵今夜着ス  
 ルヲ待チ惣軍進撃、延岡ヲ復セントスルヲ聞、定平ニ謂

曰、味方大ニ蹙ス、大勝利ヲ謀ラズンバ終ニ手足ヲ措ク  
 所無シ、豊後口ヨリ来ル所ノ兵ヲ竊ニ間道ヨリ延岡ノ後  
 ニ廻シ、火ヲ放チ襲撃セシメ、其炮声ヲ聞ヤ惣兵一同山  
 上ヨリ落シ駆バ、敵兵前後ニ狼狽シ、延岡ヲ復スルノミ  
 ナラズ遠ク数里ノ外ニ追シ、請之ヲ薩陣ニ謀ランヤ、定  
 平薩陣ニ到リシカド豊後口ノ兵明テ後來ル、噫此際ニ膺  
 ツテ機ヲ失ス、天欽命欽壯士再謀ヲ待ズ混々駈リニ山上  
 ヨリ馳下リ、敵ノ左翼ヲ攻撃ス、敵銃雨注シテ之ヲ拘ミ  
 却テ右翼ヲ縦ツテ山下・田中ノ一路ヲ押シ山ヲ衝ク、山上  
 拒兵大ニ少シト雖精ヲ勵マシ銃撃ス、然レ共鉄丸大ニ違  
 ヒ敵ニ近ク稀ナレバ、敵直ニ間道ヨリ峠ニ迫リ銃丸暴雨  
 ノ如シ、桐野利秋・村田新八等衆ヲ勵マシ兵亦猛奮スト  
 雖衆寡敵セス、山上破レテ進軍ノ兵全キ能ハズ、定平モ  
 重創ヲ受遂ニ惣軍長井村ニ退キ、爰ニ於征討ノ命下リ宮  
 御下向ノ実ナルヲ聞、初テ真ニ官軍ニ抗スルヲ知り恐縮  
 其為ノ所ヲ知ラズ、其誤チ固ヨリ憂國ノ情切ナルニ出ル  
 ト雖諷ニ干戈ヲ動シ、官軍ニ抗スルハ実ニ臣道ヲ失シ深  
 ク恐入り、直ニ死ヲ以謝シ奉ラン事ヲ思フ、然レ共死ヲ  
 擅ニスルモ亦罪アリ、且誰カ能其素懷ヲ述ンヤ、故ニ八  
 月十七日熊本全隊ト共ニ直ニ官軍ニ帰順シ命ヲ待奉リシ



ガ、実ニ寛容ノ公裁益 天恩ノ渥キ其言ン処ヲ知ラズ深  
ク前非ヲ後悔ス、前条至急ノ公命匆卒謾語ノ筆記必ズ不  
敬ノ言ノミアラン、且其事実ヲ主トスルヲ以敢テ忌諱ヲ  
憚ラズ、又時日ノ誤謬モ知ル可ラズシテ之ヲ正スニ違ア  
ラス、万緒伏テ高免ヲ仰キ奉リ候也、

熊本県第三大区九小区

当時秋田県懲役人

明治十一年二月

永田勝馬

## 九 松下恕輔上申書

兼テ私学校エハ入校不仕候得共、昨年五月十二日重久  
某ナル者、日州諸県郡吉田郷(えびの市)ヨリ急速致募兵夜白吉田  
郷エ出発致スベク、鹿兒島巡查并戸長方エ申来リ候ニ  
付、踊郷ヨリ四十名夜白吉田郷エ差越、重久方エ届出  
申候処、同所ニ他郷ヨリノ人員モ相揃、都合百五十名  
ヲ一小隊トシ、同十四日重久ノ指揮ニ随ヒ、人吉本營  
エ差越届出候処、拾壹番大隊一番小队ノ分隊長ニ命セ  
ラレ、小隊長ハ小田原眞幸、半隊長ハ黒岩慶之助ニテ  
御座候、

一同十五日人吉ノ内大槻村ト申所エ可相固本營ヨリ申付  
候ニ付、直ニ差越相守居候処、同月下旬頃雷撃四番中

隊ト編制ニ及、中隊長赤塚源太郎、左小隊長大重兼輝  
他ヨリ操入相成、私儀ハ黒岩慶之助病氣ニ付左半隊長  
ニ上ラル、木佐貫愛助同分隊長トナル、右小隊長小田  
原眞幸、同半隊長河野精一、同分隊長西助之丞ト決議  
ニ及候事、

一五月廿七日頃右守場エ官軍進撃ニ相成、直ニ外隊固場  
ヨリ破レ敗走中神ト申所エ引揚ケ、台場ヲ築キ八中隊  
ニテ相固居候処、赤塚源太郎脱走行衛不相知候事、

一六月三日八時頃ヨリ右固場エ官軍襲来テ互ニ炮発候処  
小隊長小田原眞幸兵士老名戦死、十時頃迄戦争候処遂  
ニ拾町程官軍引退、銃二挺ヲ分捕官兵五名戦死遺骸相  
見得居候、其内ノ戦ハ勝利ヲ得本ノ守エ引揚テ相固居  
候事、

一同四日官軍大進撃ニテ各所相破レ、人吉町エ放火シ激  
戦致候処、大隊長淵邊軍平・小隊長小田原眞幸、其外  
兵士三名位戦死、三時間計戦争ノ処遂ニ敗走大畑エ引  
揚相成、小隊長大重兼輝、赤塚源太郎後ヲ受ケテ中隊  
長トナル、私ニモ操上ラレテ左小隊長トナル、木佐貫

愛助同半隊長トナル、山内尚盛同分隊長トナル、

一同十二日午前七時頃ヨリ官軍大畑エ大進撃、翌十三日

十二時頃迄激戦候処、手負等数多有之遂ニ敗走、日州

加久藤(えびの市)山ト申所ニテ亦々同日午後二時頃迄戦争、味

方兵士六名戦死、夫ヨリ飯野郷(えびの市)エ引揚ケ川ヲ隔テ、互

ニ台場ヲ築キ、八中隊ニテ毎日毎夜大小炮ノ戦ニテ、

実困窮セリ、該所ヲ守ルコト殆ント三拾余日、然処七

月十一日午前八時頃官軍大進撃一時間計戦争候処、外

隊ヨリ相破レ可引揚旨本営ヨリ報知有之、高原(高原町)エ引揚

居候処翌十三日午前八時頃官軍大進撃、直ニ敗走高城

迄引揚ケ台場ヲ築キ守ヲ付居候事、

一 七月廿日頃高城ヨリ八中隊、都城口ヨリ拾中隊位高原

エ進撃致候処、官軍敵重台場ヲ築キ相固居激戦時ヲ移

ス、終ニ高原麓エ引退キ候ニ付、程ナク官軍敗走シ台

場ヲ乗取り高城ノ様帰陣、官軍死傷不相知、我死傷等

ノ者全ク無之事、

一同廿二日晩十二時頃ヨリ亦々高原エ一昨日同断双方ヨ

リ進撃相掛戦争候処、戦ヒ利アラスシテ午後二時頃高

城エ引退ク、其日ノ戦ヒニ兵士二名即死手負モ亦不少

候、高城郷ノ儀ハ守場不宜候ニ付、八月一日高岡(高岡町)去川

ト申処エ引揚ケ守ヲ付居候処、死傷或ハ平病等ニテ兵士僅廿名位相成、其上野尻郷相破レ官軍ニ包マレ山中ニ五日位潜伏致候処、乍漸高原エ出抜候事、

一 八月九日帰宅、翌十日踊郷分署ニ於テ帰順自首仕候処、

自宅謹慎被申付相慎ミ居申候処、同月廿九日鹿兒島エ

護送相成入檻罷在候処、九月一日日州表ヨリ賊兵再ヒ

襲来、所々放火炮声盛ナルニ依テ何人ニテ候哉、檻戸

ヲ明ケ候故出檻シ同三日帰家、県庁并國分警視所エ戸

長ヲ以テ形行届申出置候事、

一 九月卅一日亦々鹿兒島エ巡查護送相成候処入檻被申付、

十月一日長崎エ御廻シ相成、同廿二日同所於裁判所懲

役三年ノ命ヲ蒙リ申候、此段御調ニ付御届申上候也、

鹿兒島県第六拾四大区小一区

踊郷

明治十一年寅二月 松下恕輔

一〇 山下雄次郎上申書

今般西郷隆盛上京ニ付私学校エ入校致シ、明治十年丑二

月十三日鹿兒島ニ於テ第三番大隊六番小队兵士ニ編入、  
(本山第一部隊)

小隊長町田權左衛門・半隊長長崎金兵衛・分隊長面高源之丞等ノ指揮ヲ受ケ、同月十六日鹿兒島ヲ出發シ肥後熊本エ着、其晚ヨリ西岸川原ヲ相守リ、同月廿七日ヨリ出町口ニ転シ、三月廿一日晚ヨリ官軍進撃ニ相掛リ互ニ撃戦ス、味方本道敗レテ横矢ヲ討レ終ニ五六町程引退キ、直ニ台場ヲ築キ防戦ス、官兵戦死・手負不相分、味方戦死・手負拾余名有之候、四月十四日迄相堅居候、其夜ヨリ木山町エ引揚ケ、四月廿日竹宮ト申所エ応援ヲ命セラレ午前七時頃ヨリ長嶺ヲ始ト戦フ、已ニシテ原中ニテ大ニ戦フ、午前三時頃遂ニ疵ヲ蒙リ戦央ニシテ引退ク、其後チ幾ハクモ無シテ味方敗走ス、官軍並味方戦死・手負多シト雖モ不詳、同月廿三日矢邊ノ濱町ヨリ帰県ス、七月中旬頃市來郷戸長役所ニ於テ警部方エ帰順自首仕候処、自宅謹慎被申付謹慎中ニテ御座候得共、九月一日ヨリ鹿兒島ノ方炮声炮火ノ向ト伺ハレシガ、同月二日朝、賊ノ本營ヨリ、九月一日本県エ切出候ニ付有志ノ面々ハ其郷々ニ於テ、巡查等ハ捕縛致シ早々出鹿致ベク云々ノ廻達相廻候ニ付前後ヲ不願勢ヒニ乗シ之ニ相応シ出鹿セント欲シ、午前七時頃出足、兄山下孝右衛門宅ニ立寄候処、巡查躰ト見受ル者兩人相來リ、孝右衛門ハ元隊長セシ者ナルガ故捕

縛ノ為來候ハンカト疑ヒ、兄ト共ニ追掛候、終ニ市來城内チ道リニテ追付候処、何タル言葉モナク直ニ討掛候ニ付、一名ハ私討果シ一名ハ兄唐鎌岩助捕縛致シ相札候処、討果候一名ハ巡查ヨリ頼入ノ探索人ニテ候、自分儀ハ四等巡查里見某ト申者ナリト承申、依之唐鎌岩助ト兩人ニテ護送致シ鹿兒島本營エ着、直ニ罷歸リ前非悔悟仕市來郷分署エ自首仕候処、谷山郷エ護送ニ相成、遂ニ長崎臨時裁判所ニ於テ懲役ノ命ヲ蒙リ候、此段申上候也、

鹿兒島県下日置郡市來郷

第貳拾三大区四小区

明治十一年二月

山下雄次郎

### 一 宮春政右衛門上申書

明治十年五月出軍タル哉、鹿兒島上町戸長ノ申付ニ固リ、夫卒トナリ日州延岡ノ内永江村迄到リ、於同所ニ降伏仕候処、自宅謹慎被仰付八月廿八日帰区謹慎罷在候処、賊軍再ヒ鹿兒島襲來ニ付、右戸長ノ下知ニ從テ出、兵糧旁々ノ都合仕、賊軍ニ贈ル、尤戦地形状等ハ夫卒ノ事ニテ不詳、九月中旬入檻、十月長崎転檻、同廿二日三年懲役

ノ命ヲ蒙リ申候也、

鹿兒島県下第三大区小十五区

四十番地

明治十一年二月

宮春政右衛門

二 上野幸吉郎上申書

私儀

兼而私学校エ不致入校候得共、明治十年三月十九日鹿兒島士族鎌田十太郎当区エ差入募兵ニテ、翌廿日出発シ肥後国人吉城下エ赴キ三月廿六日着シ、同廿八日立、曾見村ト云フ処エ着ス、即刻ヨリ当所番兵一週間位守居、四月三日亦々人吉城下エ赴キ候処暮時分着ス、同四日早天隊組有之、十番大隊五番小隊兵士ニ編入セラレ、隊長法元榮介、半隊長前原俊介、分隊長福山善吉ナリ、則チ<sup>(五木村)</sup>頭地<sup>(坂本村)</sup>ト云フ処迄出発、今夜当所エ一泊、翌五日八代之内坂元村エ一泊、翌六日早天小川村エ転シ候処、午前十時頃候半着ス、即ヨリ進撃ニテ奮戦致候処勝敗ニテ味方戦死・手負六名、官兵即死五六名ハ見受ル、其外戦死・手負不相分、<sup>(八代市)</sup>残兵既ニ妙見山エ追上ケ又戦ヒヲ始ム、其夜中互ニ炮戦

ス、明方妙見山台場追下シ悉ク官ノ台場ヲ乗取、同七日官兵進撃相掛リ一昼夜戦ヒ味方勝利ニテ戦死・手負之ナク、官兵敗走ニテ何方エ引去リ候モ不相分、時ニ彈藥四箱・喇叭一ツ分捕致候、翌廿七日午前七時頃官兵大進撃ニテ味方小之瀬村ト云フ所エ引揚ケ相成、同八日滞陣ス、然ルニ翌九日ヨリ平病ニテ人吉病院エ入り廿日余療養ヲ加フ、五月八日出立翌九日帰着ス、同年八月一日立、水引分署エ相付先非悔悟帰順自首仕候、依テ自宅謹慎被申付謹慎中候処、九月三日当区相良次郎兵衛川内向田ヨリ馳歸リ、賊兵再ヒ鹿兒島エ襲来リ近日川内表ニモ操込<sup>(總)</sup>近区動搖ノ趣報知スルニ依テ、旧出兵人数集會一先虚実為探索、私共七名隈之城エ出発シ、途中ニテ隈之城士族愛甲仲介ニ行逢ヒ承ルニ、<sup>(川内市)</sup>京泊港エ巡查三百名余乗船ニテ相掛居候ニ付、当区ノ人数ヲ以テハ捕縛覚束ナクユエ、其区内ヨリモ早々參リ呉候様承リ、夫ヨリ馳歸リ衆人エ報知ス、一統一度帰順致シ候上右等ノ企不宣ト決シ、一統帰宅謹慎罷居候処、同廿七日水引分署ヨリ御用有之御調之上於長崎私始メ七名、隈之城迄出張致シ候科ニ依テ懲役被申付候也、

鹿兒島県下第廿七大区一小区

明治十一年二月

上野幸吉郎

一三 石塚七十郎上申書

私儀

兼テ私学校エハ入校不致候処、明治十年丑四月八日区長ヨリ出発可致旨被相達、隊組仕候節小隊長ト成、半隊長松下助一、分隊長川村金藏、兵士八拾八名引列発足、鹿兒島内尾(維業村)前賊本営阿多壯五郎エ届出候処、遊軍拾五番隊被申付、向山(維業村)可相固承知致シ相守居候処、五月廿一日五家口ヨリ午前八時頃官軍襲来戦争致シ候処、賊敗走ニテ午後二時頃尾八重迄引揚候、戦死四名、手負三名有之候、

一 五月廿二日ヨリ尾八重エ台場ヲ築キ相守居候処、同月廿九日頃官軍双方ヨリ責奇候向キニテ、早々可引揚旨報知有之、直様湯山エ引揚候、

一 五月三十日ヨリ湯山エ台場ヲ築キ相守居候処、六月十日頃江代相破レ候ニ付岩野エ引揚候様報知即引退申候、

一 六月十一日頃岩野エ官軍相見得候ニ付六小队ニテ午前

八時ヨリ進撃候処、賊敗走ニテ米良西八重迄引揚候、戦死一名、手負二名有之候、

一 六月十二日ヨリ横野エ配兵可致旨承、直様差越六日程相守居候処、木浦(西米良村)ト申所エ可差越段申来差越申候、

一 六月十八日ヨリ木浦エ台場ヲ築キ十五日程相守居候処本営西八重相守居候処、七月五日頃横谷エ官軍台場ヲ築キ相固メ居候ニ付、九時頃賊ヨリ進撃候得共勝敗

不相分、本ノ西八重エ引揚矢張相固メ居候処、七月十日頃官軍襲来戦争致シ候処、賊敗走ニテ米良旧城下小川迄引退申候、

一 七月十一日ヨリ小川相守居候処、干城四番中隊ト改隊相成候折、中隊長ト成り、右小队長松下助一エ被命、半隊長前原孫左衛門、分隊長山元當藏、左小队長乙守宗雄、半隊長津崎英七ニテ候、

一 七月十九日頃小川之内雨包峠エ官軍台場ヲ築キ相固居候ニ付、賊八中队ニテ午前六時頃双方ヨリ進撃候処、直二官軍ヲ追落シ互ニ相戦賊敗走ニテ、右ノ台場ヲ被守返小川迄引退候処、無間責来及戦争ニ賊敗走ニテ午後八時頃腰野エ引退候、

一 七月廿日ヨリ腰野相固メ居候処、同廿三日銀鏡エ差越

一 秋 田 県

相守候様申来リ差越相守居候処、官軍襲来候ニ付、前  
非悔悟改心致シ其場ヲ脱、兵士六名召列八月十八日帰  
県仕、所分署エ帰順書差出降伏仕候処、自宅謹慎被仰  
付罷在候処、分署ヨリ御用ニ付罷出候処、鹿兒島警視  
所エ可被差廻段承知仕護送相成候処、檻倉へ入檻相成  
候、然処九月一日長崎之様被差廻、十月廿二日同所於  
裁判ニ三年懲役ノ命ヲ蒙リ候、此段形行御届申上候、  
以上、

明治十一年二月

石塚七十郎

鹿兒島県下第六拾大区四小区

國分郷

一四 土屋富之進上申書

兼テ私学校党ニ無御座候得共、西郷隆盛上京ノ勢ニ乗シ  
私儀

明治十年丑二月十一日鹿兒島私学(校脱カ)ニ入校シ、同十四日四(編野)

番大隊七番小隊長石原市郎右衛門、半隊長市來矢之輔、

分隊長二禮喜右衛門隊下ニ加入シ、同十六日鹿兒島ヲ発

シ、同廿二日熊本川尻着、直ニ熊本城ニ向ヒ進撃シ同隊

ノ兵士壹名銃創ヲ受申候、同夜植木ニ出張、到ル頃ニ天  
既ニ明ク、于時木(玉原町)ノ葉方ニ当リ銃声響ヲ以テ応援ノ為メ  
出張シ、同所山嶺ニ登リ横撃スルニ依リ官軍進ムヲ得ス  
シテ退ク、同所町口ニ到リ(鎮台兵)黄帽ノ伍長壹名、兵士四五名  
戦死ノ遺骸有之申候、此ノ日銃器・彈藥等分取其數無算  
ナリ、夜ニ入り植木ニ引揚ケ、同廿三日山鹿ニ出張、同廿  
六日官軍襲来ル、直ニ銃戦ヲ開キ官軍大敗シテ退ク、追撃  
接戦大勝利ヲ得申候、此日官兵ノ遺骸百余名ト見認申候、  
器械・彈藥等分取無算ナリ、同隊ノ戦死六七名御座候、  
同廿七日南ノ關ニ出張途中岩村(三加和町)ノ銃声ヲ聞キ応援シ味方  
敗走山鹿ニ退ク、同廿八日田原ニ出張、直ニ戦争相始リ、  
両軍ノ銃炮山野ニ轟キ雨霰雪雹劇戦日一日ヨリモ劇シ、  
同卅日頃ニ到リ官兵三小队許、左半隊ノ台場ニ向ヒ進ミ  
来ルト雖トモ遂ニ能ハスシテ退キ、右半隊ノ目下ヲ過ヲ  
見認メ連発狙撃シ五十余名位ヲ倒シ申候、三月二日頃官  
軍榴彈ヲ発スル雷ノ如ク味方防禦ニ甚々苦ム、同四日頃  
右半隊接戦、刀ヲ掉テ進ミ官兵三十余名ヲ倒セリ、味方ノ  
死傷廿余名、此日分取銃器二十挺位ナリ、是ヨリ廿日ニ到  
ル昼夜劇戦歎ム時無く、実ニ前後未嘗有之役ニテ御座候、  
同廿日ニ番大隊七番小队敗ヲ取り味方全軍ニ波及シ、遂

ニ田原ヲ引揚、途中狼狽隊伍ヲ乱シ、味取町(植木町)ニ到リ漸ク

同隊十二名ヲ得タリ、于時官軍植木ニ進ミ炮声相響クニ

依リ他隊ニ加リ直ニ植木ニ向ヒ進撃、遂ニ彈藥余殆無キ

ニ到リ止ムヲ得ス大津路ニ出テ田村ニ餉シ、熊本正雲院

町ニ到リ同隊給養ニ行逢ヒ植木ノ形状ヲ聞キ、猶又植木

ニ趣キ申候処、赤帽近衛兵ノ遺骸路傍畑畦ニ嘔咽シ殆ト

三百余名ト見認申候、同廿二日頃分隊長木村壽之進ニ隨

ヒ木留(植木町)ニ応援ス、于時敵味方ノ距離纒四五間ニテ礮戦士

争突ニ愉快ノ事ニテ御座候、是ニ於テ漸ク本隊相纏リ申

候、同廿五日味方大進撃有之、同隊ハ接戦ニ懸リ稍近ツキ

申候得共、官軍堅固銃丸雨注進ム能ハス、倅ヒ掘穴ヲ得

潜伏ス、于時二拾九名耳、夜ニ入り漸ク本隊ニ歸リ申候

処、本日味方戦死五拾名位ニテ御座候、同廿七日一番大

隊八番小隊苦戦ニテ直ニ応援シ、官軍三拾余名ヲ倒シ銃

器十挺余分取御座候、味方戦死分隊長木村壽之進、兵士

六七名ニテ御座候、同廿八日味爽銃創ヲ受ケ木山病院(益城町)ニ

投シ、四月一日帰県治療ヲ加エ、八月廿八日前非悔悟降

伏書差出自宅謹慎ノ命ヲ蒙リ相慎ミ居申候処、同所副戸

長中村某ノ招キニ応シ罷越越出兵ノ勲舞ヲ受ケ衆議中、

戸長方ヨリ出兵ノ儀差留メ来リ申候、何レモ帰家シ謹慎

罷在申候処、水引大小路町警視所ニ御呼出ニ相成、遂ニ

長崎臨時裁判所ニ於テ二年懲役ノ命ヲ蒙リ申候、私出兵

中ノ顛末如斯御座候事、

鹿兒島県下第廿六大区三小区

高江郷久見崎村

土屋富之進

明治十一年第二月

一五 杉原芝平上申書

隱居ニテ兼テ熊本ヨリ行程二里、下松尾村(熊本市海津)エ居住罷在候

処、明治十年二月十九日熊本城焼失、同廿日暮頃ヨリ熊

本中所々類焼土民ノ巷説不穩、同廿一日熊本本宅エ罷越

候処、当代杉原堅也(熊本市北郷)儀岩立村大木某ノ邸ニ参居候由ニ付

直ニ同所ニ罷越候処、今般西郷隆盛 朝廷エ尋問ノ趣有

之大兵ヲ率ヒ上京、今明日当地エ着ノ由、依之熊本県士

族池邊吉十郎等ノ誘ヒニ依リ当県士族所々エ集会、鞏下

保護ノ為上京致ベクトノ趣ニテ、当所エモ百二三十名集

会致居候、右ノ趣堅也ヨリ申聞、同意上京可致段頻ニ相

勸候ニ付、尤ノ儀ニ存其勸ニ応シ候、右百余名十番・十

一 秋田県

一番ト二小隊ニ編制、自分儀八十一番小隊兵士ニ編入被  
致候、十番小隊長原田十次郎、半隊長菅十洲、十一番小  
隊長遠坂關内、半隊長下河邊次郎太郎、同廿二日薩軍既  
ニ熊本城ニ掛リ戦端ヲ開キ候ニ付、上京ノ儀打變リ、同  
廿五日木留ニ出張、此際ニ臨ミ不同意ト申訳ニモ到リ兼、  
勢ヒ不得止一同出張致候、同廿六日寺田<sup>(五名市)</sup>エ出兵初テ官軍  
ニ抗敵、散々ニ敗走大久保ニ引揚ル、半隊長菅十洲・伍  
長林弾八・伊東勝清・斥候雨森糟一・平野新八郎其外十  
余名戦死、手負モ数名有之候、同廿七日猶木留ニ出張、  
隊長原田十次郎、遠坂關内足痛差起リ候ニ付、十番小隊  
長榎岡小七郎、半隊長筑紫彌一、分隊長餘田朔朗、十一  
番小隊長下河邊次郎太郎、半隊長船津東平、分隊長自分  
罷成候、三月一日下瀬村<sup>(天本町)</sup>エ出張、地形悪シク翌日大多尾<sup>(河内町)</sup>  
越ニ引揚三番・七番隊薩軍モ共ニ同所ヲ守ル事十余日、  
諸方ノ火ノ手炮声無止時当所ハ無事也、三月中旬七本戦<sup>(榎本町)</sup>  
地ニ出兵、三番・七番・九番隊共ニ其儘戦争薩兵モ大勢  
也、同十五日味方台場ヲ離レ進撃切入、官軍ノ台場二三  
ヶ所乘取り候得共、味方不統遂ニ元ノ台場ニ引揚、隊長  
榎岡小七郎・半隊長船津東平・分隊長餘田朔朗其外十余  
名戦死、半隊長筑紫彌一其外数名手負有之、官軍モ大分

倒レ候様ニ見受候、同十八日官軍台場ヲ離レ進撃候処、  
思程引受ケ遂是ヲ打退、此節三四十名モ打倒シ候様ニ見  
受候、味方手負一名、都合七晝夜程無止戦争、同廿日台  
場交代七本ト村ニ休兵罷在候処、官軍雨天ニ乘シ進撃味  
方遂ニ敗、既ニ村ニ火掛候ニ付其儘間道ヨリ御馬下ニ引  
揚、同廿二日野出ニ出張、此節十番・十一番合隊下河邊  
次郎太郎小隊長ト成、自分儀半隊長ト成ル、江口彌三分  
隊長ト成同所ニ守ル事十余日、諸方ノ炮声無止時当所ハ  
無事也、四月中旬三ノ嶽<sup>(河内町)</sup>ニ交代守ル事四五日、遠矢少々掛  
候迄也、同中旬川尻味方敗レ惣軍木山ニ引揚、翌日辛川村<sup>(菊陽町)</sup>  
ニ出兵守ル事三四日、官軍ヨリ大炮少々掛候迄ニテ無事、  
同下旬諸方ノ味方敗レ惣軍矢部ニ引揚ル、熊本隊ハ男成<sup>(本郷町)</sup>  
ト云所ニ纏メ、五中隊ニ編製、自分儀ハ五番中隊ト成、  
牧紫謙十郎中隊長ト成、中村信雄中隊副長ト成、猿木勝  
馬・林政八・石原保茂幹事ト成、下河邊次郎太郎右小隊  
長ト成、江口彌三平隊長ト成、自分儀左小隊長ト成、辞  
シテ斥候ト成、水野治平左小隊長ト成、加藤民七郎半隊  
長ト成、同所ニ三四日滞陣、四月下旬馬見原ヨリ椎葉山<sup>(麻陽町)</sup>  
等ノ難所ヲ越、五月上旬人吉エ到ル、猶又分隊長ト成、  
吉田傳太左分隊長ト成、同上旬遠ノ原<sup>(球磨村)</sup>ニ出兵、夫ヨリ道



モ無キ深山ヲ越薩摩国山野<sup>(大口市)</sup>ニ進撃、戦争最中ニテ炮声聞  
ヘ火ノ手等見得ル山ノ手ヨリ卸シ掛候節ハ味方勝利官軍  
引退ク、翌日跡ヲ追テ薩兵共ニ肥後国水俣エ進撃、同中  
旬<sup>(水俣市)</sup>深川ニテ官軍進撃、味方弾薬乏遂ニ台場ヲ乗取ラレ敗  
テ少シ引退ク、此節当代杉原堅也其外五六名戦死、小隊長  
下河邊次郎太郎・半隊長江口彌三其外三四名手負、下河  
邊跡自分小隊長ト成、西澤彌平太半隊長ト成、猶久木野<sup>(永保市)</sup>  
ニ引揚台場ヲ築キ守ル事十余日、一日官軍左小隊ノ受持  
場ニ掛ル、自分隊ヲ引キ応援ニ出半日程戦争遂ニ打退ク、  
此節官軍十名程打倒レ候様ニ見受候、六月上旬諸方ノ味  
方敗、薩摩国大口ニ引ク、翌日猶石河内エ出張守ル事四  
五日、官軍ヨリ大砲少々打掛候迄也、脇ノ手敗同所ヲ引  
官軍追撃、高隈山<sup>(高隈山、大口市)</sup>ニ取登リ台場ヲ築キ是ヲ防ク、官軍大  
砲数門ヲ以テ無間モ日々打立ル台場ヲ打崩ス、味方甚難  
儀ニ及、六月中旬官軍夜襲味方遂ニ敗大口ニ引、猶進撃盛  
返シ大ニ苦戦ス、中隊副長中村信雄・斥候神足少五郎・  
安野形馬等手負、戦死二名、又敗大隅国本城<sup>(兼刈町)</sup>ニ引揚守ル  
事十日許、脇手敗同所ヲ引ク、官軍追撃横川ニ於テ防戦  
遂ニ敗隔二引、同所ニ守ル事十日許リ、七月中旬脇手敗  
襲山エ引、翌日官軍進撃味方ヨリモ進撃、自分隊ハ大久

保ト云所ニテ戦争、左右手敗不得止引揚、同月下旬日向  
国<sup>(財部町)</sup>十文字ニ出張、官軍進撃兩日戦争、味方惣敗軍ニテ山  
ノ口エ引、同下旬時雨野<sup>(宮崎市)</sup>ニ出兵薩軍ヨリ応援ノ依頼ヲ受  
直ニ操出戦争、共ニ敗テ柏田<sup>(宮崎市)</sup>ニ引、左小隊長水野治平戦  
死、同所ヨリ病氣差起病院エ入院致候間、其後ノ形勢一  
切存不申、八月十七日向国長井村<sup>(北川町)</sup>ニ於テ隊中一同帰順  
仕、宮崎ニ於テ自宅謹慎被仰付罷帰候、中途ヨリ巡查護  
送ニテ熊本エ入檻、十月六日懲役三年被仰付、同九日長  
崎エ護送、同十四日同所エ着、十一月三日同所出帆、同  
七日東京エ着、同九日東京被差立同廿六日当所懲役所エ  
護送ニ相成候、出兵後ノ願末如斯御座候也、

熊本県下第一大区小八区

明治十一年第二月

杉原芝平

一六 重久純孝上申書

私儀

兼テ私学校エ入校仕居申候処、明治十年二月西郷隆盛・  
桐野利秋等尋問ノ為メ上京出発ノ際、五番大隊五番小隊  
長園田武一、半隊長川上静芳、分隊長黒田次郎左衛門、

一 秋 田 県

隊ノ伍長被申付、同十七日鹿兒島ヲ発シ、同廿一日熊本県松橋ニ着、同廿二日払曉熊本城エ馳付進撃致シ、翌廿三日八時頃ヨリ九小隊位木ノ葉口進撃仕、官軍五六町程モ候ハン引退キ申候得共留リ戦ヒ、時ヲ移シ勝敗決セス薄暮ニ到ル、于時我援隊三小隊馳セ付北方嶮山ニ登リ横撃仕候ニ付、官兵支ユル能ハスシテ退ク、直ニ追撃半里ニ及ヘリ、銃器并乘馬二疋・彈藥數多分捕ス、官軍死傷過半有之、味方死傷凡二十名位ニテ御座候、当夜十時頃植木町エ引揚、同廿六日山鹿ニ出張、同廿八日払曉官軍襲来ルニ付直ニ接戦、官軍支ユル能ハス引退ク、一里余追撃ニ及ヒ申候、該地鍋田原(山鹿市)官兵ノ死骸百余名ニテ、味方死傷纒二十名位ニテ、分捕銃器二百余挺也、午後三時頃ヨリ山鹿エ引揚、同廿九日十二時頃ヨリ南ノ關エ援兵トシテ操出申候処、途中岩村(三和町)ニ到リ官兵ノ炮発ヲ受ケ、右翼ノ山ニ登リ横撃仕申候処官兵支エル能ハス引退ニ相成申候、夜半山鹿ニ退陣仕候、同卅日田原口出張木ノ葉ニ到リ、同所山嶺ニ隊兵集ルヲ見、彼我弁シ難ク躊躇罷在申候処、忽チ喇叭ノ声ヲ飛シ官兵ニ疑ヒ無之候依リ、直ニ交戦炮撃仕申候処直様引退キ申候ニ付、当所引揚ケ植木町ニ到リ田原口炮声烈響直ニ馳付松蔭ニ入り交戦、三月

三日西方ヨリ援ヲ請ヒ来ルニ依リ我左半隊他ノ半隊ヲ合テ馳付劇戦時ヲ移シ、彈藥已ニ尽ク、止ムヲ得ス刀ヲ掉フテ進ム、官兵散乱銃器ヲ捨テ、走ル、銃器五十余挺其他彈藥等分捕申候、是ニ於テ右半隊ニ交代シ將ニ退カント仕居申候処猶又襲来ルニ付、直ニ接戦追退ス、須臾アリテ又是ノ如然リ、同四日ヨリ五日ニ到リ互ニ進撃兩軍ノ距離纒カ五六間ニ及ヘリ、同六日右翼ニ当リ炮声烈シク相聞申候処果シテ援ヲ請ヒ来リ申候ニ付、左半隊馳付配兵中本隊危キ由申来リ、直ニ引返シ拒戦仕候得共、雌雄決シ難ク遂ニ接戦ニ及ヒ申候処、官兵散乱頗ル狼狽ノ色アリ、是ニ於テ我隊長園田武一挺前一騎ヲ蹴倒シ互ニ転輾遂ニ斬首セリ、私儀モ亦随テ挺前一騎ヲ倒シ申候処、官兵七名銃剣ヲ掉フテ来リ四方ヲ囲ム、是ニ於テ七名敵ヲ受ケ必死ヲ期シテ闘ヒ又二名ヲ倒シ申候ニ付、残ル五名ハ四方ニ退散セリ、于時劍創四ヶ所ニ受ケ刀ヲ掉フ能ハス、退テ川尻病院ニ投シ治療罷在申候処、四月二日八代口敗聞到リ申候ニ付、木山ヲ經矢部ニ到リ、遂ニ帰県仕療用ヲ加ヘ、猶該所募兵ニ加リ各所ニ交戦敗ヲ取り、遂ニ郡山分署ニ帰順書差出自宅謹慎之命ヲ蒙リ、謹ミ罷在申候処、魔軍再ヒ鹿兒島ニ乱入シ強召募ニ逢ヒ出張、途中官

兵梗塞達スル能ハスシテ帰宅シ、遂ニ縛ニ就キ申候、私  
出兵中之顛末如斯御座候也、

鹿兒島県下第廿壹大区小五区

郡山郷

明治十一年二月

重久純孝

一七 菊池重彦上申書

私儀

昨明治十年第二月初旬方ヨリ追々不穩形勢ニ立至リ、此  
末如何成立ヘクヤト愚考能在候処、区长野村四郎ナル者  
専使ノ文ヲ懐中シ帰区ニ及ヒ之レヲ詠覽ス、其節始メテ  
斯ル大事ノ有ルヤト大ニ驚ク、依之テ県下動搖各郷有志  
輩大ニ競立、鹿兒島ニ雲集シ多人數隨行ニテ陸軍大将西  
郷隆盛・同少将桐野利秋・同篠原國幹等政府エ尋問ノ筋  
有之上京ト相唱ヘ発泉ニ及ヒ候、折柄龍岡資時・樺山資  
胤等出泉致居候処、淵邊直右衛門肥後表ヨリ帰泉致シ、  
此節ノ事件ニ傍觀候者ハ国賊云々ト申募候由、樺山帰区  
ノ上伝承彼ノ地景況等申聞カセ、県令ヨリ西郷宛ノ書翰  
モ持帰候ニ付、弥名義モ有之候ト相心得、不得止二百三

十余名之ニ同意シ、龍岡惣括シテ三月八日発足、同十二  
日熊本エ着ス、午後八時頃ニモ候ハン、隊号遊撃隊ト名  
ク、龍岡資時隊長ニ命セラレ其指揮ニ從ヒ、午後十時頃  
安政橋エ操出シ相守居候処、翌日十三日二番炮隊ノ伍長  
ニ命セラレ赤尾口ニ転陣ス、數日相守ル、月日不詳遊撃  
三番隊ノ分隊長申付ラレ、隊長和田正之丞、半隊長松下  
兼信、兵士人員ハ五十名ニ過キス、同県下二本木町ニ休  
息ス、或日木留ノ方面エ操出候様報知アリ、直ニ出発シ  
一昼夜位相守居候処、外隊操込ミ候ニ付交代シ、直ニ引  
揚ケ同県下塩屋濱エ転陣ス、屢番兵等致シ居候処川尻相  
敗レ惣隊引揚ニ付、百貫ヨリ本明寺山ヲ越エ戸島村ヲ差  
シ、矢部ノ濱町ニ引揚申候、当所ニテ半隊長有馬彦七・  
分隊長桑波田兵輔加入相成、則日発足ニテ馬見原ヨリ胡  
摩山ヲ越エ人吉ノ内江代迄引揚ケ申候、当所ニテ中隊長  
制相成奇兵一番隊トナル、中隊長米良市之助、右小隊長  
和田正之丞、半隊長有馬彦七、分隊長桑波田兵輔、左小  
隊長永井半之丞、半隊長竹内兼吉、分隊長東郷辰二、私  
ニハ操下ラレ分隊長心得トナル、其後日州延岡ノ内富高  
新町ニ転陣ス、或日豊後国武田ヨリ援兵申来リ、直ニ出発  
仕申候、二三日防戦ノ処戦ヒ敗レ戦死手負等モ少トセス、

一 秋田県

此戦ニ左小隊長永井半之丞手負ニ付、順ヲ以テ分隊長ニ上ラレ、同国旗返シ(三重町)峠迄引揚ケ番兵ス、他隊ノ儀ハ同国白杵エ差向進軍ニ及ヒ屢奮戦ノ由追々報知有之、日ヲ経スシテ応兵申来リ候ニ付、昼夜ヲ分タス差越シ、着スルヤ否ヤ彼ノ地浜手ヘ差向ヘクトノ事候ニ付操出候処、官軍大勢ニテ軍艦ヨリ烈シク打立ラレ大ニ苦戦ス、皆必死ヲ極メ拒戦スト雖トモ終ニ破レテ惣軍敗走シ、又々昼夜ヲ厭ハス旗返シニ引取申候、其後同国三國峠(三重町)ヲ乗取ラレ候由報知有之、各隊守ヲ捨テ重岡村(宇目町)ニ引退キ一泊、明方ヨリ日州延岡ノ内熊田辺迄操上、所々番兵ト致シ居候、或日梓峠ノ方面ヘ進軍申付ラレ四五小隊進撃ノ処、官軍ノ守ヲ打破リ一里位追撃ス、此地ニ守ヲ付三七日位防戦ノ処、延岡ノ方大敗軍ノ由報知有之、夜ニ入長江村迄引揚候処、不都合ニシテ四方八方官軍ニ取囲マレ大ニ狼狽ス、其上兵糧乏ク毎食麦飯ノミ実ニ困窮セリ、兵モ亦散々ニ相成進退差迫リ思案ヲ運ラス内、何レモ山手ニ差向候様報知有之、官軍ノ背後ヲ衝キ破リ乍漸出抜ケ、嶮山ヲ経テ穴川(鹿川)ヨリ三田井、米良山ヲ経テ、日州小林ニ出、此地ヨリ竊カニ立退キ、都城ニ歸リ、分署ニ於テ帰順自首仕候処、其日ヨリ御拘留相成、九月八日宮崎エ差廻サ

レ、十月廿六日長崎エ御廻シ相成懲役一年ノ命ヲ蒙リ候、此段御調ニ付上申仕候、以上、

鹿兒島県管下第百五大区日向国

諸県郡都城二ノ七十六番地

明治十一年二月

菊池重彦

一八 山内彌一上申書

私儀

元来私学校エハ入校不致候得共、先般西郷隆盛上京ノ勢ニ乗シ、明治十年丑二月十一日鹿兒島本校ヘ入校致シ、同十四日二番大隊十番小隊兵士ニ編入セラレ、小隊長別府九郎・半隊長有川貞三・分隊長松本直之丞等ノ指揮ヲ受ケ、同十五日出発、同廿一日熊本高橋町(熊本市西部)ヘ着、同廿二日未明ヨリ熊本城ヘ進撃致シ昼夜相戦候処、官兵敗走ト為ル、味方追撃シテ宮内ヲ取ル、官兵戦死五六名、味方戦死・手負二十名位有之候、同廿三日三番大隊五番小隊ト交代シ夕方二本木迄引揚休息ス、同月九日山鹿エ転シ一泊、同十日未明ヨリ三小隊ヲ合シ高瀬(余名市)ヘ進撃ニ及ヒ候処官兵大勢ニテ味方散々ニ相成、戦死・手負等三十三人位

有之候、夫ヨリ山鹿エ引揚ケ三日位休兵ノ処、(山鹿市西北)平山エ官

兵相堅メ居候段承リ、同十四日未明ヨリ八小隊ヲ合シ平

山ニ進撃ノ処、官兵敗走ニ及ビ、三町位ノ竹山ニ逃込候ニ

付直ニ味方ヨリ取囲ミ相戦ヒ候処、官兵過半相討レ候、

其日大勝利ヲ得(三加和町)板楠村へ転シ一泊仕居候処、(三加和町)岩村ノ方へ

炮声烈ク相響キ候故、翌日ハ応援トシテ操出横撃致候処、

官軍敗走ニ及ヒ候、此日夕方山鹿エ帰陣シ十日位蕃兵ス、

同廿五日頃鳥ノ巢(西合志町)本営ヨリ小河村エ引揚候様申来候ニ付

転陣シ、五小隊ト共ニ台場ヲ築キ五日位相守居候処、五

月一日頃官軍大勢寄来リ味方散々ニ相成、本営迄モ引揚

ニ及ヒ候、此地ヨリ七合位引取り植木街道筋ニ相堅メ居

候処、官軍追撃シ二時間位ニテモ候ハン相戦ヒ候得共勝

敗決セズ候ニ付、大音声ニテ切込ニ相掛候処、直ニ逃去、

味方三小隊位ハ西ヨリ追撃、二小隊位ハ東ヨリ相廻リ裏

ヲ討チ候処、官兵八九十人ヲ討伏候、銃器・弾薬等過半

分取申候、此日夕方手負致シ、(益城町)木山病院エ入院、五月四

日頃帰県致シ、八月廿四日頃警部方エ帰順書差出置候処、

自宅謹慎被仰付謹慎罷居候処、副戸長中村市兵衛方ヨリ

用向有之候ニ付帯刀ノ上速ニ来呉候様申来候ニ付、直ニ

差越候処、(川内町)近郷水引士族小幡段兵衛ト申者、外ニ二名右

中村宅エ罷居候、市兵衛申ニハ、此節又々鹿兒島本営ヨ

リ有志ノ面々ハ出兵致サセ候様申来候、其方共ハ如何相

心得候哉ト申事ニテ候得共、即答致サズ一統打寄り衆議

ヲ遂候処、最早帰順迄モ致居候上ハ再ヒ出兵致候儀宜ラ

スト稍決議ニ及ヒ候央ニ、戸長方ヨリ出兵致サス候様申

来リ夫故銘々引取り謹慎罷在候、此段御調ニ付申上候也、

鹿兒島県下高江郷

明治十一年第二月

山内彌一

### 一九 木原用八上申書

私儀

昨明治十年丑二月初旬ノ頃戸長所ヨリ御用有之出張致シ

候処、鹿兒島県令ヨリ各県へ廻達相成タル文章并陸軍大

將西郷隆盛等上京根源ノ宛戸長役所ニ於テ一見仕候処、

戸長ヨリ達スルニハ、実ニ当今不容易事件故有志ノ者ハ

其人々ノ意ニ任スルトノ旨承リ、実々壯者ノ坐視スルニ

忍ヒサル形勢、殊ニ名儀モ有之処ヨリ、同心ノ者上村壯

之丞・和田用一三名弥此ヲ信入致シ、同年四月十日郷発、

同十二日大口郷へ着、同町へ差引人出張伊東數右衛門外

一 秋田 県

一名被罷居、形行申出候処、此節ノ事件止ヲ得ザル時勢ニハ候得共、当分本営求摩<sup>(球磨)</sup>人吉ノ町へ出張相成、彼方ヨリ最早其郷ニ於テ兵士五十名以上ナラテハ操出不相成様問合相成候ニ付、三名ニテハ難操出旨承リ、幸ヒ無間モ<sup>(龍北町)</sup>市成郷ヨリ兵士二十五名夫卒三名操込ミ相成、夫レヲ聞ヨリ出張所へ差越、明日ハ市成郷ヨリ操入ノ人員吾々共同道操出シ相成候様相迫リ候処、明日迄ハ当所へ滞在致シ候得ハ何郷ニテモ操込ミ相成候半、無左ハ五十名内ニテモ操出シ候様可致トノ事ニテ、不得止滞在ス、同十四日未明市成郷二十八名吾々共三名都合三十一名、出張所ヨリ問合書御渡シ相成直ニ当所出發、人吉本営へ午後五時頃着ク、大口出張所ヨリノ問合書ヲ以テ届申出候処、下宿エ案内ニテ三十一名同宿ス、同十六日夜和田用一・木原用八・田中七左衛門本営ヨリ只今御用有之罷出候処、小隊長和田用一、半隊長木原用八、分隊長田中七左衛門一紙ヲ以テ被申付、隊号且組合方ノ儀ハ明日当所へ出張ノ上申渡ストノ事ニテ下宿へ帰ル、同十七日午前八時頃本営へ出張、隊組左ノ通、市成郷兵士二十三名、<sup>(横川郷)</sup>兵士三十名、<sup>(谷良町)</sup>山田兵士十五名、<sup>(溝辺町)</sup>溝邊郷兵士二十八名、<sup>(市來町)</sup>市來郷兵士七名、<sup>(大隅町)</sup>岩川郷兵士十五名、吾々共三名都合九十五名、

十一ノ一番小隊ト編制致シ、当日ヨリ同所市中ハ勿論諸所へ番兵被申付、同廿六日午後三時頃隊長御用有之和田用一罷出候処、当県下五木ノ内中村<sup>(五木村西郷)</sup>へ明早旦ヨリ出軍被申付、直ニ番兵他隊ト交代ニテ宿陣へ引揚ル、同十七日未明当所出發頭地村<sup>(五木村)</sup>へ午後七時頃着一泊、同廿八日同所出發中村へ午後二時頃着陣、直ニ諸所へ案内ヲ得四ヶ所ヲ番兵ス、同三十日午前八時頃、<sup>(五木村西郷)</sup>山口村番兵先キニ官軍四五十名位寄来ルヲ待得テ直ニ台場ヨリ銃撃致シ候処、官軍進ム不能シテ引退ク、五月二日未明山手肥後境間道番兵へ官軍斥候隊ト相見得、三十五名位襲来ノ由、即チ山手ノ半隊ヲ引揚ケ間道へ差向候処、其儘不相見得直ニ斥候ヲ以テ諸所探索致シ居ル央、中村ノ方へ銃声相聞へ、半隊早々中村へ馳行候、官軍宿陣ノ上山手ニ蜂起ノ如ク襲来ルヲ防戦ス、夫ヲ聞ヨリ諸所ノ番兵モ引揚馳来リ必死ヲ決シ相戦フト雖トモ、何分当所地形峡谷ニシテ、下ハ大河ヲ挾ミ十分ナラサルヲ、官軍倍々勢ヒニ乗シ山手三方ヲ囲ミ銃発スルヲ忍ビズ、遂ニ午後四時頃敗走ニ及フ<sup>(五木村)</sup>ヨ各隊へ報シ、小鶴ト申所へ引退キ、暫時アリテ各隊<sup>(五木村)</sup>樺村へ引揚此地二小隊ヲ以テ固守ス、同七日未明攻撃ニ及ヒ防戦スト雖トモ、官軍多勢ニシテ後軍ヨリ山手ニ到リ横

ヨリ銃撃スルニ、味方川手へ取囲マレ既ニ敗走セント欲  
スルヲ、官軍引退キ、故ニ味方モ夜ニ入テ平瀬村ト申所  
ヘ引揚ル、隊長和田用一銃創ヲ受ケ人吉病院へ送ル、吾  
レニハ銃創浅手ニテ頭地出張病院へ入院ス、外戦死・手  
負二十三名アリ、然リト雖トモ本隊ハ監軍ヲ斃シ隊長  
トナリ亦々椿村・猪ノ鼻四小隊ヲ以テ固守スル、同十七日  
隊号常山三番中隊右小隊ト改名アリ、吾レニモ病院ヨリ  
帰隊ス、同十八日國見岳・猪之鼻・平瀬口諸所へ、官軍  
未明ヨリ惣進撃ニ及ヒ、防戦スト雖トモ既ニ平瀬口・國  
見岳ノ方敗走ノ由報有之、各隊散々ニ頭地村ヲ差テ引退  
ク、漸ク本隊相纏メ居候処、午後六時頃本營ヨリ藤田村ト  
申所へ引揚ルノ命アリ一泊ス、同十九日朝八時頃山口村  
ト申所へ到リ一泊、同廿日拔ケ星ト申山嶺へ三小隊ヲ以  
テ守ル、同三十日頃常山八番中隊左小隊ノ固メ場エ官軍  
攻撃スルヲ破ラル、各隊統テ劇戦スト雖トモ官軍勢ヒニ  
乘シ、大炮ハ雷ノ如ク撃発スルヲ苦ミ藤田ノ如ク到ルヲ、  
頭地村口諸方惣敗軍ニ及ヒ、裏道ヲ困マレ各隊散乱スル  
ニ依リ、本營迄モ川邊ト申所へ引退クニ官軍追撃ス、遂  
ニ人吉迄引揚ル、是ニ於テ吾隊纔十四五名ヲ得、人吉多  
町へ宿陣ス、六月二日頃人吉川邊街道へ大合戦ノ由、同

所へ応援ノ命有リ、纔十余名ヲ以テ正面ニ到リ、山手へ  
廻リ小高岡へ登リ横ヨリ狙撃スルヲ官軍一里計リ引退ク  
ヲ接戦ス、昼夜戦歇ム時ナシ、同四日午前十時頃山田口  
ノ方破及シ、既ニ官軍人吉ノ町家へ突出シタル報有之、  
各隊直ニ求摩川ヲ差シ、田代ト申所へ打渡リ大木場之原  
ヘ引揚ル、是ニ至テ本隊折々相纏リ二十四五名ヲ得各隊  
同所諸所ヲ守ル、同十一日頃官軍銃発スルヲ終日防戦ス  
ト雖トモ勝敗之ナク、翌十二日未明ヨリ官軍山手へ大炮  
ヲ引揚横ヨリ烈敷ク炮撃スルヲ苦ミ、遂ニ午前十一時頃  
敗軍、各隊加久藤街道ヲ差引退ク、午後三時頃加久藤ノ  
内一里山ト申所へ到リ各隊休居ル処へ、官軍山ヨリ不意  
ニ銃発シ、防戦スト雖トモ彈藥モ乏敷ク、時ニ敵味方ノ  
距離纔十一二間位ニテ礮戦致シ遂ニ加久藤向町へ引揚一  
泊、味方戦死・手負不詳、本隊亦々散乱致シ漸ク七八名  
ヲ得タリ、同十三日頃一中隊ヲ一小隊トシ当所本町ノ上  
諸所ヲ守ル、三日ニシテ馬關田郷之内浦村ト申所へ引揚  
固守、同十八日頃飯野城山へ惣進軍ノ事相発シ、晝同所  
へ各隊相揃ヒ進撃スト雖トモ味方不利シテ同所上并村  
ヘ引揚守リヲ付ル、翌十九日頃防戦ス、同廿日本隊解隊  
致シ、同廿一日頃夜小林町本營ノ様御差廻シ晝七時着ク、

同廿四日頃須木本営へ御差廻シ午後六時頃着ク、同所久(須木村)々瀬村へ一泊、翌廿五日頃同所皆越ト申所へ到リ、正義七番中隊右小隊ノ押伍ニ加入致シ直ニ台場へ守ル、七月初頃植村壺屋へ進軍ノ事相発シ、各隊曉相揃、吾隊ハ深山嶮谷ヲ越へ背後ヲ突出シ植村壺屋ノ本営迄モ取ル、分捕ハ不詳、生捕五名アリ、既ニ日西山ニ傾ク頃本ノ守り場へ引揚ル、二日頃ニシテ各隊敗軍ニテ須木之麓へ一泊、翌朝奈崎村へ宿陣小高キ岡へ番兵ス、三日ニシテ同所内(須木村南端)山へ引揚宿陣ス、同所龍野越ト申所へ振武十五番・正義八番守場敗走ノ報有之タル由、本営ヨリ応援ノ命有リ、統テ劇戦スルニ官軍進ム能ハスシテ防戦、互ニ引シト二晝夜連戦ス、遂ニ同所鈴原ト申所敗走ニ及、野尻紙屋へ到リ一泊、翌日同所瀬越ト申所へ引揚一泊ス、七月中旬(野尻町東端)頃綾ノ内地名不詳固守ス、三日ニシテ他隊惣敗、高岡之内木ノ脇ト申所へ引揚、二日ヲ歴スシテ七月下旬頃佐土原入田村川辺ヲ守ル、三日頃ニテ官軍米良口山手ヨリ突出シ、惣敗軍ニテ散乱シ、本隊引揚ル所ヲ不知、遂ニ同隊二名延岡ノ内山中へ潜匿シ三日ニシテ漸ク山家ヲ求得、問道案内等ヲ聞キ山坂小道ヲ経歴シテ、八月初旬頃帰県致シ、同廿四日頃巡查派出所へ前非悔悟帰順書差出候処、

自宅謹慎之命ヲ蒙リ、十月十四日川内水引分署ヨリ御呼出シ、鹿兒島警視署へ護送、十月廿一日長崎へ護送、同廿四日臨時裁判所ニ於テ二年懲役之命ヲ蒙リ申候、私出兵中ノ顛末如斯御座候也、

鹿兒島県下上甕島郷第廿五大区  
一小区中甕村  
木原用八

明治十一年第二月  
白坂篤光上申書

明治十年二月西郷隆盛上京ノ勢ヒニ乗シ私学校へ入校シ(池上四郎隊)五番大隊六番小隊長蒲生彦四郎・半隊長早川五郎隊下ニ加入シ、同二月十七日鹿兒島ヲ出発シ、同廿日熊本県松橋ニ着、夜半ヨリ曉ヲ侵シ安己橋之線路ニ向ヒ進撃交戦、日暮ニ及ヒ川岸ヲ守衛ス、三月上旬頃城東連正寺灰燼中ニ戦フ、夜七字頃互ニ鬪止帰陣セリ、同十二日八幡山苦戦ノ報ヲ得応援交戦、翌十三日午後五時頃ニ到リ銃丸既ニ尽ク、時ニ官兵背出シ接戦ヲ要スト雖トモ果サスシテ退ク、味方死傷少ナカラス遂ニ高麗門ニ転シ、又四方地

私儀



村ヲ堅守セリ、同下旬頃松橋地方応援ノ命ヲ受ケ、直ニ進発松橋ニ到リ交戦中、山手ノ敗走ニ依リ応援ノ命ヲ受、直ニ進発該地ニ到レハ彼我隻騎ヲ見ズ、依テ旧塁ニ拠リ予備ス、翌曉ニ到リ一ノ九番小隊漸ク兵ヲ纏メ来リ交代シ、右翼ニ転ス、于時官兵大挙襲来リ諸隊接戦暫時、敗テ退ク、市町亦蹙ヲ挙ク、遂ニ拒ヲ得ス川尻ニ退ク、翌日又松橋ニ向ヒ進撃ノ命ヲ受ケ進向宇土町ニ到リ伏ニ逢フ、直ニ接戦、鬨ヲ作りテ進ム、于時深霧眼ヲ遮リ咫尺弁シ難シ、遂ニ敗レテ又川尻ニ退キ、河岸ニ拠リ拒守ス、四月十四日頃官軍(天明町美登里)ミカント云フ所ヲ敗リ進入ノ報ヲ得、直ニ応援劇戦時ヲ移ス、遂ニ能ハス木山ヲ差テ退ク、又(熊本市)砂取ニ出張、是ニ於テ隊士連日ノ死傷ニ因リ纒三十名ヲ残セリ、故ニ三ノ十番小隊ト合隊ノ命有リ、同十八日頃御船ニ転陣交戦利アラズ、同下旬頃矢部ニ退ク、亦金打村(金内、大郡町)ニ出張、五月上旬頃奈須山ノ嶮ヲ越ヘ尾前村ニ到リ、是ニ於テ又一大隊九番小隊ト合隊シ、干城ニ番中隊ト変称セリ、中隊長成尾哲之丞、小隊長大河平源助、半隊長三代直左衛門ナリ、同中旬頃江代ヲ過キ人吉ニ到リ、直ニ(吉北町)大野口応援ノ請ヒヲ受ケ出張、是ニ於テ進撃四戦一戦利ヲ得、進テ官ノ本營ニ到ル、外套・銃器等分捕リ二人生

捕シ官兵遺骸十四五名、我隊纒二名銃創ヲ受タリ、其後官軍夜襲シ要地ヲ褫フ、翌日進撃ノ命ヲ受ケ稍近ツクト雖トモ險岡阻阜遂ニ達スル能ハス、同夜切隊二十余名鬨ヲ作りテ進ミ炮台數所ヲ乗取ス、然ト雖モ無銃、援続カス遂ニ敗レテ退ク、是ニ於テ官軍大挙襲来遂ニ支ル能ハス、西ニ向テ退ク、六月上旬頃亦右翼ノ敗報ヲ得、鹿兒島県山野郷吹村ニ退キ守衛ス、同中旬頃官軍背出シ、道(布野、大口市)梗シテ通スル能ス、漸ク間道ヲ過キ山野ニ出テ該地ヲ堅守、左翼又敗レ返戦數合、遂ニ曾木ニ退キ河岸ニ拠リ固守ス、七月上旬頃風邪ヲ患ヒ帰宅治療ス、八月上旬郡山警視分署ニ到リ帰順書ヲ達シ、自宅謹慎之命ヲ蒙リ、九月上旬魔軍又鹿兒島ニ進入、猶強召募ヲ受ケ止ヲ得ス出兵、途中土人之評ヲ聞キ帰宅謹慎中縛ニ就キ、遂ニ長崎裁判所ニ於テ懲役三年之命ヲ蒙リタリ、

鹿兒島県下第廿大区五小区

那山郷居住

明治十一年二月

白坂篤光

二 上野勇四郎上申書

私儀

明治十年二月十二日於鹿兒島(篠原國幹隊長)一番大隊四番小隊兵卒ニ編

入、小隊長坂元新太郎、半隊長木村平右衛門、分隊長大

山岩次郎等ノ指揮ニ從ヒ、二月十五日同所ヲ発ス、同廿

一日肥後熊本へ着、直ニ八幡山(熊本市)へ差越台場ヲ築キ相固メ

居候処、同廿三日外隊(總)操込ニ及ヒ交代シテ春日村(熊本市)へ転陣

相成候、同廿六日十時頃ヨリ竹子(高嶺、玉名市)へ応援トシテ相統四時

頃迄相戦候処、小隊長坂元新太郎戦死ス、同日晩十二時

頃植木町へ引揚、同廿七日木留町へ転陣、同廿八日吉次(玉東町)

ト申処へ台場ヲ築キ相守ル、然処三月五日原倉村(玉東町)へ官軍

襲来ニ付進撃致シ一時間程激戦シ、半隊長木村平右衛門

ナル者疵ヲ蒙ル、大ニ苦戦シテ本ノ守場へ引退ク、官軍

尚追撃、於当所翌六日未明迄互ニ探矢ヲ放居候処、翌七

日四時頃ニモ候ハン官軍八町程引揚候ニ付追撃シ、既ニ

黄昏ニ及本ノ守場へ引退守居候処、橋口某小隊長ト為リ、

同十一日西安寺村(玉東町)へ応援トシテ相統一時間程戦争候処、

小隊長橋口戦死ス、夫ヨリ同所ヲ引揚本ノ吉次へ引退キ

相守居候処、四月上旬旬官軍襲来ニ及、他ノ守場ヨリ相

破レ敗走ス、夫ヨリ山口村(天草町)ト申所へ引退キ台場ヲ築キ相

守居候処、凡一週間位ニモ相成候ハン川尻相破レ候ニ付

木山へ引揚候、然処翌日永峯(熊本市)ト申所へ官軍寄来リ、応援

トシテ相統一時間程戦争、味方戦死・手負等不少、官兵

五十名位戦死ト見受申候、銃三十余挺・弾薬二千発余分

捕、晚七時頃木山へ引揚、翌日矢部へ転陣相成候、此地

ニ於テ行進四番中隊トナリ中隊長大山岩次郎、右小隊長

肥後助左衛門、半隊長岩元幸平、分隊長伊地知慶吉、左

小隊長南東二、半隊長新納字八、分隊長兒玉七之丞ト決

議ニ及候、五月上旬ニテモ候ハン、鹿兒島エ官軍相見得

候間、彼方へ操出候様本營ヨリ相達候ニ付、五月上旬方

ニテモ候ハン鹿兒島方面へ操出シ、桂山ト申所へ台場ヲ

築キ相固候処、六月上旬方吉野へ引揚、翌日吉野ニ進撃

スト雖トモ勝敗不相分、左小隊長手負、同半隊長即死、

同分隊長手負、兵士死傷不少候得共其数不詳、同日午后

四時頃帖佐郷(拾良町)へ引揚相成中隊長大山岩次郎監軍ト為ル、

右小隊長肥後助左衛門中隊長ト為ル、半隊長岩元幸平小

隊長ト為ル、分隊長伊地知慶吉半隊長ト為ル、同中旬頃

足痛ニテ給養方ニ差控へ療養ヲ加フ、夫ヨリ諸所ニ引揚

相成、日州佐土原ニ於テ帰隊シ、三日程滞陣致シ居候処、

外隊ヨリ相破レ都濃町<sup>(郡農町)</sup>へ引揚、同日美々津<sup>(日向市)</sup>ノ川下ニ台場

ヲ築キ守ヲ付居候処、川上ノ方ヨリ亦々破レ延岡方へハ

出事能ハス、散乱シテ五日位山中ニ潜伏致居候処、官軍

ニ見付ラレ、高鍋警視出張所へ護送相成同所ニ於テ帰順

自首仕自宅謹慎被申渡、八月十九日宅へ帰謹慎中御座候

得共、賊之本営募兵方トシテ三名<sup>(指宿市)</sup>和泉郷へ差入巡查等

ハ悉ク捕縛可致様廻差廻大ニ驚愕ス、然ト雖トモ無詮

方捕縛セント欲シ仙田<sup>(隣町)</sup>村迄出張候得共、悔悟改心シテ宅

ニ帰り謹慎罷在候処、九月十六日巡查衆御差入ニテ縛ニ

就キ谷山へ護送相成候、此段御調ニ付上申仕候也、

鹿兒島県下第十七大区一小区

穎娃郷

明治十一年二月

上野勇四郎

### 二二 猿木宗那上申書

記出兵中之顛末

我熊本県士之風タルヤ、民権・敬神・学校之三党ニ分派シ、  
固結相ヒ解ケス頗ル讎敵ノ如ク然リ、某固ヨリ学党之一

人也、其ノ魁<sup>(熊本隊々長)</sup>池邊吉十郎ト云、櫻田惣四郎等之ニ継ク、

明治十年二月上旬西郷隆盛之挙動熊本ニ風聞スル、尔来

県下之士民浮萍ノ如ク扱ル処ヲ知ラス、豈ニ凶ラン哉十

九日ニ到リ煙焰茶城ニ起リ忽チ類焼ニ罹リ、一家之器械

挙テ灰燼ニ厲ス、依テ水前寺小堀某宅ニ扱レリ、聞クカ

如シ池邊等具命ヲ以テ鎮撫局ヲ建官村ニ設ケ、同社ノ杜

丁一宮萬次郎宅ニ集ルト、行テ之ニ到レハ果シテ各員列

坐セリ、末タ進退去就之議ヲ決セス、廿一日夕ニ到リ同

社年長城市郎来リ、各員挙テ江津学校ニ導キ宣言シテ曰

ク、虜軍之先鋒今夜月没ヲ期トシ鎮台ニ迫ルニ随ヒ共ニ

義ヲ拳ント欲ス、君等夫レ之ヲ如何ン、一座驚愕衆議不

一論説紛々タリ、是ニ於テ櫻田某来リ説テ曰ク、嗚呼、

我国ノ因循ナルヤ旧藩以来天下ノ為メ十分死力ヲ尽ス有

ラス、加之ノミナラス西郷・桐野等ノ一挙其ノ名無キニ

アラス、東京警部中原尚雄之口供ニ詳ナリ、是レ則チ機

到リ時到ル之秋也、是ニ於テ衆心一ニ帰ス、廿二日建宮

村建軍社ニ到リ大隊編製<sup>(機)</sup>之レ有リ、某ハ三番小隊城市郎

隊之分隊長ト為リ、夕日惣軍ヲ出シ出京町ニ到リ宿營セ

リ、二十五日高瀬口<sup>(玉名市)</sup>ノ官軍梗塞ノ為メ出張整列中、南方

銃声ノ響キヲ聞キ一隊馳テ之ニ到レハ果シテ茶城之官兵

也、直ニ開戦軽創ヲ受ケ隊ヲ辞シテ治療ス、三月三日日本  
(前内町) 隊大多尾村ニ在ルヲ聴キ帰隊セリ、八日田原口七本村ニ  
(楨木町) 転陣セリ、十一日午後ニ到リ魔軍敗走援ヲ請ヒ来ル、直  
(近衛兵) ニ接戦所謂赤帽数名ヲ倒セリ、十四日魔軍又敗ル、又援  
(楨木町) ヲ請ヒ来ル、呐喊挺前シテ赤帽三名ヲ切り倒セリ、是ニ  
 於テ左臂ニ銃創ヲ受ケ進ム能ハス、隊ヲ辞シ病院ニ投ス、  
(楨木町) 是レヨリ近衛鎮台両官兵ヲ目ケテ、赤帽黃帽ト云、両日  
 之死傷小隊長長城市郎・分隊長一宮萬次郎・兵士一名戦死  
 シ、兵士四名銃創ヲ受タリ、四月十三日川尻ノ敗報ヲ得  
 病院ニ随ヒ肩輿ニ乗シ、四月下旬人吉ニ到リ、遂ニ加久藤  
(大口市) ニ到ル、六月中旬創癒ユ、我本隊鹿兒島県高隈山ニ在ル  
(熊) ヲ聴キ帰隊、是ニ於テ二番中隊左半隊長之命ヲ受タリ、  
 于時官魔両軍之篝火宵々万峯ニ点列シ恰モ点灯ノ如シ、  
 実ニ未曾有ノ奇観也、官軍之攻撃甚タ急ナリト雖トモ抜  
 ク能ハス、是ニ於テ官軍大砲数門ヲ集メ攻撃雷ノ如シ、  
 我隊諸塁悉ク瓦解ス、明曉官軍雨ニ乗シテ攻撃シ来ル、  
 遂ニ敗ヲ取り軍ヲ揚ケ大口ニ配兵シ防禦ス、幹事内藤儀  
 十郎・竹内武繁太・小隊長間部元治・兵士二名銃創ヲ受  
 ケ、兵士一名戦死セリ、遂ニ敗ヲ取り軍ヲ揚ク、于時泥  
 濘膝ヲ没シ各隊伍ヲ乱シ甚雜沓セリ、此ノ時ニ当リテ魔

ノ大隊長邊見某手巾ヲ含ミ鞭ウツニ帽ヲ以テシ馬ヲ躍ラ  
(辺見十郎本) シテ来リ、縦横令ヲ下シ遂ニ乱兵ヲ纏メ千代川ヲ越ヘ配  
(川内町) 兵ス、全軍斉シク呼フ、我隊本庄ニ到リ宿営ス、前日ノ  
(妻刈町) 役ニ小隊長欠ルヲ以テ某其ノ欠ニ補ス、滞営十余日軍ヲ  
 揚ケテ横川ニ到リ一戦ス、中隊長北村盛純重創ヲ受ケ、  
(牧野町) 兵士一名戦死セリ、遂ニ敗テ踊ニ退ク、幹事太田保中隊  
(大窪、霧島町) 長ト為ル、此ノ時ニ当テ旧創再発シ駆馳甚タ艱難也、因  
 テ小隊長ヲ辞シ輜重幹事ト為ル、六月下旬大久保ニ到リ  
 進撃ス、兵士一名銃創ヲ受タリ、魔軍敗ル、ヲ以テ瀬田  
(財部町) 押村ニ退キ、十文字之魔軍ヲ援ケ且ツ戦ヒ且ツ退キ都城  
(箱城市西端) 養原ニ到リ接戦ス、兵士一名戦死シ兵士五名銃創ヲ受タ  
 リ、遂ニ山ノ口ニ退キ、且ツ戦ヒ且ツ退キ延岡ニ到ル、  
 八月中旬門川ニ出張、魔軍敗ル、ヲ以テ猶延岡ニ退キ、  
 遂ニ和田峠ニ到リ防戦、兵士一名銃創ヲ受タリ、遂ニ敗  
(北川町) テ長井村ニ到リ降伏之説ニ随ヒ、八月十七日熊本隊一同  
 降伏シ、遂ニ熊本臨時裁判所ニ於テ懲役三年之命ヲ蒙リ  
 タリ、

熊本県第一大区五小区

草葉丁居住

明治十一年二月

猿木宗那

### 二三 末松直道上申書

記出兵中之顛末

明治十年二月上旬西郷隆盛之挙動熊本ニ風聞スル、尔来人心糾紛進退去就抛ル処ヲ知ラス、十九日ニ到リ煙炮俄ニ茶城ニ起リ城東之人家悉ク灰燼ト為ル、其騒擾吏ニ筆記スル能ハス、聞クカ如シ池邊吉十郎等原命ヲ受ケ建宮(健軍)村ニ鎮撫局ヲ設クト、依テ同社ヲ伴ヒ建宮村ニ到リ、親類某江津学校ニ在ルヲ聴キ行テ之ニ接シ、名義之在ル所ヲ聞キ、廿二日建軍社ニ到リ七番小隊長杉野逸藏隊ノ伍長ト為リ、廿三日出京町ニ到リ宿陣セリ、廿四日高瀬口ノ官軍梗塞ノ為メ出張伊倉(玉名市)ニ到ル、同所ニ於テ針打銃ニ拾八挺・彈藥三万発許(玉名市)・喇叭・胴乱等分捕セリ、本日分隊長ト為ル、廿五日高瀬岩崎原ニ出張開戦、夜ニ入り猶オ伊倉ニ退キ宿營セリ、廿六日猶寺田(河内町)ニ進撃シ兵士二名銃創ヲ受タリ、夜ニ入り軍ヲ大多尾村ニ揚ク、三月三日小隊長杉野逸藏事故アリ帰家ス、依テ北村盛純小隊長ト為ル、中島忠三郎其欠ニ補ス、八日田原七本村(熊本町)ニ転陣、十一日午後魔軍敗走シ援ヲ請ヒ来ル、直ニ出張接戦官兵数名ヲ倒セリ、官軍進ム能ハス器械ヲ捨テ走ル、十四日

又前日ノ如ク然リ、兩日之死傷半隊長中島忠三郎、兵士一名戦死シ兵士三名銃創ヲ受タリ、兩日之勝聞木留本營ニ達シ酒肴ヲ贈リ戦士之勞ヲ慰メ、且ツ一番・四番各半隊ヲ以テ援トシ、十番・十一番ヲ以テ交代トシ出張シ来レリ、十六日木留村ニ到リ兵ヲ休フ、十七日大多尾村出張之命有り、直ニ発足大多尾村ニ到リ滞營セリ、前日之役ニ三番小隊長・同隊半隊長戦死シ、其他死傷多キ故ニ三・七兩小隊合併之命有り、北村盛純小隊長、太田保・内藤儀十郎・友成正雄・下田一己・竹内武繁太・金津靖軍監、賀來信門右半隊長、間部元治左半隊長、高橋專太・郡彈九郎・間部眞夫・某分隊長ト為リ、更ニ三番小隊ト改称セリ、同所山嶺ヲ守リ二十有余日滞營セリ、四月十二日(河内町)三ノ嶽ニ転陣シ四番小隊ト交代セリ、十三日夕川尻之敗報ヲ得夜中軍ヲ揚ケ、中村ニ少留シ石坂ニ到リ大隊ヲ纏メ、夜ニ入り木山路ニ向ヒ、迷テ道ヲ失ヒ一民家ヲ叩キ少留シ、天明ヲ待テ木山ニ達シ、猶出張之命有り、直ニ発足鹿歸瀨村ニ到リ宿營セリ、十九日夜ニ入り報アリ曰ク、御船地方薩・肥兩軍大敗セリ、宜シク急ニ矢部ニ退クヘシト、直ニ引揚ケ男成村(矢部町)ニ到レハ、御船之敗兵纒ニ過半ヲ残セリ、依テ各小隊ヲ合テ五中隊ニ変製(編制)シ、

一 秋田 県

某ハ二番中隊北村盛純隊之半隊長ノ命ヲ受タリ、廿四日人吉引揚之命アリ、同夜発足、國見山之險ヲ越ヘ廿五日雞鳴漸ク奈須尾前村ニ達ス、是ヨリ二泊ヲ経テ人吉ニ達シ兵ヲ休フ、五月初旬遠ノ原ニ出張ス、于時水俣口ノ官軍進テ山野ニ在リ、是ニ於テ本管夜襲之議ヲ起シ、白布ヲ約シ標ト為シ鹿道ヲ尋テ進ム、途中天明ルヲ以テ猶遠ノ原ニ退ク、兩日ヲ経テ又薩・肥ノ兩軍味爽ヨリ進撃、官軍防ク能ハス山野町ヲ焼キ水俣ニ走ル、追撃水俣ニ到リ警備ス、四五日ヲ経上木場ニ到レリ、魔軍正面ニ当リ我一隊突出横撃、官軍拒ク能ハス守リヲ捨テ退ク、此ノ日銃機・彈藥等分捕セリ、滞管中数々戦鬪シ互ニ勝敗アリ、六月上旬魔軍敗ル、ヲ以テ退戦、遂ニ大口ニ到リ猶(大口市)高隈山ニ出張、是ニ於テ分隊長ニ転セリ、此ノ時ニ当テ官軍攻撃甚タ急ナリト雖トモ抜ク能ハス、故ニ大炮数門ヲ集メ攻撃雷ノ如ク我諸塁尽ク瓦解ス、明曉官軍雨ニ乘シテ攻撃シ来ル、遂ニ敗テ大口ニ走り配兵防戦ス、幹事内藤儀十郎・竹内武繁太・小隊長間部元治・兵士二名銃創ヲ受ケ、兵士一名戦死セリ、遂ニ敗テ退キ千代川ヲ越(本城、妻利町)ヘ本庄ニ到リ宿營中又半隊長ト為ル、十余日ヲ経テ横川ニ退キ戦フ、中隊長北村盛純重創ヲ受ケ、兵士一名戦死

セリ、遂ニ敗テ踊(牧園町)ニ退ク、幹事太田保中隊長ト為ル、六月下旬大久保ニ到リ返戦ス、兵士一名銃創ヲ受タリ、魔軍敗ル、ヲ以テ瀬田押村ニ退キ十文字ノ魔軍ヲ援ケ、且ツ戦ヒ且ツ退キ都城(郡部町)義原ニ到リ接戦ス、兵士一名戦死シ、兵士五名銃創ヲ受タリ、遂ニ山ノ口ニ退キ返戦数合延岡ニ到リ、遂ニ長井村ニ退キ、降伏之説ニ随ヒ熊本隊一同降伏シ、熊本臨時裁判所ニ於テ懲役二年之命ヲ蒙タリ、

熊本県第一大区五小区  
下ノ通丁

明治十一年二月  
末松直道

二四 松本利器上申書  
記出兵中之顛末

元私学校党ニ与セスト雖トモ明治十年二月西郷隆盛・桐野利秋・篠原國幹等上京之原因ヲ聴キ、以為ラク義挙也ト、断然出校シ二月八日第四大隊六番小队松下助四郎隊之押伍ト為リ、同十六日進発、同廿二日熊本川尻ニ到レハ、既ニ一二大隊ハ熊本城ニ向ヒ戦端ヲ開キ、炮響雷ノ

某

如ク止ム時無シ、直ニ進向城東ニ到レハ、魔軍各所ニ嘖  
咽シ恰モ群蟻之甘ニ集ルカ如シ、午後ニ到リ植木地方官  
軍進入之報ヲ得、(池上四郎隊長)五番大隊二番小隊長村田三介、四番大  
隊九番小隊長伊藤直二、(兼カ)同十番小隊長橋口成一、我隊ヲ  
合セテ四小隊、直ニ植木ニ向ヒ進軍薄暮ニ到ル、官兵果  
シテ植木ニ來進ス、我各隊砲發遂ニ接戦殺傷相当ル、客  
地暗夜地理ヲ弁セス兩軍交々退ク、彈藥三千発入三管分  
捕各隊ニ配賦ス、其夜陸軍士官聯隊旗ヲ持シ転伏セリ、村  
田某之ヲ捕獲ス、官軍ノ引ヤ頗ル狼狽、肥・筑ノ国境(南關四)  
ニ走ルト聴ク、其追撃セサルヲ惜ム、廿三日猶植木ニ出  
張、(玉東町)途中木ノ葉地方ニ当リ砲声之響ヲ聴キ、直ニ進発、  
半隊山手、半隊正面ト定メ進軍挾撃ス、官軍支ユル能ハ  
スシテ退ク、追撃殆ト一里、分捕針打銃廿四・管彈藥拾  
箱・乘馬二疋・樂器・胴亂等其數夥多也、猶植木ニ退キ  
宿陣、廿五日官軍山鹿口ニ進入ノ報アリ、此ノ時ニ当リ  
隊兵加倍殆ト十小隊ニ及ヘリ、各隊軍議、向フ所ヲ部署  
シ、直ニ山鹿ニ進ム、官軍更ニ來ラス只各所ニ予備スル  
耳、廿六日昧爽官軍襲來各隊銃争接戦、兩軍之銃丸恰モ  
雨霰ノ飛カ如シ、是ニ於テ我小隊長松下助四郎挺前銃丸  
ヲ受ケ呼テ曰ク、敵軍既ニ敗レ將ニ走ラントス、吾レ脚

部ニ銃創ヲ受ケ進ム能ハス、伍々追撃ヲ要ス、因テ顧ミ  
スシテ尾撃ス、午後山鹿ニ退キ宿營ス、是ニ於テ重久嘉  
右衛門、松下ニ代リ小隊長ト為ル、廿七日官軍高瀬口進  
入ノ報ヲ得、間道ヲ守衛ス、廿九日頃木ノ葉方苦戦ノ報  
ヲ得、第四大隊一番小隊長堀新次郎・同六番小隊長重久嘉  
右衛門各々隊下ヲ率ヒ応援ス、午後我隊轟村ニ転陣ス、  
卅日名智山ニ砲声相響クニ依リ直ニ進軍正面ニ向フ、官  
軍稍ヤ退クト雖トモ日已ニ没スルヲ以テ、猶轟村ニ退キ  
警備ス、三月四日頃官軍襲來攻撃急也ト雖トモ固守退カ  
ス、是ニ於テ左分隊ヲ拔キ左翼ノ山ニ登シ横撃ス、官軍  
辟易進ム能ハスシテ退ク、是ヨリ七晝夜止戦無シ、同十  
日頃山下喜衛隊ニ交代シ、(榑木町)木留ニ退キ兵ヲ休フ、十二日  
頃田原口苦戦ノ報ヲ得、直ニ進発正面ニ向ヒ進撃官軍ヲ  
追退ス、于時小隊長重久嘉右衛門其他三官皆戦死シ、自ラ  
隊長代理ト為リ、松岡勇右衛門半隊長代理ト為ル、十四  
日頃貴島清隊ニ交代シ、猶木留ニ退キ兵ヲ休フ、十六日頃  
白濱村ニ出張シ海岸ニ掘リ予備ス、一日官兵輕舸ニ乗シ  
(河内町)海面ニ向ヒ來ル、直ニ砲發拒守ス、輕舸退去ル、于時軍  
艦四五艘遙ニ洋中ニ在リ、砲丸屢々該地ニ來ルト雖トモ  
患無シ、是ニ於テ川尻口或ハ木留口へ各分隊ヲ出シ応援

一 秋田県

セリ、四月十四日川尻口大敗惣軍引揚ノ命ヲ受ケ、(益城町)木山村ニ到リ、官軍飯田、山ニ進登之報ヲ得、二十中隊許リ陸續進登スト雖トモ官軍更ニ見得ス、転シテ御船町ニ向フ、該地モ亦タ然リ、因テ予備配兵中官ノ斥騎来リ窺フ、直ニ発炮追退ス、十九日味爽官軍大挙襲来攻撃甚タ急也、虜軍二隊敗走遂ニ全軍ニ波及シ半隊長代理松岡某戦死セリ、我隊矢部ニ退キ他隊ハ田代ニ退ク、廿日惣軍矢部ニ雲集ス、是ニ於テ隊伍編製ノ命アリ、木山口守兵ヲ行進隊ト称シ、某行進隊斥候ト為ル、五月一日頃惣軍人吉ニ退ク、五日頃振武隊既ニ鹿兒島城下ニ到リ拒戦スルニ依リ、我行進一大隊応援ノ為出張之命有アリ、直ニ進発十一日頃吉野村ニ到レハ、振武隊既ニ伊敷地方ヲ固防シ、行進一大隊該地ヨリ帖佐ヲ拒守ス、廿五日頃華倉坂地方ニ当リ兵變昇リ炮響増甚シキニ依リ、某斥候ニ出テ景況ヲ觀ルニ、官軍既ニ諸壘ヲ破リ我行進十番隊將ニ走ラントス、神速馳セ歸リ、二小隊ヲ導キ呐喊相馳華倉坂ヲ取り前後挾撃ス、官軍頗ル狼狽散乱シ器械・彈藥等地ニ委シテ走ル、廿七日官軍雀ヶ宮・長瀬戸諸所ノ岡阜ニ向ヒ進ミ来ル、短兵急ニ接シ追退ス、六月十五日頃味爽重留海岸軍艦来着直ニ上陸襲来リ、寡兵敵シ難ク援ヲ請ヒ来ル、直

ニ進発スレハ官兵既ニ白金坂ニ進入ノ報ヲ得、路ヲ転シ進向スト雖トモ既ニ大敗ニ及ヒ、路梗シテ行ク能ハス、吉出地方ニ配兵拒守ス、同日吉野地方モ亦タ敗軍之聞有リ、十六日諸隊大進撃シ遂ニ官軍ヲ敗リ旧壘尽ク我有ト為ル、中隊長松岡清助南東ニ戦死シ、彈藥五万発許リ分捕セリ、廿三日頃味爽南方ニ当リ炮声烈響スルヲ聞キ直ニ発足斥候スレハ、官軍武ノ岡ニ向ヒ襲来、直ニ帰當援隊ヲ出シ拒戦ス、即今風雨逆烈炮煙眼ヲ遮リ彼我弁シ難シ、夕陽軍ヲ吉野ニ揚ク、廿四日官軍川上村ニ進入之報ヲ得直ニ斥候スレハ、既ニ該村ヲ過キ瀬原ニ進ミ背後ニ出テ炮発、城山之官軍モ亦随テ進ミ来リ処々兵變ヲ揚ク、諸隊拒守防戦遂ニ帶迫村ニ退ク、廿五日味爽官軍雀ヶ宮且ツ桂山ニ向ヒ襲来、尽日拒戦、夕陽惣軍大敗華棚村ニ退走ス、廿六日加治木ニ退ク、廿九日官軍國分上ノ原ヨリ来進、且ツ軍艦巨炮ヲ発スル雷ノ如シ、海陸敵ヲ受ケ終ニ敗テ新川ニ退キ河岸ニ抛リ拒戦ス、此ノ時ニ当リ眼氣ヲ患ヒ、小荷駄ニ投シ治療ス、八月八日美々津川ニ到リ帰隊、同所山蔭口ノ敗報ヲ得、富高新町ニ退軍中官軍既ニ該地ニ進入橋ヲ断テ固守ス、依テ左翼ノ山ヲ越ヘ漸ク上井村ニ退ク、九日松瀬村ニ転陣ス、八月十一日頃三



田井口ノ敗報ヲ得恒富村(龜岡市)ニ退ク、十三日味爽官軍延岡城下進入ニ依リ長井村(北川町)ニ退キ北方ノ壘ヲ拒守ス、十六日官兵四方ヲ囲ミ恰モ籠鳥ノ如ク然リ、同日午後鹿兒島地方ニ向ヒ切抜ノ計ニ決シ、諸隊本營前ニ隊列シ、当夜十時頃順次進発、西方山嶺ニ登リ眼下官軍之野陣ヲ瞰ヒ直ニ狙撃ス、官軍狼狽散乱シテ走ル、此ノ時ニ乘シ神速該地ヲ過ク、官兵左翼ノ山ニ登リ防戦、我隊纔カ五拾余名縦横奮戦、官軍敗レテ退ク、マチネル銃三・管彈藥數官分捕、峻嶺險峰ヲ越ヘ、十九日溪間流水之辺ニ出レハ樵徑左右ニ叉有リ、右ニ向テ進ム、官軍梗塞スト雖トモ奮戦踏破シテ過ク、是ヨリ岩戸(高千穂町)ニ到ル、晝夜兼行連戦皆ナ勝ツ、恰モ無人ノ境ヲ行カ如シ、途中針打銃ノ彈藥拾箇分捕リ官兵死傷算無シ、是ニ於テ惣軍ヲ纏メ前・中・後ノ三軍ニ分チ、廿二日前・中二軍ヲ発シ、後軍ハ残りテ該地ヲ守衛シ、薄暮三田井口ニ着ス、中軍留リ戦ヒ又勝チ分捕夥多也、夜ニ入り該地ヲ引キ揚ケ須木郷ニ着陣ス、廿七日進テ栗野郷ニ着陣一泊、小林・飯野郷守衛之巡查十有余名ヲ生捕ス、廿八日進テ横川ニ到リ軍ヲ潜メテ間道ヲ過キ踊郷(牧野町)ニ出テ兵ヲ纏ム、廿九日味爽溝邊路ヲ横通シ山田郷ニ到リ巡查五名ヲ生擒シ須臾兵ヲ休フ、途中官

軍突出横撃スト雖トモ追退踏破シテ是ニ到レリ、午後一時頃進発蒲生郷ニ着陣ス、九月一日味爽前・中二軍、鹿兒島ニ進入戦争、于時後軍ハ華棚村(花棚)ニ到リ官軍數隊ニ行逢ヒ互ニ防戦、夜ニ入り又間道ヲ認メ關屋ニ出テ牧山ヲ過キ、中・上別府ヨリ雀ヶ宮(鹿兒島市)ニ到リ、二日鹿兒島ニ進入(鹿兒島市)越ノ壘ヲ守ル、官軍直ニ襲来ル、前・中軍劇戦時ヲ移ス、官兵米倉ニ入り楯ト為シテ戦フ、三日午前桂山・瀬原口敗走旧城内ニ退キ砦柵ヲ築キ防守ス、五日夜ニ入り貴島清・本郷萬兵衛、隊兵一小隊余ヲ率ヒ金倉ノ官兵ヲ夜襲シ帰ラス、是ニ於テ又隊伍ヲ編製シ、某八番小隊長ト為リ旧千眼寺ノ岡ヲ守衛ス、于時官軍ノ攻撃ヲ受ケ兵士散乱ス、因テ白炮指令官ニ転任ス、鹿兒島進入之際四斤炮五門・白炮九門・同彈藥・針打銃彈藥百卅箱、其他分捕品夥多也、是ヨリ官軍ノ攻撃日一日ヨリ甚シク、巨炮小銃響キ雷ノ如ク寔ニ筆記スル能ハス、廿四日味爽西北ノ官軍襲来各所敗ヲ取り、西郷・桐野・村田・桂等(久武)從容腹ヲ割テ死ス、是ニ於テ某上村某ノ邸ニ潜伏、知己陸軍少佐田中某ノ過ルヲ見出テ降伏ス、

鹿兒島県一大区四小区

明治十一年二月

松本利器

## 二五 金津 靖上申書

### 記出兵中之顛末

我熊本県士之風ヲ為スヤ三党ニ分派シ、民権ヲ主張シ官吏之選<sup>(選)</sup>、都テ投票ニ決スルノ論ヲ持スル者アリ、目ケテ民権党ト云、宮崎八郎其魁也、皇国往古之旧習ニ泥ミ西洋新奇之風習四体ニ触ル、ヲ穢トシ只管ラ 国神ヲ崇敬スル者アリ、目ケテ敬神党ト云、太田黒鐵平其魁也、是レ則チ前年鎮台兵營ヲ襲撃シ或ハ鬪死或ハ屠腹殆ト殲キル者也、

## 一 秋田県

皇統連綿ヲ主トシ民権ヲ嫌ヒ、周公・孔子之道ヲ尊ヒ西洋器械之術ヲ採リ議論確々タル者アリ、目ケテ學費党ト云、此ノ党各社ニ区分シ一社々々交情ノ密ナル頗ル死生ヲ与ニスルノ勢也、各社衆望ノ属スル者ヲ池邊吉十郎ト云、進退去就其命ニ随ヘリ、之ニ繼ク櫻田惣四郎・山崎定平・松浦新吉郎等也、某モ亦タ其党ノ一人也、明治十年二月初旬西郷隆盛之挙動熊本ニ風聞シ人心紛擾進退抛ル処ヲ知ラス、実ニ波上之瓢ノ如シ、豈ニ凶ラン哉、池邊等県庁ヨリ鎮撫專任之命ヲ蒙リ、新町師範学校ニ一局

ヲ闢キ、各社ヨリ三々五々之壯丁ヲ招キ置キ何等之命ヲ伝ヘリ、同十九日某師範学校ニ在リ非常号炮ヲ聴キ一座大ニ驚キ、直ニ門外ニ出テ北方ヲ望ムニ、煙焰茶城之本台ニ起リ殆ト市中ニ類焼之勢也、依テ其席ヲ解キ四方ニ分散セリ、某同社茶城之東ニ在リ、直ニ馳テ之ニ向エハ煙焰道ヲ掩ヒ実ニ行ク可カラス、老若男女南馳東走其粉擾筆記スル能ハス、某社中既ニ水前寺一宮萬次郎宅ニ集会スルヲ聴キ馳テ之ニ到レハ、果シテ各員列坐シ鎮撫局已ニ建宮村ニ転セリ、廿一日夕同社長城市郎来リ同社集会所ヲ江津学校ニ移転シ、宣言シテ曰ク、今夜月没ヲ期トシ魔軍ノ先鋒鎮台本城ヲ襲撃スルニ随ヒ、与ニ戦端ヲ開ク由ヲ伝フ、一座驚愕或ハ隣座ニ目ヲ以シ或ハ論說沸起セリ、此ノ時ニ当リ櫻田惣四郎来リ鼓舞シテ曰ク、嗚呼我徒之文弱因循ナル哉、戊辰以来天下ノ為メ七八分ハ力ヲ尽シ未タ十分死力ヲ尽ス有ラス、加之ナラス西郷隆盛之兵ヲ起スヤ其名無キニアラス、隆盛陸軍大将タリ、桐野利秋・篠原國幹陸軍少將タリ、政府刺客ヲ遣フノ姦計顯然セリ、其証券東京警部中原尚雄口供之有ル在リ、此ノ挙誠ニ義挙ト謂ツ可シ、此ノ時ニ当リ有志ノ輩ヲ命ヲ致サスンハ何レノ時乎之レ有ラン時乎、時失フ可カラ

サル之秋也、松浦等モ亦タ随テ懲慙ス、是ニ於テ衆情一  
ニ帰ス、廿二日建宮村建軍社ニ到レハ鎮撫局交シテ本營  
ト為リ、大隊編製略ホ成リ、池邊吉十郎大隊長、松浦新  
吉郎大隊副長、山崎定平・櫻田惣四郎・大里八郎等參謀、  
佐々友房一番小隊長、鳥井某二番小隊長、城市郎三番小  
隊長、深野一三四番小隊長、其他五六ヨリ十四五番ニ到  
ル、某三番小隊ノ幹事ト為リ、夕陽大隊ヲ発シ出京町ニ  
到リ滯陣、廿五日高瀬口ノ官軍梗塞ノ為メ出張整列中、  
京町地方ニ当リ銃声相ヒ響キ、稍ヤ遠ク稍ヤ近ツク、我一  
小隊咄嗟闕ヲ作り馳テ之ニ到レハ果シテ茶城之官軍也、  
直ニ開戦二時間余、官軍進ム能ハス出町学校ヲ焼キ退軍  
セリ、我隊伍長小野某銃創ヲ受ケタリ、夕日出京町ヲ発  
シ高瀬地方出張、廿六日全軍千余名寺田山配兵中官軍之  
突進ヲ受ケ大敗、我小隊隻発ヲ放タス種樹町ヲ過キ大窪  
村ニ退ク、夜ニ入り大隊長池邊某銃創ヲ受ケ来ル、大隊  
副長松浦某ヨリ池邊治療ノ周旋ヲ某ニ託セリ、依テ二本  
樹村麿ノ病院ニ護送シ治療ヲ受ケ、清水村石川某ノ宅ヲ  
借用シ熊本本營ト称シ十有余日滯營セリ、当今我三・七  
兩小隊田原七本村出張之報ヲ得三月十一日本營ヲ辞シ、  
七本村宿營ニ到レハ、小隊長城市郎語テ曰ク、我隊之士

氣猛烈火ノ如ク、一大快戦ヲ要スト雖トモ魔軍山野ニ噴  
咽シ戦鬪ノ位地無シ、只タ休兵ト均シ、遺憾々々、然ト  
雖トモ官軍近衛之赤帽攻撃甚タ急也、魔軍加治木ノ強兵  
山ヲ抜キ川ヲ渴カスノ力モ殆ト支ユ可カラス、戒メサル  
可シ乎、午後ニ到リ魔軍敗走、我兩小隊ニ援ヲ請ヒ来レ  
リ、直ニ候騎ヲ出ス、騎返リ報シテ曰ク、魔軍既ニ赤帽  
ニ突破セラレ救フ可カラ不ル之勢也、兩隊大ニ怒リ吶喊  
相馳セ、半隊正面ニ当テ半隊樵徑ニ廻シ左右挾撃遂ニ接  
戦所謂赤帽数名ヲ倒セリ、官軍進ム能ハス銃機ヲ地ニ委  
シテ走レリ、十四日又前日ノ如ク銃器・彈藥等分捕帰營  
セリ、此ノ役ヤ兩軍之銃炮山野ニ轟キ雨霰雪雹晝夜瞬間  
已ム時無シ、実ニ前後未曾有之劇戦也、兩日之死傷小隊  
長城市郎・分隊長一宮萬次郎・兵士一名戦死シ、分隊長  
猿木宗那・兵士四名銃創ヲ受タリ、十五日兩日之形状木留  
本營ニ達シ、酒肴ヲ贈リ薄カ戦士之勞ヲ慰メ且ツ一番・  
四番各々半隊ヲ以テ援トシ、十番・十一番二小隊ヲ交代  
トシ出張シ来レリ、然ト雖トモ隊長ヲ失ヒ去ルニ忍ヒス、  
夕陽弔戦ノ為メ進撃スト雖トモ官軍ノ銃丸雨注実ニ進ム  
能ハス、退テ諸壘ヲ守レリ、是ヨリ近衛・鎮台兩官兵ヲ  
目ケテ赤帽・黄帽ト云、十六日十番・十一番ニ交代シ木

留ニ到ル、本営又鶏ト肴トヲ贈リ、前役戦勝之功ヲ賞セリ、十七日三・七兩小隊大多尾村出張ノ命アリ直ニ進発大多尾村ニ宿営セリ、前役ニ隊長ヲ失ヒ其他死傷之レ有ル故ニ、兩小隊合併シ更ニ三番小隊ト改称ノ命有リ、北村盛純小隊長、太田保・内藤儀十郎・友成正雄・下田一己・竹内武繁太・某六名軍監、賀來信門右半隊長、間部元治左半隊長、高橋專太・郡彈九郎・末松直道・間部眞夫等四名分隊長ト為リ、同所山嶺之諸壘ヲ守リ廿有余日寸兵ヲ接セス只タ甚戦拵争ニ時曰ヲ送ル、滯営中四方之官軍攻撃甚シク防禦ノ兵員至テ乏シ、茶城囲ミノ兵ヲ点拔シ漸ク其用ニ充テリ、是ニ於テ池邊某魔ノ本営ニ到リ議シテ曰ク、寡兵ヲ以テ四方之敵ヲ拒ク敗ヲ取ル宜ハナル哉、某奇計之有ル在リ、試ニ之ヲ演ヘン、方今茶城囲ミノ兵員數千ヲ費ヤセリ、是ヲ以テ四方防禦之兵數甚タ乏シ、城之東ニ壺水之一派有リ西ニ芹川之一派有リ合テ一ト為ル、此ノ末流ヲ壅カハ城西段山巖湖水ト為ル十日ヲ出ス、然ラハ則チ西一方之困ミヲ剩セリ、此ノ兵ヲ四方二分賦シ欠乏ヲ弥縫スル如何ン、桐野等隊ヲ打テ曰ク、善イ哉真固ノ良計也、直ニ石工某ニ命シ北岡觀音嶮ヲ壅キ水ヲ溜ス、果シテ十日ヲ出テス湖水ト為ル、城中之官軍モ亦

夕随テ驚愕スルノ聞有リ、四月十二日三ノ嶽(河内町)ニ転陣四番小隊ト交代ス、夜ニ入り嶽ノ絶頂ニ登リ南方ヲ望ムニ兵聚各所ニ起リ煙焰天ニ漲ル、衆皆ナ議テ曰ク、方位川尻ニ当レリ、或ハ敗ヲ取ルナラン、十三日夕陽ニ到リ果シテ敗報至ル、是ニ於テ我一・三・四三小隊守ヲ迦シ応援之議有リ、夜ニ入り又報有リ曰ク、川尻之敗遂ニ救フ能ハス、官軍既ニ茶城ニ達セリ、神速軍ヲ揚ケ中村ニ到リ命ヲ待ツ可シト、因テ一炬ヲ持セス山嶺ヲ下ル、于時微雨曠暝咫尺弁シ難ク、或ハ転シテ膝ヲ創キ或ハ倒レテ頭ヲ痛ム有リ、行路酸辛漸ク中村ニ到レハ東方既ニ白シ、此ニ於テ議シテ曰ク、此ノ凹地ニ兵ヲ集ム、敵軍襲来レハ則チ敗ヲ取ル必セリ、宜シク鹿(鹿子木)ナ子木村ニ到ルヘシト、衆皆此ノ議ニ從ヒ鹿(北郡町)ナ子木ニ到リ、鹿(鹿子木)ノ大隊長實島某ニ逢フ、某告テ曰ク、鳥(西台志町)ノ巢地方ノ兵既ニ木山(益城町)ニ退ク、君等如何セント欲スル乎、因テ石坂ニ到リ大隊ヲ纏ムレハ日已ニ西山ニ没ス、夜ニ入り木山路ニ向ヒ迷テ路ヲ失ヒ大声ヲ認メ一民家ヲ叩キ坐睡ヲ貪リ、蹲鴟子ヲ買ヒ飯ニ当テ、天明ヲ待チ木山灰塚村ニ達ス、姑シテ池邊等魔ノ本営ニ到リ議シテ曰ク、南方独り敗ヲ取リ士氣沮喪スト雖トモ、西北ノ兵又以テ戦フ可シ、故ニ山鹿通路ヲ界トシ

梗鬪スル如何ン、桐野等固ク採テ聴カス、因テ止ムヲ得  
ス木山ニ退ケリ、是ニ於テ又櫻田等ニ議シテ曰ク、今我  
全隊死傷夥多也ト雖トモ未タ七八百ニハ及フ可シ、奮戰  
開ミヨ潰シ直ニ茶城ヲ突キ斃テ後已ン耳、櫻田抗議シ曰  
ク、否ナ茶城ノ堅、君カ知ル所、今寡兵ヲ以テ之ニ向フ  
皆斃レン耳、斃ル、ハ是レ易ク繼ク者無キヨ如何ン、果  
シテ無益ニ屬ス可シ、一座櫻田之説ニ左袒ス、故ニ攻城  
之議停止セリ、十五日又報有リ曰ク、官軍襲来ルト、直  
ニ進発スレ共更ニ来ラス、魔ノ出張本營ニ到リ貴島某・  
中島某ニ面議シ、白河・河邊(熊本北東部)・鹿歸瀬村ニ出張セリ、十  
九日夜ニ入り報アリ曰ク、御船地方薩・肥前軍大敗死傷  
無算ナリ、一隊分レテ河岸ヲ守ル益無シ、宜シク兵ヲ矢  
部ニ揚ク可シト、因テ該地ヲ退キ河原村ニ到レハ天既ニ  
曉ニ到ル、大矢越山嶺ニ登リ処々ノ兵蹙ヲ眺望シ、父母  
之國去ルニ忍ヒス石ニ踞シテ少留セリ、寔ニ明治十年四  
月廿日也、薄暮矢部男成村(矢部町)ニ到レハ、御船之敗兵纔ニ過  
半ヲ残セリ、是ニ於テ乎各小隊ヲ合テ五中隊ニ編製シ、  
某ハ二番中隊北村盛純隊之幹事ト為レリ、廿四日報有リ  
曰ク、此ノ山間隘地ニ大軍ヲ集メ曠日弥久兵食ニ乏シ、  
且ツ彈藥運搬等甚タ不便也、宜シク人吉ニ到リ險ニ抛リ

敵ヲ梗ス可シ、然ト雖トモ通路國見山之險有リ、行程八  
里余一ノ民家無シ、恐クハ飢渴之憂ヒ有ラン、此ニ於テ  
餅菓ヲ製シ每員背ニ負フテ國見山ニ向フ、果シテ千峰雲  
間ニ巍立シ羊腸一ノ樵徑ヲ通ス、于時零雨其レ矇タリ、  
泥濘寒ニ膝ヲ没シ數千ノ兵馬魚貫迂廻シテ過ク、溪間ノ  
残雪未タ消ヘス、沿道ノ散桜飛雪ノ如ク、頗ル龔爺之退  
魯ニ宛然タリ、蜀道艱難鷄鳴漸ク尾前村ニ達ス、是ヨリ  
二泊ヲ経テ人吉ニ到リ兵ヲ休ヘ青井社(青井神社)ニ於テ軍陣祭ヲ施  
行セリ、四五日ヲ経テ遠ノ原(球磨村)ニ出張、途中膿病ヲ患ヒ、病  
院ニ投シ遂ニ日向之國延岡ニ到リ、漸ク快怙シ本隊ニ帰  
隊セリ、八月十二日門川村(門川町)ニ出張シ河岸ニ抛リ拒守ス、此  
ノ時ニ当リ兵員稍ヤ減少シ右翼之備ヘ無シ、故ニ魔ノ本  
營ニ談シ兵ヲ借ント欲シ、行路中官軍四團脱スル能ハス、  
山林ニ潛ミ愚按スルニ、格鬪死ヲ致シ乎將タ屠腹セン乎、  
脚蹠盤桓決シ難シ、是ニ於テ又按スルニ二ノ者益無シ、  
独リ此ノ山中ニ死シ狐狸之食ト為ランヨリ、寧ロ官ノ本  
營ニ到リ降伏謝罪從容刑ニ就クニ如カス、十三日警視隊  
ニ自首シ、遂ニ熊本臨時裁判所ニ於テ懲役五年之命ヲ蒙  
リタリ、

右出兵中之顛末御達之旨ヲ奉シ録呈シ奉リ候得共、入

檻中一小札ヲ齎ラサス、月日等間違之レ有ル可ク他ノ  
明文ト御照覽奉願候事、

熊本県第一大区四小区

出京町

明治十一年二月

金津 靖

## 二六 松下助四郎上申書

這回御達之旨ヲ奉シ我隊線路及臨地之景状目撃之概  
態ヲ登記シ、併テ參考ニ供スル左ノ如シ

一 予曩ニ鹿兒島私学校徒ニシテ同校ニ従事スル已ニ二週  
年、明治九年八月一等巡查拜命、同年十二月日州延岡  
分署ニ派遣セラル、同署在勤之際、陰ニ鹿兒島紛擾云  
々伝聞セリ、然レドモ其事情尽スニ由ナシ、

一同月廿五日鹿兒島本署詰一等警部中島健彦ヨリ三等巡  
査仁禮喜次郎ヲ使テ迅速帰県之旨ヲ促セリ、予仁禮カ  
供述ヲ聞キ其事端ヲ知り直ニ帰途ニ向フ、

一同月廿九日予出營スルニ、西郷隆盛・桐野利秋・篠原  
國幹・村田新八等其他列坐動議紛々タリ、予進ンテ其  
原由ヲ問フ、答フルニ中原尚雄等カ口供ヲ以テシ、予

聞イテ慨然不得止之秋ナリト、忽チ事ノ遷延スヘカラ  
サルヲ信シ憤然進軍ノ謀議ヲ尽セリ、議成テ予四番大  
隊(隊長)六番小隊ノ隊長トナリ、半隊長重久嘉右衛門、分隊  
長深見清次、小隊人員二百余名ヲ屬セリ、

一 二月十六日同上隊ヲ熊本線エ向ケ進発、同廿二日曉熊

本県川尻エ着、既ニ本月十五日発進スル我先鋒一番・  
二番大隊及加治木隊等熊本城ニ攻撃スルヤ炮声頗ル盛  
ナリ、我隊統イテ進撃諸口ニ向フ、時ニ五番大隊二番  
隊長村田三介カ勢モ、出水口ヨリ乗船議約時ヲ遷サス

熊本エ上陸直ニ進軍シ、恰モ盃中ノ羹餅ニ蟻集スルニ  
似タリ、此日各隊已ニ熊本城周囲ニ充テ城兵頗ル苦戦、

予カ隊、官兵之植木線ニ進ムヲ聞キ爰ニ時ヲ費サンヨ  
リハト直ニ同地方ニ進入シ、此時四番大隊九番隊長伊  
東直二・四番大隊十番隊長橋口成一・五番大隊村田カ  
勢等陸続同線ニ向フ、向フ所ノ各隊ヨリ植木町手前エ

斥候ヲ出シ及伏兵ヲ置ク、昏夕ニ至リ計ラス官兵植木  
口ニ來進ス、我各隊発炮稍烈シク接戦數時彼我死傷尤  
モ多シ、然レトモ夜戦地理不弁、攻撃意ニ任セス、官兵

又然リ、漸ク十二時頃官兵退ク、其引ヤ跡ヲ不見、廻ニ  
拾有余里筑境(南關町)南關ニ走ルト、其夜植木街衛ニ陸軍士官  
(河原林雄太少尉)

一名駢隊旗ト共ニ伏倒セリ、村田三介村田之レヲ捕獲シ当夜官軍之襲来アラシキ計リ各隊植木ヨリ壱里位ノ地ニ引ク此日分捕左ノ如シ、

玉葉 三千発入 三宮

一同月廿三日昧爽植木口エ進軍之所、玉葉木ノ葉之方ニ当リ

炮声聞エ、直ニ該地ニ進撃シ、此日隊ヲ二ツニ分チ一ヲ本道、一ヲ山手ト定ム、既ニ本道ニ進ムノ勢四小隊位、山手エハ神宮司助左衛門隊及予カ半小隊ナリ、本道撃戦烈シク戦時尤モ長シ、午後四時比神宮司カ勢官兵ノ背面中央ニ突入シ、官兵前後防戦叶ハス終ニ引退ク、各隊一里程尾撃シ、此時官兵木ノ葉ノ病院ヲ自焼シ且死傷多シ、我兵又植木ニ陣ス、其官兵ノ本營ヨリ分捕スル物品左之如シ、

針打銃 廿四宮 彈藥 拾箱

乘馬 二疋 樂器・胴乱

一同月廿五日山鹿口エ官軍進入之報アリ、我各隊植木ニ軍議シ各隊ノ向フ所ヲ定ム、此時隊兵増加十小隊ニ充チ之レヲ三方面ニ分ツ、一ハ本道ヨリ外左右山手ヨリシ、直ニ山鹿ニ進ム、官兵更ニ不見得、此日空ク各所ニ兵ヲ張ルノミ、

一同月廿六日横雲官兵襲来、各隊接戦彈丸雹霰之芦中ヲ抜クニ似タリ、予カ隊本道ニ交戦一勝一敗終ニ官兵ヲシテ半里ヲ引カシム、此時各隊先後ヲ不讓、予尤軍頭ニ進ム、時ニ彈丸飛来予カ脚部ニ受ク、敢テ歩ヲ進ムルヲ要セス、我半隊長重久ニ託シ其身川尻病院ニ入り暫ク療養セン事ヲ欲ス、

一三月十一日予川尻病院ヨリ帰麿、治療ヲ加フ、

一五月十五日鹿兒島ニ戦争アリ、予速ニ上伊敷本營ニ到

リ中島健彦・貴島清等ト面議シ、其節予振武拾三番中隊長トナル、我振武隊ヲシテ則鹿兒島周圍ヲ閉塞シ、

大炮數門ヲ交ヘ防戦數日ニ渉ル、

一六月廿四日昧爽鹿兒島市淚橋地方ニ当リ炮声烈響、予直ニ該地

ニ斥候シ炮声果シテ官兵ナリ、急キ本營ニ馳蹄シ、各隊皆半ヲ分子応援セシム、時ニ官兵頗ル逆戦、又軍艦ヨリ巨炮ヲ横撃シ且ツバツテラヨリ上陸シ偏ニ海陸官兵ナラサルナシ、淚橋ノ守兵其他ノ援兵共ニ苦戦、此日風雨逆烈我兵面ヲ上ル能ハス、然レトモ敢テ一步ヲ不引劍撃ノ火光交テ電光ノ如シ、終ニ我兵折刀乏丸ニ至リ且衆寡敵シ難ク、日没纏兵水頭水上坂阪ニ退ク、

或評、此日之一戦官兵惣軍ノ進撃ニシテ、海軍太輔

川村公諸軍ヲ指揮シ、一期之勝敗ヲ試ミラレシト、

苟モ其説当レリトス、皆官兵ノ征服ヲ着スルヲ見レ

ハナリ、

一同月廿五日後(此ノ日出水口守兵ノ味方、)官兵川上

村エ襲来之報アリ、我四番・十三番隊ヲ分ツテ応援ト

ナシ防戦数時、此時又城山之兵モ来リ我軍ニ衝入シ、

我兵支フルニ術ナク、遂ニ各隊鹿兒島ヲ引キ川上地上

ニ退ク、又後面進入之官兵ト接戦、夕陽西ニ没シ交戦

五ニ止ム、

一同月廿六日未明ヨリ官兵襲来、日没遂ニ吉田方面ニ引

ク、

一同月廿七日我兵蒲生ヲ宿守ス、

一同月廿九日(給良町)涼松地方ヨリ官兵突入一時交戦、遂ニ山田

ニ北走シ、(加治木町)同所防禦ノ際大口方面モ破レ(夜園町)隣迄官兵進入、

我振武隊都テ(加治木町)西別府村ニ引退ク、頃日村田新八(福山)

出張シ中島健彦之レニ軍議セント該地ニ行ク、時二百

引地方官兵進入シ故ニ我振武隊ヲシテ進撃セヨト、当

夜百引線路福山ニ宿陣ス、

一七月一日未吉ヲ(大隅町)經恒吉ニ至ル、

一同月三日百引進撃之軍議已ニ恒吉ニ定ムルト雖トモ、

我斥候ノ探偵頗ル密ニ涉リ、百引之官兵稍守備ヲ怠ル

ト告ク、故ニ百引地方ヲ距ル僅少之原野ニ一時進軍ノ

方向ヲ議シ、已ニ同夜三更ナリ、我一番・二番中隊ヲ

山手ヨリシ、余ハ正面ト定ム、謀議成テ進ムニ偵索毫

モ不違官兵大ニ狼狽高隈・市成等ノ地ニ北シ、我隊敢

テ追撃セス直ニ該所ニ陣ス、当日會計士官一名・夫卒

百二十余名ヲ生擒セリ、其夜官兵後線エ向フノ勢アリ

ト報セリ、故ニ恒吉迄退陣ス、本日分捕左ノ如シ、

大砲 二門、 同彈藥、 針打銃 四拾余挺、

彈藥 拾箱、 醫師治療具 壹箇、 兩眼鏡 七、

厚毛布 壹万枚位、 米 五百俵位、 工兵具、

一同月五日大崎方面エ官兵進入、此日奇兵隊ヲ先鋒トシ

振武コレカ援兵トナル、時ニ進撃線路ヲ(大崎町)謬リ、アラソ

ノト云所ニ至ル、爰ニ官軍一手ノ伏兵アリ、突然発砲

セラル、各軍遂ニ敗走一里位引退ク、路ニ村田新八・

別府晋助ニ逢ヒ、爰ニ向軍ノ謀議ヲナシ再ヒ大崎地方

エ進発シ、此時撃戦最中直ニ進入セントスルニ味方充

分ナリ休息セヨト、暫ク振武遊軍ニ属ス、此日ノ戦終

ニ官兵引退ク、大崎接戦ノ各隊ニ代リ其夜志布志地方

エ転陣守衛ス、



一 同月八日都城之内庄内(都城市)エ転陣ス、是高原方面(高原町)ニ援ノ予備ニ当ル、

一 同月九日高原方面官軍向進之報アリ、我隊直ニ進発シ、兼テ当地方受持タル干城隊新納誠一郎カ手ト合併、平面ニ進撃シ官兵退ク稍一里、時ニ右手ニ当ル干城隊何ヲカシタリケン忽チ潰走シ、我隊防戦ニ堪エス遂ニ惣隊ヲ退ク、

一 同月十一日又々干城隊ト合シ、一手ハ花堂(高原町)、一手ハ野尻(野尻町)口、一手ハ正面ヨリ進軍ス、高原ノ官兵皆柵ヲ敲ニシ容易ク抜ク能ハス空ク庄内ニ帰陣セリ、

一 同月十九日都城本營村田新八ヨリ、中島カ出營ヲ促セリ、予中島ト随行本營ニ至ル、村田曰ク、都城ヨリ財部方面迄ノ地、今既ニ急ナリ、故ニ振武ヲシテ行進ト交代セシメント欲スト、中島・予語ヲ同フシテ答フ、今我振武ハ高原方面ニ進撃スル再度、然レトモ未タ幾分ノ功ヲ奏セス、曾テ方向ヲ換ヘ共ニ其益ナカルヘシ、願クハ高原ヲ抜キ後又速ニ交代セン事ヲ欲スト、村田敢テ不了、戦地事機之緩急ヲ計ラサルヘカラスト、遂ニ其意ヲ取テ議決ス、

一 同月廿一日我隊行進隊ト代リ財部方面ヲ守衛ス、

一 同月廿三日払曉官兵惣軍諸口ニ進入シ、我各隊之ニ抗シ、此日官兵頗ル烈ク、庄内口及末吉方面ニ敗レ、我振武三番本郷萬兵衛、七番仁禮幸右衛門、十三番予カ隊等本道財部方面撃戦中終ニ敵中ニ被囲、故ニ三隊大ニ苦戦且斃レ且殪レ漸ク一方ヲ切抜ク、然レトモ此三隊ノ兵散乱所在曾テ不知、本郷・仁禮・予其他三名辛クシテ杉林ニ匿レ稍息ヲ休メ出ントスレトモ、庄内・末吉等ノ両道官兵進入繁ク如何トモ出ル能ハス、夜ニ入り近傍村落ノ一戸ヲ叩キ土人ノ教導ヲ受ケ漸ク末吉街道ヨリ(日南市)飢肥ヲ差シテ夜行シ、此日ノ一戦ニ三隊悉ク兵ヲ失フ、

一 同月廿六日飢肥旧城下ニ至リ、風聞ニ邊見等カ板屋ニ出張アルヲ聞ク、直ニ同地ニ行ク、途中ニ板屋(北郷町)已ニ敗ル、ヲ聞キ又飢肥ニ戻リ、宮崎地方ニ至ラント清武(清武町)ト云フ所ニテ味方諸口ノ敗兵ニ逢ヒ、振武ノ本營ヲ問フニ彼所ニアルヲ答ユ(地名不詳)、直ニ出營シ同廿八日中島等ニ面会ス、

一 同月廿九日議ニ因テ振武時雨野(官輪市)ヲ守リ各所ニ伏兵シ、官兵斥候ニ中隊程進来ス、囟ヲ取り味方連発シ官兵終ニ退ク、其節分捕左ノ如シ、

彈藥 壹人持拾箇、 外套 百三四拾枚、

一同日官兵又々襲来、我隊是ト交戦シ日没味方敗北シ、

綾ト云フ地ヲ過キ木ノ脇(富岡町)地方ニ退ク、此時桐野利秋来

ル、予ニ謂テ曰ク、振武各隊兵少ナシ、暫ク予ニ振武

一番中隊監軍タルヘシト、又議アツテ爰ニ泊スル二日、

一 八月二日綾川渡口干城隊ノ受持アリト雖トモ危シ、振

武行テ是レカ応援セヨト、直ニ隊ヲ遣リ応援セシム、

稍ヤ有テ官兵襲来炮声烈シク聞ユ、中島予ニ応援セヨ

ト、予尅番中隊ヲ以テ之ニ向フ、行クニ干城既ニ敗ヲ

取ル、本営危シ、故ニ木ノ脇ノ本営ヲ引クヘシト、予

途ヨリ桐野・中島等ニ報ス、已ニシテ綾川渡口ニ至レ

ハ官兵見エス、味方山手エ登ル官兵アリ暫ク防戦シ、

午後二時頃又々味方敗ヲ取り佐土原ニ引ク、此時中島

曰ク、宮崎迄已ニ余地ナシ、各隊爰ニ防禦尽スヘシト、

防戦不叶日没佐土原市街ヲ放火シ一時官兵ノ追撃ヲ壅

キ、各隊佐土原ヲ前ニシ川ヲ界シ守備ヲ定メ迅速台場・

柵等ヲ築ケリ、

一同月四日官兵襲来防戦不叶我隊已ニ本道ニ走ル、此時

上流ヲ守ル干城隊敗潰、官兵本道ヲ絶ツ、進ム不能、

時ニ宮崎ノ敗兵モ爰ニ至ル、終ニ道ヲ換ヘ高鍋ノ浜手

ヨリ夕方都濃(都濃町)ニ至ル、各隊逐次集会、各本営ヲ設ケ暫

ク軍議シ、近傍部落人夫ニ乏シ、故ニ各隊無銃ノ者ヲ

シテ此地ノ患者ヲ延岡地方エ護送シ、其夜各隊美々津

川ヲ界シ台場・柵等ヲ築キ堅守ス、

一同月八日上流山蔭地方敗走ノ報アリ、五番中隊伊集院

早太郎応援進軍シ時ニ官兵不見得、夜襲セン事ヲ報知

ス、又富高(日向市)新町エ官兵進軍セシ報アリ、該地味方ノ後

面ニ当ル、故ニ各隊ヲ引キ新町ニ至ル、払曉官兵同所

ノ橋ヲ落シ堅守シ、邊見・中島等ト議シ爰ニ戦フ益ナ

シト、夫ヨリ山手ヲ通り上流ヲ涉リ上井村(上井野村、門川町)ニ至リ同所

ヲ守ル、新町後面ニアル門川地方(日向市)ニ桐野等本営ヲ置ク、

北郷・市來・予ト出營ス、桐野曰ク、振武ハ延岡ノ間

道上井ヲ守ルヘシト、直ニ帰陣台場ヲ築キ伏兵ヲ置ク、

時ニ官兵ノ斥候ニ中隊位進行シ先歩渡口ニ至リ舟子ヲ

呼フ、間アツテ同隊河側ニ揃フ、已ニ凶至レリト連発

ノ喚令ヲ下タシ衆誤タス発炮ス、官兵苦戦然レトモ不

引、日没互ニ兵ヲ引ク、此日門川エモ官兵襲来味方敗

軍之聞アリ、違ハス当夜各隊延岡線ノ嶮峻ヲ越ヘ三輪(延岡市)

ニ出テ延岡地方ノ手前ニ各隊ヲ集合シ、時ニ三田井口(高千穂町)

敗報アリ、中島曰ク、振武応援スヘシト、該地戦ヒ日

没シテ止ム、時ニ山野田某ト同道三田井口ノ本當高城七之丞ニ面会謀議數刻ニ渉ル一泊シ、

一同月十三日味爽高城カ議ニヨツテ振武ノ内三中隊山手ニ登リ延岡地方ヲ望メハ、兵襲ニケ所ニ昇ル、是果シテ該地敗ナラント豊後線長井村ニ引ク、此所已ニ各隊集合守兵ヲ置ク、振武本道山手ノ二ヶ所ヲ固ム、午後四時比官兵本道ヨリ襲来、我兵漸ク三四拾名直ニ対戦シ、官兵炮擊烈シク味方玉葉乏シク衆寡不敵、我兵銃ヲ捨テ刀ヲ掉テ入ル、官兵稍引ク事拾有余町、斃ル、者拾三四名、我隊之ヲ尾撃シ途ニ官兵ノ伏ニ逢ヒ、突然発炮セラレ不叶、本道ニ退キ再ヒ爰ニ固守ス、

一同月十六日、西郷カ檄ニ、諸口ノ防戦本口是非ニ保ツヘシト、此日豊後口ノ隊兵モ当地ニ引揚ケ、惣軍合シテ進撃シ、味方又敗レ、長井村エ引キ兵ヲ集ム、時ニ官兵長井周囲ヲ囲ム、我各隊兵ヲ分チ防戦スト雖トモ拔不能、官兵炮丸雨ノ如シ、然レトモ諸隊能ク防守ス、一同月十七日夜、各隊ヨリ精兵五名宛ヲ擧、合員二百余名ヲ以テ一方ヲ抜カン事ヲ議シ、策成テ鹿兒島地方ニ当ルノ一軍ニ投入シ官兵道ヲ開ク、各隊順序ヲ以テ續続進ム、已ニシテ前進ノ隊先鋒ノ歩跡ヲ失フ、後軍進

ム克ハス、此時予先驅、臨ンテ進マントスレトモ岩石聳ヘ一夫容易ニ進ム能ハス、此時各隊散乱敢テ纏ハス北郷前ヲ纏ヒ予後軍ヲ納メ通ラントスルニ、夜正二明ナントス、山上ヲ望メハ官軍ノ番兵アリ、通ル能ハス、暫ク溪谷ニ入テ潛匿シ夜ニ入り再出シ淵邊某ニ逢フ、某モ亦予カ如ク然リ、兩人謀議シ終ニ又長井近傍ノ山ニ隱匿シ夜村落ニ出テ饋餉ヲ乞フ、土人懇ニ賄ヲ送リ予等ヲシテ洞穴ニ入レシム、

一同月十九日長井村ニ至リ遁走ノ道ヲ聞クニ諸口官兵守リ嚴シク爰ニ安井村ノ浜手官守兵ヲ引クト、教ニ從ヒ同村ニ至リ、渡航ノ便ヲ乞フ、然レトモ風雨烈シク出船不叶、不得止又々同地ニ潛ム、

一同月廿二日夜、前地ヨリ航船、細島手前ニ着シ、味方ノ動靜ヲ窺フニ、三田井口敗走、門川本道ハ官兵夜白侵入、通路叶ハスト、

一同月廿五日夜鉄肥ノ内尾龍迫ト云所ヲ過キ、浜辺ヲ行キ鶴戸ニ至ル、此時淵邊某共ニ同行所々巡查多シ、故ニ鶴戸ヨリ山中ノ炭小屋ヲ尋ネ案内ヲ得テ山谷ヲ越ヘ、一八月一日山野ヲ越シ都城ノ内梶山ト云所ノ農家ニ至リ味方ノ景況ヲ問フ、西郷等鹿兒島城山ニ籠居戦最中ナ

リト、且味方屢官兵ヲ破リ英氣熾ナリト、爰ニ大ニ力ヲ得再ヒ味方ニ組入ラント案内ヲ乞ヒ夜行シ、

一同月三日末吉ニ至リ又々夜行牛根ニ至ル、(垂水市)

一同月四日牛根ヨリ櫻島ノ内高免村エ着船シ、此時鹿兒島争戦ノ炮声百雷ノ轟ク如ク聞ユ、

一同月七日櫻島ヨリ航海谷山和田ノ下タト云所エ着シ、

此所鹿兒島ヨリ纒カ二里、同地農家ニ入り城山ノ景状ヲ聞クニ、官兵十重二十重ニ柵ヲナシ容易ク入ル能ハ

スト、無依一時此家ニ休息ス、時ニ其日午前十二時比

巡查三四拾名位同家ノ予カ臥戸ニ入ル、予突然楼階ニ

昇ル、巡查統イテ劍撃ヲ掉フ、予刀劍取ルニ間無ク、

順従ヲ伸ヘ縛ニ就ク、

前条記載スルノ頃時日誤ナシトセス、他ノ明文ト照

会推看ヲ乞フ、

鹿兒島県第二大区小五区

明治十一年二月

松下助四郎

二七 上村勇太郎上申書

私儀

明治十年二月十日鹿兒島ヨリ中原太郎兵衛婦郷致シ、此

節陸軍大将西郷隆盛政府へ尋問ノ訳有之上京ニ付随行可

致旨報知ヲ承リ、二月十三日式百名計リ出足、同日鹿兒

島へ着シ、私シニハ第壹番大隊十番小隊ノ兵士ニ編入セ

ラレ、小隊長坂元仲兵衛ニ随ヒ、二月十五日当地発足イ

タシ、廿一日熊本県川尻へ到着、翌廿二日午前六時頃出

立七時頃段山ヨリ熊本城へ攻掛リ、午後七時頃二本木町

へ引揚宿陣シ、半隊ヅツ交代致シ安政橋近辺へ番兵ヲ張

ル、然ル処自分ニハ病氣ニ付三月十五日頃川尻病院へ入

リ、夫ヨリ木山(益城町)・矢部(矢部町)・馬見原(蘇陽町)・三田井(高千穂町)・新町(日向市)・田代(西郷村)・

米良(西米良村)・人吉・鹿兒島県下飯野町ヨリ婦郷仕居候処、再ヒ西

郷隆盛鹿兒島へ軍ヲ還スニヨリ婦郷ノ者ハ鹿兒島本管へ

届出候様トノ廻文ヲ戸長ヨリ差引へ申付触示致シ候付、

鹿兒島横井村迄九月二日帯刀ニテ出張致シ候得共、先ニ

婦順仕居候付違背致シ候テハ不可ナルヲ思付、直ニ立帰

リ罷在候処、警視分署ヨリ御用有之罷出候処、御糺問之

上谷山警視出張所へ御差送り相成入檻罷在候処、九月三

十日長崎へ御差送りニ付、十一時頃出帆イタシ十月一日

着船、十月廿二日裁判所ニテ二年懲役被仰付候、此段戦

地ノ形況等取調差上候也、

鹿兒島県下伊集院郷第二十二大区

五小区百四十一番地

明治十一年二月

上村勇太郎

## 二八 松永平助上申書

私儀

明治十年二月十二日鹿兒島ヨリ井之上周兵衛帰区、此節陸軍大将西郷隆盛ヲ始メ政府へ尋問ノ筋有之上京ニ付隨行可致旨伝達承リ、早々相仕舞当地区内ヨリ三十八名当日出立、同十二日未明鹿兒島へ着ス、即日隊組有之(永山郷 郷)三番大隊ノ三番小隊兵士トナリ、隊長高城七之丞ノ指揮ニ随ヒ、二月十六日当地出立、伊集院・阿久根・出水・水俣・八代・松橋等ヲ経テ、同廿二日熊本三間町へ着ス、以前ヨリ味方ヨリ熊本城ヲ囲ム、同廿三日ヨリ寺原町ヲ守ル、三月十五日(鹿火町)姫井村へ出張番兵致シ、同廿一日当所引揚、味取原へ一泊、翌廿二日植木ノ内(植木町)荒木村へ進撃、初メ官軍ノ台場ヲ乗取り、後一丁余退テ台場ヲ築キ、毎日互ニ応炮イタシ、同三十日頃当台場ニテ左手ニ炮玉ヲ受ケ、御船病院へ入院、矢部ヨリ馬見原・延岡・日州街道ヲ経

テ四月十五日頃帰区療養イタシ居候処、川内水引へ警視分署相立候ニ付、先非悔悟イタシ帰順自首仕自宅謹慎罷居候処、九月三日相良次郎兵衛(川内市)向田ヨリ馳歸リ、鹿兒島兵再ヒ鹿兒島へ襲来リ近日川内表ニモ操込近区動揺ノ趣キ報知スルニヨリ、旧出兵人数集会、一先虚実為探索私共七名限(川内市)ノ城へ出張、当所士族愛甲仲介ニ行逢承ルニ、京泊へ巡查三百名余乗船スルニヨリ当区ノ人数ヲ以捕縛無覚束故、其区内ヨリモ早々參リ吳候様承リ、夫ヨリ馳歸リ衆人へ報知ス、一統一度帰順致シ候上右等ノ企不宜ト一統帰宅謹慎罷居候、同廿七日水引分署ヨリ御用有之御調ノ上、長崎ニ於テ私初メ七名、帯刀イタシ限之城迄出張致シ候科ニ依テ懲役二ケ年被申付候、此旨戦地ノ形況申上候也、

鹿兒島県下永利郷

第二十七大区一小区

明治十一年二月

松永平助

## 二九 福山泰全上申書

私儀

一 秋田県

客年四月戸長ヨリ出兵被申付、同月廿一日発足仕、同廿五日人吉ニ着仕候処、常山隊ノ八番隊長命セラレ、十九日間人吉番兵ヲ相勤メ、五月十三日ヨリ(五木村)頭地へ転陣、同十八日戦争ヲ始ム、同廿一日給養方ニ転役ス、同三十日ノ戦ニ敗軍シ、人吉求摩川ヲ中ニ置テ拒戦スト雖モ利有ラスシテ大畑ニ引揚ケ相守ル、同所破レテ(えびの市)飯野ニ、同所破レテ野尻ニ、同所破レテ高岡ニ、同所破レテ佐土原ニ、同所破レテ美々津ニ、同所破レテ延岡ノ内(門川町)門川ニ引揚、此地ヨリ隊ヲ脱シ八月廿三日帰宅、都城分署ニ於テ帰順自首仕候処、自宅謹慎被申渡、同廿六日御用申来リ其日ヨリ御拘留ニテ、同二十八日鹿兒島警視出張所ニ御差廻相成、出物蔵檻倉ニ入檻罷在候処、九月一日午前十時ヨリ炮戦相始マリ十二時頃ニテモ候ハン誰タルヲ知ラス馳来リ戸相開キ候ニ付出檻シ、加鹽爲幹・山下良全三人同列ニテ罷帰、都城分署ニ自首仕候処御拘留ニテ、九月八日宮崎エ護送相成、十月廿六日長崎エ差廻サレ懲役二年ノ命ヲ蒙候、此段御調ニ付申上候也、

鹿兒島県第百五大区日向国

諸県郡都城百拾番地住

明治十一年二月

福山泰全

三〇 今村市郎左衛門上申書

私儀

兼テ私学校エハ入校不致候得共、明治十年丑四月廿五日頃出発致候様、蒲生ヨリ廻達有之、右ニ付所詰居巡查被召列四月下旬頃兵士ニテ宿許出立、(國分市)敷根本營エ届申出候処、本營ノ長伊東新八ヨリ指揮ヲ受ケ、切隊五番小隊長被申付、半隊長中島源八、分隊長大重庄五郎、兵士六拾名位、五月中旬頃國分小村町エ引揚、暫ク番兵仕居候処、七月上旬頃(國分市)鸕山ノ内大久保エ引揚ケ相堅メ居候処、官兵西手ノ方ヨリ攻撃シ、夫故抗敵致候処、味方散々ニ相成七月中旬頃帰区、其後宮之城分署エ差越帰順書差出申候処、自宅謹慎被仰付罷在、此段形行申上候也、

鹿兒島県下第三拾一大区

二小区入來郷

明治十一年二月

今村市郎左衛門

三一 佐多城右衛門上申書

私儀

先般出軍ノ原由タルヤ、客年六月上旬中山甚五兵衛入区  
(盛唐)  
寡兵ノ勢ニ乗シ、勇義隊十五番小隊大久保越吾隊長ニテ  
半隊長ト為リ、同月十五日当区ヲ発シ阿久根エ出軍、赤  
(久根市)  
瀬川番兵ノ命ヲ受ケ堅守候処、同二十一日官軍襲来リ、  
直ニ炮発戦争ニ及ヒ候処、遂ニ彈藥乏シクシテ防禦スル  
能ハス戦ヒ退キ、(川内市)向田連戦、同所モ敗レ候ニ付、同所ヲ  
脱シ帰区、先非ヲ悔悟シ謹慎中候処、八月廿四日帰順掛  
リ被差入候ニ付帰順自首致候処、同日鹿兒島エ被差廻入  
檻セラレ、九月一日賊軍鹿兒島ヲ攻取り、故ニ出檻帰郷、  
其段警視分署エ申出候処自宅謹慎被申渡謹慎罷在候処、  
再ヒ鹿兒島エ護送セラレ入檻、十月十四日長崎エ護送、  
同廿二日懲役二年ノ命ヲ蒙ル也、

鹿兒島県下第三十四大区一小区

高城郷四十六番地

明治十一年二月

佐多城右衛門

三二 副田雄七郎上申書

今般出軍ノ原由タルヤ、兼テ私学校党ニテ候処丁丑二月  
西郷隆盛上京ノ勢ニ乗シ、(編野利秋隊長)四番大隊六番小隊長松下助四  
郎、半隊長重久嘉右衛門、分隊長深見清二隊下ニ加入、  
同月十七日鹿兒島ヲ発シ、同廿二日熊本ニ着、直ニ当城  
ニ向ヒ進撃、同夜植木ニ出張到ル比天明ク、直ニ戦争相  
始リ進撃スルニ依リ、官軍進ムヲ得ス木ノ葉ニ退ク、追  
(玉原町)  
撃接戦大勝利ヲ得申候、此日官軍遺骸百有余名ト見認メ  
申候、器械・彈藥等分取無算ナリ、同隊ノ死傷三十四五  
名、同廿三日植木ニ引揚ケ、同廿六日山鹿ニ至リ所々ヲ  
守ル、同廿八日官軍襲来ニ付直ニ銃戦ヲ開キ、官軍大敗  
シテ退ク、追撃接戦、刀ヲ掉テ進ミ、官兵數十名ヲ倒セリ、  
(軍小町)  
味方死傷二十有余名、三月三日轟村ニ於テ戦ヒ勝利ヲ得  
申候、同九日田原ニ当リ銃声相響クヲ以テ、応援ノ為メ  
出張到リ横撃、昼夜劇戦歎ム時ナク、実ニ前後未曾有ノ  
役ニテ御座候、是戦也某銃創ヲ受ケ、植木病院ニ投シ、  
四月一日帰県治療ヲ加フ、(中山盛唐)五月中山某ノ招キニ応シ、勇  
義隊十番小隊長トナリ出陣ス、六月上旬阿久根ニ出張当

所ヲ守ル、同廿一日官軍大勢襲来ニ付、奮戦死傷少ナカ  
ラス、小大不敵、遂ニ敗走向田(川内市)ニ引退キ、千代川(川内市)ニ抛リ  
拒守、同廿三日官軍追撃砲発甚タ急也、此時ニ当リ官兵  
輕軀ニ乘シ河原ヲ渡リ横撃、我隊拒ク能ハス大ニ敗走ス、  
某僅ニ免カレ山中ニ潜伏、間ヲ得隅州都ノ城ニ到ル、于  
時中山某当所ヲ募兵シ百五十名ヲ集メ、是レヲ壹小隊ト  
シ、某隊長ト為リ、七月高岡ニ出軍、(綾町)ニ戦テ敗走、死  
傷少ナカラス、是ヨリ八月四日ニ至リ佐土原所々ニ戦敗  
走、同月中旬帰郷、前非悔悟シ帰順謹慎スル事三十有余  
日、遂ニ長崎臨時裁判所ニ於テ懲役三年ノ命ヲ蒙リ申候、  
出兵中ノ顛末如斯御座候也、

鹿兒島県下第三拾一大区一小区

入來郷

明治十一年二月

副田雄七郎

三三 白濱善右衛門上申書

今般出軍ノ原因タル也、兼テ私学校党ニテハ之無ク候処、  
丁丑五月十三日中山甚五兵衛等千代地方諸郷ヲ募兵シ、  
五小隊ヲ率ヒ阿久根郷ノ未タ出軍セザル者ヲ募ント欲シ

入区シ来リ、是ノ軍ニ出サル者ハ悉ク殺害ニ及フベキ旨  
ヲ伝フ、是ニ依リテ戸長ヨリ被申付相集ル者五十二名、  
是レヲ壹小隊トシ、隊長勇義隊十一番小隊ト称シ、松山  
某隊長トナリ橋口某分隊長ト為リ、某ハ同隊半隊長ト為  
リ、共ニ意ヲ決シ出陣ス、同月廿五日出水(肥前、龍岡境)矢筈岳援兵ノ  
命ヲ受ケ当区ヲ発シ出水本營ニ到リ候処、西シ海岸守リ  
無キニ付右半大隊六番小隊・左半大隊十一番小隊二小隊  
ヲ以テ守ル可キノ命有り、即夜海岸ニ到リ所々ヲ守ル、  
三日余ニシテ官ノ軍艦入港砲発烈シト雖トモ力拒懈タラ  
ス、遂ニ矢筈岳ノ戦ヒ敗走ニ及ヒ海岸ヲ引揚ケ、九小隊  
ニテ出水ヲ守ル事十有余日、六月上旬官軍多勢大風雨ニ  
乗シ襲来ニ付奮戦、是ノ戦也六番小隊長柳田某重創ヲ受  
ケ官兵ノ虜トナリ死傷少ナカラス、小大不敵、遂ニ敗走  
宮之城ニ到リ敗兵ヲ纏メ、右半大隊六番小隊、左半大隊  
八番・九番・十一番小隊ヲ以テ、(紫尾山、宮之城町)上宮山ヲ守ル、左半大隊  
六小隊ハ紫尾山ヲ守ル、三日ヲ経テ出水本營伊藤某(新穂)紫尾  
山守兵六小隊ヲ率ヒ官軍ニ降ルノ報ヲ得、則我上宮山守  
兵四小隊宮之城ニ引退キ、千代川(川内市)ニ抛リ拒守ス、是ニ於  
テ官軍勢ヒ増々張り追撃砲発甚タ急也、此ノ時ニ当リ官  
軍輕軀ニ乘シ河原ヲ渡リ横撃、我隊拒ク能ハス大ニ敗走



シ入來郷ニ至リ副田原ニ台場ヲ築キ之レヲ守ル、巷小隊

別レテ山ヲ守ル、二小隊山崎街道ヲ守ル、同月下旬未

明山崎街道敗レ我隊背撃ヲ受ケ敗走ス、是役ヤ本營崎元

某銃丸ニ当テ死ス、其他死傷少ナカラス、某僅ニ免カレ

山中ニ潜伏間ヲ得郷シ、戸長等ト謀議シ前非悔悟帰順

謹慎スル事九十有余日、遂ニ長崎臨時裁判所ニ於テ懲役

二年ノ命ヲ蒙リ申候、出兵中ノ顛末如斯御座候也、

鹿兒島県下第三十五大区小一区

阿久根郷

明治十一年二月

白濱善右衛門

### 三四 長野金左衛門上申書

明治十年二月十九日鹿兒島士族貴島清ナル者ノ進メニヨ

リ出軍仕候処、振武六番隊ニ編入相成、隊長能勢十九郎

ノ指揮ヲ受ケ、熊本田原坂ニ於テ三月十五日戦争相始メ

奮戦薄暮ニ及ヒ、抜刀シテ切込ミ候処、手負致シ、引テ

川尻病院ニ入り療養ヲ加フ、四月初方木山ニ転ス、同四

日当所ヲ斃シ県ニ帰ル、同ク十日帰着仕申候、然ル処五

月下旬戸長所ニ於テ二等警部ニ相付帰順自首仕謹慎罷在

候処、六月十七日鹿兒島裁判所御呼出ニテ恭クモ免罪ヲ

蒙リ安居罷在候、然処近郷吉利エ小倉慶介ナル者入区募

兵方致シ、我郷エモ差入相成由承候折柄、九月一日賊再ヒ

鹿兒島ニ襲来シ賊地ト成ル、其節本營ヨリ檄文来リ、其文

ニ基キ有志ノ面々前後ヲモ顧念セス勢ヒニ任セ、伊集院

清藤村迄出張、各郷ヨリノ人々ヲ相待居候得共、巷人ト

シテ集ル者ナシ、仍テ私共ニモ幸トシテ其場ヲ引取り帰

郷仕候処、九月十四日巡查衆御差人ニテ御捕縛ニ相成、日

置分署エ護送相成、同廿二日伊集院分署へ、同廿八日谷山

警視出張所へ、十月四日鹿兒島日置屋敷臨時裁判所へ護

送相成、御調ノ上磯ノ檻倉へ入檻、十月十二日ヨリ長崎へ

差廻サレ懲役二年ノ命ヲ蒙候、此段御調ニ付申上候也、

鹿兒島県下第十大区永吉郷

明治十一年二月

長野金左衛門

### 三五 前田藤五郎上申書

明治十年二月十三日於鹿兒島ニ、二番大隊七番小隊ニ編

村田新八隊長

私儀

入、小隊長武郷兵衛・半隊長倉野莊吉・分隊長有馬靜藏等ノ指揮ニ随ヒ二月十五日鹿兒島ヲ発ス、同月廿日肥後川尻エ着、夫ヨリ二番大隊ト加治木隊都合ニ大隊百貫<sup>(熊本海軍)</sup>エ赴カントシテ川尻ヲ操出<sup>(總)</sup>候処、官軍ノ斥候ニテモ候ハシ見掛タルヤ否ヤ発炮サレ候ニ付、尾撃シテ三人ヲ殺害ス、夫ヨリ斥候ヲ百貫エ差遣サレ候処、同所エ官兵十余人上陸ノ折柄ニテ斥候エ炮発、賊三人手負、官兵四名ヲ生捕ル、夫ヨリ百貫ヲ守ル十日位、亦大津ニ転シ該所ヲ守ル三日、三月六日午前八時頃ヨリ田原ニ於テ激戦ス、終ニ抜刀切込ミ候処官兵相退ク四五町位、尚追撃致候処官軍ノ援兵相続キ、引テ本ノ守リニ引揚ク、手負戦死拾余人、官兵手負戦死数多ナリト雖トモ数不知、夫ヨリ三月十三日本道ノ方エ援兵トシテ二十余人出張、戦ト雖トモ墓々敷キ軍ニアラス勝敗不相分、其日本隊ニ帰リ台場ヲ守ル本ノ如シ、午後七時頃官兵ノ炮丸ヲ蒙リ、川尻病院エ入り療養ヲ加フ、四月十日帰県、七月五日別働隊ニ就テ前非悔悟帰順自首仕候処、自宅謹慎被申渡謹慎中御座候得共、賊ノ本営稅所小次郎ナル者募兵方トシテ今和泉郷エ<sup>(指宿市)</sup>差入強迫候ニ付、相應シ今和泉郷エ相集リ合併シ隊伍ヲ作り、右同人之レヲ差引シ、九月五日喜入郷瀬々串迄出

兵候処、鹿兒島ノ方放火炮声盛ナルニ依テ、稅所某斥候ニ出候ニ付其透ヲ辛ニシテ其場ヲ脱シ宅ニ歸リ、謹慎罷在候処、九月十一日警視隊御差入ニ及ヒ御捕縛相成、十月五日谷山エ御差廻ニ相成、同七日鹿兒島磯檻倉エ入檻、同十七日長崎エ護送相成、同廿二日裁判所エ御呼出ニ相成懲役二年ノ命ヲ蒙リ、十一月三日長崎ヲ発シ秋田県エ御差遣相成、十一月廿六日着シ謹慎罷在候、此段御調ニ付御届申上候、以上、

鹿兒島県下指宿郡指宿

第十五大区一小区

明治十一年二月

前田藤五郎

三六 相良頼壽上申書

昨明治十年五月下旬人吉參謀神瀬傳ヨリ、人吉守衛エ田<sup>(私儀)</sup>代・大畑山嶺師ヲ引連罷出ル様ニト被申付、嶺師三十名<sup>(球磨)</sup>内外召連候処、城下取締致吳候様ニト申事ニ付、組下ノ者エ其段申聞候処、同人共可相成儀ニ候ハ、戰場并台場拜見仕度趣申出ニ付、右之段參謀エ伺候処、是幸ト申事

(球磨村)

ニテ、渡村卷クリト申所エ引連、直々同村番兵ト交代ノ事被申付候得トモ、同日人吉ニ於テ出火、不得止ヲ人吉之蔵屋敷エ引揚、人吉勢ト一所ニ罷在、木ノ上村会所ニ於テ人吉勢ト同様降伏致候、其後大信寺エ被引籠罷在、間モナク熊本エ罷出、同所ニテ十月廿四日二ケ年ノ懲役被申付右有形如斯、

肥後国熊本県球磨郡

人吉第四小区

明治十一年二月

(人吉陸三番小隊長) 相良頼壽

三七 有馬八太郎上申書

私儀

私学校エハ入校不仕候処、明治十年五月十五日堤幸助ナル者募兵方トシテ差入、騒々敷勢ニ乗シ指宿郷ヨリ二十名鹿兒島エ出発候処、振武廿四番隊エ編入、小隊長山崎武平・半隊長佐土原雄左衛門・分隊長山下覺彌等ノ指揮ニ随ヒ、同所武町エ台場ヲ築キ相守居候処、六月廿五日午前六時頃ヨリ官軍相掛、午後四時頃迄激戦終ニ敗走、翌廿六日六時頃伊集院エ引揚居、同三十日隊中同列ニテ

(鹿兒島市)

帰郷仕候処、七月五日別働隊ニ就テ前非悔悟帰順自首仕候処、自宅謹慎被申渡謹慎中御座候得共、賊ノ本営稅所小

(指宿市)

次郎ナル者募兵方トシテ今和泉郷エ差入強迫候ニ付、相応シ今和泉郷エ相集リ合兵シテ隊伍ヲ作り、右同人之レヲ差引シ、九月五日喜入瀬々串迄出兵候処、鹿兒島ノ方放火炮声盛ナルニ依テ、稅所某斥候ニ付、其透ヲ辛シテ其場ヲ脱シ宅ニ歸リ謹慎罷在候処、九月十一日警視隊御差入ニテ御捕縛相成、十月五日谷山エ御差廻相成、同日鹿兒島磯ノ檻倉ニ入檻、同十七日長崎エ護送相成、同廿二日裁判所エ御呼出相成二年懲役ノ命ヲ蒙リ候、此段御調ニ付御届申上候、以上、

鹿兒島県下第十五大区二小区

指宿郷

明治十一年二月

有馬八太郎

三八 朝稻孫左衛門上申書

私儀

明治十年丑五月四日戸長ヨリ出発致シ候様達シ相成、同月五日兵卒ニテ宿許出立、同七日福山エ着ス、本営エ届

兼テ私学校エ入校不致候得共、明治十年丑六月上旬頃福

私儀

三九 池末須佐水上申書

明治十一年二月

飯野郷

朝稻孫左衛門

申出候処、切隊十四番小隊長被申付、半隊長并手石藤八郎、分隊長川内宗右衛門、兵士人員六拾名位直ニ同所引取、(國分市)敷根エ差越シ、十日余番兵仕居候処、(船長町)重富ノ様引揚ヘクノ報知有之彼ノ地ニ於テ十九日余番兵仕居候処、福山エ引揚候様又々報知有之、彼ノ地エ差越シ十日余番兵ヲ勤ム、或日市成方(澤北町)ヘ引揚ケノ報知ニヨリ差越シ番兵、又翌未明ヨリ南手ノ方ヨリ官兵襲来防戦ノ処、味方散々ニ逃去リ、戦死・手負等ハ不相分、(柴庭、福山町)柴立ト云所ヘ引退キ申候処、俄ニ病氣煩付、夫ヨリ罷帰リ、八月四日分署エ帰順書差出申候処、自宅謹慎被申渡候、其后チ鹿兒島ヨリ長崎エ護送相成、懲役三年ノ命ヲ蒙リ謹慎罷在申候、此段御調ニ付上申仕候、以上、

鹿兒島県下第百九大区一小区

明治十一年二月

小根占郷二小区

山本菅ヨリ出発致候様廻達有之、右ニ付戸長ノ差図ヲ得、同月十三日兵卒ニテ宿元出発、同月十五日福山エ着宿申出候処、本菅ノ指揮ヲ受ケ切隊十四番小隊監軍被申付、小隊長朝稻孫左衛門、半隊長并手石藤八郎、分隊長川内宗右衛門、(垂水市)牛根邊田村エ差越シ番兵致居候処、七月十五日頃兵士三十名位引列、(福山町)牧ノ原エ引揚ケ、各隊ト共ニ相堅メ居候処、官兵西手ノ方ヨリ大勢ニテ攻撃相成、夫故抗敵仕候処、既ニ真中エ被取襲散々ニ相戦、官兵并味方戦死・手負・分取不相分、同所ニ於テ手負仕、(末吉町)末吉深川村エ引退キ、八月三日頃罷帰、分署ニ於テ降伏謹慎罷在候処、九月下旬頃鹿兒島臨時裁判所エ護送相成、御調ノ上長崎エ御差廻シ相成、同所裁判所ニ於テ懲役三年ノ命ヲ蒙リ、此段形行上申仕候也、

鹿兒島県下第八大区

池末須佐水

四〇 瀬戸口澤右衛門上申書

私儀

兼テ私学校エハ入校不致候得共、明治十年四月廿二日戸長差函ニ從ヒ兵卒ニテ出兵シ、同廿三日人吉町ニ着、本營エ届申出置休息仕居候処、同廿七日常山五番中隊ノ小隊長被申付、半隊長丸目織右衛門・分隊長松本藤六郎ト共ニ兵員四拾五名ヲ掌ル、五月六日頃同所田代村ト云所ニ操出番兵致居候処、病氣相煩ヒ、同廿二日頃ヨリ栗野町平病院エ入院療治仕候得共、快氣ノ模様相分リ不申候ニ付、帰郷ニテ療養致度旨願書ヲ以テ願出候処、許可相成(官之極)六月三日帰郷仕、七月初旬宮城分署ニ於テ帰順自首仕候処、自宅謹慎被申渡候ニ付謹慎罷在候処、十月十二日ヨリ鹿兒島エ護送相成、同所ヨリ長崎エ被差廻懲役三年ノ命ヲ蒙候、此段御調ニ付申上候也、

鹿兒島県下第四十六大区

小一区六番地

明治十一年二月

瀬戸口澤右衛門

#### 四一 川邊齋輔上申書

兼テ私学校エハ入校不致候得共、明治十年丑六月初旬頃私儀

福山本營ヨリ出発致候様烈敷廻達有之、右ニ付当区戸長得差函、同月十四日兵士ニテ宿許出発、同十七日福山へ着届申出候処、本營之指揮ヲ受、切隊十番小隊押伍被申付、小隊長池水友之進、半隊長野田経中、分隊長竹下休左衛門、兵士人員九十名位、於彼地暫時番兵仕、同月末頃(福山町)牧之原ト云所へ引退一泊致シ、翌未明ヨリ芝立本道各隊ト相堅居候処、西手ノ方ヨリ官兵襲来、味方散々ニ逃去(財部町)纒三十名位ニ相成候処、戦死・手負等ハ無之、直様通山へ引揚、馬立原ト云所へ切隊・八番合隊ニテ張出候処、本營ヨリ引退候様報知有之引退候処、切隊都テ行進付属隊ト相成、直ニ八番隊ト相分レ末吉町へ差越番兵致候様承、其折隊長友之進(福水)病氣相煩、行進本營相良郷左衛門ヨリ指揮ヲ受代理被申付、彼地番兵仕居候処、南手ノ方ヨリ官兵午前八時頃襲来、各隊ト相戦味方散々ニ相成、七月下旬頃(日南市)板屋エ引退一泊仕居候処、翌未明ヨリ亦々官兵襲来候ニ付、抗敵不致、清武ト云所へ引退番兵致居候処、日ハ失念午前八時過西南東三方ヨリ官兵襲来、味方散々ニ逃去、最早本道モ官兵相堅、間道ヲ差テ拔出、終ニ夜入乍漸宮崎川ヲ打渡リ、同所町へ二泊、翌々未明各隊ト同列柏町(柏原カ)へ引揚番兵致居候処、同所川頭之方未明ヨ

一 秋田県

リ炮声烈敷相聞へ無間モ官兵襲来、八月一日頃於同所ニ  
兵士二名同列ニテ降伏仕都城分署へ帰順書差出申候処、  
自宅謹慎被仰付帰区仕謹慎中罷在候処、十月四日当区へ  
詰居候巡查衆ヨリ小根(根占町)占分署へ護送ニテ、翌五日鹿兒島  
臨時裁判所へ尚亦護送相成御調ノ上、長崎へ御差廻相成、  
同月廿二日同所裁判所ヨリ御呼出ニ付罷出候処、懲役三  
年ノ命ヲ蒙リ、此段形行上申仕候也、

鹿兒島県下第七十九大区一小区

佐多郷

明治十一年二月

川邊齋輔

四二 宇都源之丞上申書

私儀

兼テ私学校へ不致入校候得共、明治十年四月三日鹿兒島  
士族西俣盛行当区へ入区、十番大隊七番小隊へ編入セラ  
レ、同月五日人吉城下へ出張候処、同夜賊之本官川上三  
平ヨリ分隊長被申付、日数廿二三日位当所へ番兵トシテ  
守居候処、同月廿七日出立飯次村へ赴キ平瀬台場相堅メ  
居、交代ニテ猪之鼻(五木村)へ五月十八日未明ヨリ出張候処、午

前七時頃候ハン戦争相始リ一戦致シ、午後三時頃苦戦ニ  
テ味方敗走ニ及ヒ、高瀬(永上村カ)ケ尾へ引揚ケ相成候、五月三十  
日尚亦於高瀬相戦フ、其ヨリ平病ニテ給養方へ罷居、六  
月十二日人吉之内大木場(天畑)ト申所ヨリ帰県致候、然処七月  
十七日当区事務扱所へ山田警部殿入区相成居候ニ付、彼  
方へ相付帰順自首仕自宅謹慎罷居候処、十月二日栗野郷  
分署ヨリ御用有之罷出候処、鹿兒島臨時裁判所へ護送相  
成御調ノ上入檻、同十二日鹿兒島出帆ニテ長崎港へ、同  
十四日着艦上陸入檻ノ処、同廿二日裁判所ニ於テ懲役一  
年ノ命ヲ蒙リ申候也、

鹿兒島県下第九大区三小区

馬關田郷川北村六番地住

明治十一年二月

宇都源之丞

四三 裁松仲吾上申書

私儀

明治十年二月十六日於鹿兒島三番大隊十番小隊兵卒ニ編  
入、小隊長山之内半左衛門・半隊長成尾鐵之丞・分隊長  
相良與之丞等ノ指揮ヲ受、同十七日出発ニテ同廿三日肥

後熊本へ着、直ニ城外長六橋脇へ差越番兵トシテ守居、  
四月中旬中之瀬ト云フ処へ赴キ番兵致居、同下旬川尻戦  
争苦戦ニ及ヒ候故応援トシテ相統申候処、暫時ケ間奮戦  
ス、間モナク味方敗走ニテ木山町(益城町)へ引揚相成候、尤同下  
旬頃平病ニテ人吉病院へ入り廿日位療養ヲ加フ、五月中  
旬鹿兒島県下飯野病院(えびの市)へ転シ十七八日位入院致居候得共  
平癒不致、五月廿七日当所出立ニテ同三十日帰着仕候、  
左候テ同下旬当区戸長役所ニ於テ、二等警部殿エ相付前  
非悔悟帰順自首任自宅謹慎被申付謹慎罷居、六月十七日  
鹿兒島臨時裁判所へ御呼出ニテ免罪ヲ蒙リ安居罷在候、  
然処近郷吉利(日吉町)へ賊ノ小倉慶助兵募方トシテ入区相成、当  
郷へモ入区ノ由承候、折節九月一日鹿兒島賊之本営ヨリ  
檄文参リ、其文ニ基キ有志ノ面々ハ前後ヲモ顧念セス勢  
ヒニ任せ、同二日伊集院郷清藤村ト申処迄出張、各郷ヨリ  
ノ人々今ヤ遅シト相待居申候へ共一人トシテ来ルナシ、  
依テ其場ヲ引取則チ帰郷仕居候処、九月十四日巡查衆差  
入当県日置郷分署へ御用之儀ニ付縛セラレ右ノ分署へ罷  
出申候、同廿二日伊集院郷分署、同廿八日谷山郷警視署、  
同十月四日鹿兒島臨時裁判所迄護送相成、十月十二日鹿  
兒島出帆ニテ同十四日長崎港へ着艦上陸ニテ入檻罷在候

処、十月廿四日裁判所へ御呼出ニテ、懲役二年ノ命ヲ蒙  
リ申候、此段上申仕候也、

鹿兒島県下第十六区一小区

永吉郷

明治十一年二月

裁松仲吾

#### 四四 宮原七左衛門上申書

私儀

兼テ私学校エ入校不致候得共、先般西郷隆盛暴発之際、  
私学校徒ニ脅迫セラレ、当区分管詰財部實秋ヨリ、明治  
十年六月廿四日常備一番隊半隊長被申付、火用心旁為取  
締区内通口番兵、一昼夜交代ニテ相詰居申候、尤戦場ニハ  
一度モ赴キ不申候、然処同年七月廿四日当区エ官軍進入  
相成候ニ付、同廿八日川村参軍殿エ前非悔悟帰順自首任  
自宅謹慎被申付謹慎罷居候処、当区警視出張分署ヨリ御  
呼出御達相成致承知候処、帰順自首書尚亦書認差出候様  
トノ事ニ付、前文通九月三十一日相認差上申候、依テ十  
月九日同分署ヨリ御用申来罷出候処、二日間滞留ニテ同  
十一日発足、鹿兒島警視署へ護送相成、翌十二日午後十

一 秋田県

時頃着、翌日ニ至リ警視署并臨時裁判所ニ於テ御調之上入檻罷居、同十七日当所出帆長崎へ御差廻相成申候処、同廿二日裁判所ヨリ御呼出ニテ、懲役二年之命ヲ蒙リ申候、此段上申仕候也、

鹿兒島県下第百五大区一小区

日向国諸県郡都城郷

明治十一年二月

宮原七左衛門

四五 野尻源吉上申書

私儀

兼テ私学校エ入校ハ不致候得共、区戸長ノ差図ニ従ヒ、明治十年丑四月廿四日同列二十五名同道出立、五月三日(福山町)福山へ着、本営へ届出候処、切隊三番隊小隊長被申付、同五日兵士三十名同道発足、同九日頃熊本県下人吉へ着、無銃故市中警衛致居候処、六月四日頃人吉敗軍トナリ、(入吉市)大畑へ引揚候節隊中へ銃器相渡リ、大畑ヨリ拾八町位モ候ハシ北之方小川之向フへ、外二中隊ト台場相守居候処、同十二日頃午前九時過ヨリ官兵数多攻来リ、一時間位モ戦ヒ遂ニ敗軍、折節大雨ニテ水出増シ渡リ無之故、山路

ヲ越、日州飯野へ引揚一泊、兵士一名行衛不相知、各隊ハ何方へ引揚候モ不相分候、翌日小林迄引揚、同十八日頃午前五時操出各隊同道飯野へ進撃、川ヲ隔テ炮発致シ、此時兵士二名手負致、互ニ勝負無之、同日十時頃一里余之所へ引揚、夫ヨリ病氣相煩廿日位モ給養方へ休息致候得共平癒無之、病院へ入院致、佐土原迄差越、八月二日頃同所戦争之節病院ヲ脱シ、同廿日帰区自首仕候、此段形行申上候也、

鹿兒島県下第七十九大区一小区

佐多郷

明治十一年二月

野尻源吉

四六 生駒助之丞上申書

私儀

邊見十郎太募兵方トシテ入区致候ニ付相応シテ、明治十三年三月廿七日鹿兒島出立、大口郷ニ於テ、九ノ十番小隊兵卒ニ編入、小隊長黒木龍輔・半隊長園田莊助・分隊長日高藤一等ノ指揮ヲ受ケ、四月二日人吉へ着、同五日八代(八代市)妙見山ニ於テ戦ヲ始ム、夜ニ至ルト雖トモ勝敗決セス、



翌日午前六時頃ニ及テ官兵敗走トナル、五六町位モ候ハ  
ン追撃シ激戦致シ候処、間モナク味方敗走ニテ四五町位  
引退キ、一昼夜戦フト雖トモ勝敗相分ラス、此日官兵戦  
死六七名位ト相見得、味方死傷三四名有之候、翌七日ノ  
戦ヒ二午前十時頃疵ヲ蒙リ、外ニ死傷十二三名有之、戦  
ヒ央ニ引取人吉病院へ入院、同十七日帰県、七月五日別  
働隊ニ就テ帰順自首仕候処、自宅謹慎中御座候得共、賊  
ノ本營募兵トシテ三名(指宿市)今和泉郷へ差入、巡查等ハ悉ク捕  
縛致ベク様廻差廻シ候ニ付、大ニ驚愕シ無詮方捕縛セ  
ント欲シ、(指宿市)湊浦迄出張候得共、悔悟改心シテ宅ニ帰り謹  
慎罷在候処、九月十五日巡查衆御差入ニテ縛ニ就キ、谷  
山へ護送相成候、此段御調ニ付御届申上候、以上、

鹿兒島県下第十五大区一小区

指宿郡指宿

明治十一年二月

生駒助之丞

#### 四七 山之内正助上申書

兼テ私学校ニハ入校不致候得共、明治十年五月中旬、邊

私儀

見十郎太募兵方トシテ入区ニ及ヒ、戸長ヨリ出兵致シ候  
様申付候ニ付致方ナク、同十九日発足ニテ、鹿兒島上伊  
敷振武之本營へ届出候処、五十二名ノ小隊長被申付、吉  
野之行進本營へ届出ヘク相達候ニ付、五十二名ヲ引率シ  
差越申候、然処、行進十四番隊ト隊号ヲ授リ、当所ニ番  
兵致居候処、六月廿二日朝官軍寄来リ、大苦戦ニテ兵士  
散々ニ相成手負・戦死二三十名ニ及ヒ申候、官軍ノ手負・  
戦死多シト雖トモ数相分り不申、翌二十三日朝七時頃ヨ  
リ進撃ニ及ヒ候処、午前十時迄相戦ヒ勝利ヲ得、銃器・  
弾薬・外套少々分捕ス、官軍之手負・戦死四五十名ナリ、  
賊ノ手負・戦死八九名、同廿六日官軍ヨリ進撃相成、戦  
ヒ破レテ帖佐郷ニ番兵等致シ居候処、引揚ノ命ヲ蒙リ末  
吉郷迄引退キ番兵ス、或日南之郷へ進撃相成候得トモ利  
アラスシテ引退ク、此日戦死・手負四十余名、其上兵士  
散テ残少ニ相成、翌廿四日清武(清武町)ニ引上ケテ相守居候処、  
同廿八日官軍寄来リ暫ク相戦ヒ候処、終ニ破レテ宮崎ニ  
引揚テ相守ル、然処八月二日他所ヨリ相破レ取囲レ、漸  
クナガラ出抜ケ、同八日罷歸リ、翌九日分署ニ於テ帰順自  
首仕候処、御調之上自宅謹慎罷在候処、十月六日置分署  
ヨリ御用相成、鹿兒島臨時裁判所へ護送ニ及ヒ御調之上

長崎へ御差廻相成懲役ノ命ヲ蒙リ申候、此段申上候也、

鹿兒島県下第十大区二小区

永吉郷四百七番地

明治十一年二月

山之内正助

#### 四八 隅 愛之助上申書

私儀

兼テ私学校へハ入校不致候得共、明治十年六月下旬鹿兒島士有川勸介募兵方トシテ入区ニ及ヒ、戸長ヨリ出兵致候様申付候ニ付、致方ナク同廿二日発足、吉野賊<sup>(鹿兒島市)</sup>之行進本営へ届出候処、隊号六番中隊左小隊ノ兵士ニ編入、同月廿七日同県帖佐郷へ引上ケ当所へ番兵致居、七月上旬

同県國分郷へ転シ守居、七月廿日方当所引上ケ末吉郷へ着ス、七月廿三日当所ニ於テ戦争ニ及ヒ戦ヒ致シ大苦戦ニテ、同廿四日日州鉄肥ノ内清武ト云フ処ニ於テ一戦致シ、又々苦戦ニテ宮崎へ引揚相成、当所へ暫時カ間守居、

当日又引揚佐土原へ番兵ニテ候処、当日戦争敗軍ニ付、

八月中旬富高新町<sup>(日向市)</sup>へ引揚ノ途中ニテ官兵ニ取囲マレ、漸ク忍出、八月十六日当所出発シ県ニ帰ル、同廿四日帰着

ス、同廿六日当区分署ニ於テ帰順自首任自宅謹慎中候処、

九月一日鹿兒島賊ノ本営ヨリ檄文参リ、其文ニ基キ有志

之面々ハ前後ヲモ顧念セス勢ヒニ任セ、同二日伊集院郷

ノ内清藤村<sup>(伊集院町)</sup>ト申処迄出張、各郷ヨリノ人々ヲ今ヤ遅シト

相待居候得共、一人トシテ来ルナシ、依テ其場ヲ引取り帰

郷仕居候処、九月十四日巡查衆入区、当県日置郷分署へ

御用可有之旨巡查ヨリ相達候ニ付、右ノ分署へ罷出候、

同廿二日伊集院分署、同廿八日谷山分署へ、十月四日鹿

兒島臨時裁判所迄護送相成候、然処十月十二日鹿兒島出

帆同十四日長崎港<sup>(意)</sup>へ出艦上陸ニテ入檻罷在候処、十月廿

四日裁判所へ御呼ニテ懲役ノ命ヲ蒙リ候也、

鹿兒島県下第十大区二小区

永吉郷四百四十六番地

明治十一年二月

隅 愛之助

#### 四九 大久保越吾上申書

先般出軍ノ原由タルヤ、客年六月中山某入区募兵ノ勢ニ

乗シ、勇義隊十五番小隊長ト為リ、同十五日阿久根ニ出

張番兵ヲ勤ム、同廿一日官軍襲来、赤瀬川<sup>(阿久根市)</sup>ニ戦ヒ吾カ隊

戦蕪尽キテ防戦スル能ハス引退キ、向田(川内市)ニ戦テ大ニ敗走

候ニ付、同所ヲ脱シ帰区、先非ヲ悔悟シ帰順自首致シ、

自宅謹慎之命ヲ蒙リ、遂ニ鹿兒島ニ入檻仕居申候処、九

月一日虜軍再ヒ鹿兒島ニ襲来ルニ付、破檻帰区、其段警

視分署ニ自首シ、猶自宅謹慎罷在リ、十月五日猶又鹿兒

島ニ入檻、遂ニ長崎ニ於テ懲役三年之命ヲ蒙リ申候、私

出兵中之顛末如斯ニ御座候也、

鹿兒島県第三十四大区小一区

高城

明治十一年二月

大久保越吾

### 五〇 川畑嘉之進上申書

私儀

邊見十郎太募兵方トシテ入区致候ニ付、相応シテ三月廿

七日鹿兒島立、大口ニ於テ九番大隊十番小隊兵卒ニ編入、

小隊長黒木龍助・半隊長園田莊助・分隊長日高藤一等ノ

指揮ヲ受ケ、四月一日人吉エ着、同五日八代ニ於テ戦ヲ

始、三昼夜相戦ト雖トモ勝敗不相分、同八日ノ戦ニ疵ヲ

蒙リ人吉病院エ入院、同廿八日帰県、七月五日別働隊ニ

就テ帰順自首仕候処、自宅謹慎被申付謹慎中御座候得共、

賊ノ本営募兵方トシテ三名(指宿市)今和泉エ差入、巡查等ハ悉ク

捕縛可致、違背スルニ於テハ放火炮発悉ク殺害致スヘク

云々ノ廻達差廻、大ニ驚愕シ無詮方捕縛セント欲シ、(指宿市)湊浦

迄出張候得共、悔悟改心シテ宅ニ帰リ謹慎罷在候処、九

月五日巡查衆御差入ニテ縛ニ就キ、谷山エ護送相成候、

此段御調ニ付御届申上候、以上、

鹿兒島県下第十五大区小一区

指宿郷

明治十一年第二月

川畑嘉之進

(表紙)

西南之役懲役人筆記 二 宮城県上

(中表紙)

〔第十四号〕

西南国事犯囚徒式百式拾名

戦地形状顛末筆記簿 上

宮城県

一 田實胤重上申書

明治十年三月廿一日第九大隊三番小隊ノ小隊長トナリ、同廿六日鹿兒島発程、熊本県人吉へ着ス、本営邊見十郎太ノ指揮ニ因リ、求摩川(球磨)ヲ下リ八代へ進軍ス、攻撃殆ント二昼夜ニ及ヘリ、始メ我軍勢ヒ鋭ク八代モ易々トシテ陥ントスルノ勢ヒナルニ、本道ノ方敗軍、神ノ瀬村(球磨村)へ退キ滞陣スル事一週間ニシテ、再ヒ亦八代へ進軍、戦ヒ一昼夜ニシテ勝敗決セス我軍彈丸尽キ神ノ瀬村へ引上ケ、二週間位モ休戦スル内、大野村(高北町)ノ方官軍強ナルニ依リ援

隊トシテ転陣、官軍久木野村(水俣市)へ至ル、我兵直ニ久木野村

へ進軍攻撃、勝敗分タス交綏ス、此ニ在ル凡二十余日ニ

シテ三戦勝敗ナク、四戦ニ及ンテ敗軍シ、鹿兒島県下山口市

野郷ニ引上ル、同所ニ於テ一戦、敗レテ大口郷ニ退キ守

ル、五日ヲ経テ官軍攻撃勝敗ヲ分タス休戦ス、五六日ヲ

隔テ、亦タ攻撃ニ遇フ、敗戦、湯ノ尾郷ニ退ク、夫ヨリ

横川、夫ヨリ溝邊、踊村(牧野町)、財部、庄内(郡城市)、末吉、都之城、

三俣(三股町)、宮崎、佐土原、廣瀬(佐土原町)ヲ経テ高鍋ニ至ルノ間、或ハ

戦ヒ或ハ哨兵シ、同所ニ於テ我軍苦戦ヲ極メ一隊紛乱、

本隊ニ帰ルヲ得ス、夜ニ乘シテ山野ヲ跋涉シ、八月中旬

頃帰宅、直ニ帰順仕候也、

明治十一年三月

田實胤重

鹿兒島県第二大区二小区

二 金田金次郎上申書

明治十年三月廿二日第九大隊第五小隊兵士ニテ鹿兒島発程、同廿六日熊本県人吉へ着シ、直ニ本営邊見十郎太ノ指揮ヲ以テ求摩川ヲ下リ、同県八代へ着シ直ニ進撃シ、始メ我軍勢ヒ甚タシク八代ハ陥レントスル処、遂ニ本道

ノ方ヨリ敗レ防ク不能、神ノ瀬村へ引揚ル、同所ニテ半  
隊長トナリ滞陣スル五日ニシテ再ヒ八代へ進軍、戦フ事  
五昼夜遂ニ彈藥尽キ空ク神ノ瀬へ引上ケ休戦凡二週間、  
官軍進撃シ来ル、味方大勝利ヲ得、官軍敗潰人吉ニ向ヒ  
退軍ス、味方尚堅ク守ル、官軍又進撃シ来ル、味方敗レ  
木場村ニ引揚ケ同所へ番兵ス、五日ヲ経テ鹿児島県下飯  
野郷へ引揚ル、又小林郷へ引上ケ一週間ヲ経テ飯野へ進  
撃ス、終日戦ヒ官軍敗散、其後官軍須木郷へ進撃セリ、  
我隊援兵ニ赴キ官軍敗軍ニ及ベリ、其後我隊百引郷へ進  
軍ス、官軍支フル事不能高隈郷ヲ差シテ敗走ス、味方則  
チ大崎郷へ進撃ス、戦フ事兩日遂ニ官軍鹿ノ屋郷ヲ差シ  
テ敗走ス、直ニ高城郷へ引上ル、同所へ番兵スル事十日  
ニ及ベリ、夫ヨリ高岡郷へ引揚ル、夫ヨリ佐土原へ退キ  
同所ヲ守ル、官軍進撃シ半日ナラスシテ味方敗軍ニ及ヘ  
リ、遂ニ日州高鍋表ニ於テ降伏、同年七月下旬帰区仕候  
也、

鹿児島県下川邊郷野崎村

明治十一年三月

金田金次郎

### 三 安藤 維上申書

昨明治十年第二月十七日熊本城失火、市中類燃ス、因テ  
火ヲ城東新屋敷ニ避ク、曩キニ薩兵熊本ヲ通行シ上京ノ  
報アリ、何等ノ主意タルヲ知ラス、時ニ二月廿二日晝、  
城下四面炮声ス、薩兵ノ先鋒城攻スルヲ知ル、同廿四日  
城北出京町小学校ニ於テ、(協同隊本營誌)宮崎八郎・(協同隊長)平川惟一ニ出会ス、  
兩名西郷ノ義挙ニ從ヒ上京スルトノ説ニ同意シ、其日初  
ヨリ薩兵ノ各隊ニ分賦シ嚮導セシ者ヲ纏メ、同所ニ於テ  
隊伍ヲ編制シ協同隊ト号シ投票ヲ以テ三官ヲ定メ、自分  
ハ輜重會計トナリ、同廿六日宮ヲ城南二本木ニ移ス、薩  
ノ本營アルヲ以テナリ、熊本城ハ日夜連攻スレトモ台兵  
固守抜ク能ハサルニ、(山鹿市)山鹿・(五名市)高瀬ノ諸道ヨリ官兵來援ス  
ルノ報アルニ依リ、薩本營我協同隊ニ山鹿口ノ先鋒ヲ命  
ス、直ニ出兵シ初戦ニ小隊長平川惟一(のぶかぜ)戦死スト雖モ兵士  
能ク戦フ、故ニ毎戦勝利ノ報アリ、諸道ノ味方戦勝皆同  
シ、然リト雖モ城抜ク不能ヲ憂フ、故ニ三月上旬城側東  
南ニ当リ小川アリ、坪井川ト云、城西ノ小川ヲ井芹川ト  
云、二本木ニ至テ両川合ス、其下ニ関(関)アリ、高低二丈計

リ、此関ヲ破壊シ城中ノ水ヲ浅少ニシ、且城ニ先登スルニ利アルニ依リ、此策ヲ本營ニ献ス、然レ共本營遲議シテ用ヒス、関下ニ水車アリ兵糧ヲ搗ヲ以テナリ、然ルニ同月中旬比(池辺吉十郎隊長)熊本隊ヨリ右関上ヲ塞キ水ヲ増加シ番兵ヲ減スルノ策ヲ議ス、此ノ策行ハル、其砌城南八代口ニ軍艦來テ薩兵ノ中途ヲ遮絶スルノ報アリ、我新募兵一小隊ヲ薩兵ノ嚮導トシ八代郡小川駅ニ出兵ス、戦利ナク松橋ニ退ク、同所ノ守リ固ス、毎戦非利大ニ敗テ帰ル、遂ニ四月十四日味方大敗トナリ二本木ヲ引揚ク、我隊鳥ノ栖(西合志町)ニアルモ同ク城東木山ニ退ク、直ニ御舟ニ出兵ス、毎戦非利、同廿日大ニ敗シ敵ヲ矢部濱町ニ避ケ宿陣ス、初テ中隊ヲ編制シ翌廿一日鐘打村ニ出兵ス、翌廿二日味方忽軍人吉ニ引揚ケ防戦スルノ議決ス、故ニ我隊ハ直ニ濱町ヨリ途ヲ奈須越ニ向ヒ人吉ニ達ス、自分ハ手負等ヲ護送シ(熊原町)馬見原ヨリ高千穂越ニカ、リ、延岡ニ至ルノ途ニテ聞ク、(日向市)細島ニ軍艦來リ襲フノ報アリト、因テ途ヲ米良越ニ取り、五月九日人吉ニ達ス、其曩キ我隊人吉ニテ久木野口ヲ防クノ命アリ、依テ直ニ出兵スルノ際、途ニ敵ニ襲ハレ大ニ敗レ、三官兵士東西ニ奔走ス、漸ク兩三日ヲ経、纏メテ又出兵ス、敵ニ久木野ニ逢フ、直ニ進軍大ニ勝利ヲ得、

途程三里余追進スルノ際彈藥尽ク、故ニ帰テ久木野ヲ守ル、是日兵卒三名ヲ生捕、二名ハ走リ一名残ル、給養ノ夫卒トス、降伏ノ際其人官ニ帰ス、五月廿八日人吉敗レヨリ自分ハ病ニ罹リ、日向宮崎ニテ療養中味方毎戦利アラス、遂ニ長井村ニ於テ軍門ニ降伏ス、時ニ八月十七日也、

熊本県第一大区八小区

式百五十六番地

明治十一年三月

安藤 維(たもと)

#### 四 寺田泰介上申書

明治十年二月十五日(發原四郎隊長)第一大隊六番小隊兵士ニテ鹿兒島発途、出水口ヨリ肥後川尻駅へ二月廿一日着ス、翌日午前七時先鋒已ニ熊本ニテ戦鬪ノ報アリ、我隊モ直ニ熊本城ニ進撃、勝敗不相分、同廿六日ノ夜高瀬へ出兵、同廿七日午前八時頃ヨリ彼地ニ於テ戦ヒ、午後六時頃伊倉ノ村へ引揚、翌日午前七時頃彼地ニ出発、二俣ニ至リ居ル事(玉名市)暫時、此所ニ於テ押伍トナリ、同三月三日官兵ヨリ吉次(玉名町)峠ヨリ襲來、味方敗軍、翌日午前八時頃應援トシテ赴キ

官兵ヲ追退ケ、午後六時頃木留村へ引上ケ、同四日二俣

へ進軍、大ニ苦戦ス、故ニ遠大寺村へ引揚ケ、同日午後

七時頃ヨリ田原へ進撃、同所ニテ十余日昼夜連戦、互ニ

勝敗アリ、三月中旬熊本ノ城守兵ト交代シ出町ヲ守ル事

数日、四月十四日川尻敗軍ノ際全軍矢部へ引上ケ、奇兵

一番小隊トナリ、同廿日頃矢部ヨリ鹿兒島へ進軍、同五

月上旬頃鹿兒島城山へ進撃、勝敗不決、小野村へ引上ケ

四五日守兵ス、原良村并常盤村へ胸壁ヲ築キ数日守兵、

六月下旬武ノ岡味方敗軍ノ際我隊ハ帖佐、蒲生、加治木、

福山郷ヲ過キ、岩川ニテ戦ヒ、勝敗不決、翌日百引郷へ

進撃、味方大ニ勝利ヲ得、恒吉郷へ滞陣、病ニ罹リ都ノ

城病院ニ入ル、諸口敗軍、宮崎ニ至リ療養央、我隊佐土

原川ニ守兵ノ折帰隊、防戦終ニ敗軍、高鍋ノ内門川ニ引

揚ケ、八月十二日分隊ノ心得トナリ此処ニ守兵ス、翌日

午前八時頃官兵襲来、諸口敗レ、我隊モ散乱シ、八月十

七日降伏致シ、同卅日帰順仕候也、

鹿兒島県下第十五大区

一小区三百二十六番地

明治十一年三月 寺田泰介

五 弟子丸直次上申書

明治十年三月廿六日第九大隊大小荷駄トナリ鹿兒島出立

熊本県下人吉エ大小荷駄ヲ置キ、各隊給養方ニ彈薬・糧

米配分ス、其後チ同所坂本ニテ戦ヒ、古田・神ノ瀬へ宿陣

ノ時中隊編制ニテ八代并頭地口其外諸所ニ於テ戦争ス、

同五月卅日人吉大畑へ引揚、夫ヨリ鹿兒島吉田并佐土原

ニテ同断、同八月中旬延岡長井村ニ於テ降伏仕候也、

鹿兒島県

第一大区四小区

明治十一年三月 弟子丸直次

六 脇田 寛上申書

明治十年二月十五日第一大隊八番小隊分隊長ニテ鹿兒島

ヲ出発、同廿日川尻駅へ着陣、翌日熊本八幡山へ進入攻

戦ノ処、兵粮・彈薬運送ヲ弁セサルヨリ夜ニ至リ兵ヲ一

時段山へ引揚、夫ヨリ京町口へ番兵衛守スル十余日、後

チ田原坂応援トナリ清水村へ転陣、半隊田原坂正面ニ向

ヒ、半隊ハ清水村岡陵ニ番兵ヲ置キ固守ス、田原坂敗軍ノ  
 際植木ヨリ半里計モ退キ頗ル苦戦スト雖モ応援モ続キ止  
 戦、遂ニ植木マテ追撃シテ壘ヲ結ヒ対戦ス、両三日ヲ經  
 テ木留口ノ官軍既ニ我本營ニ迫ラズルノ急報アリ、因  
 テ我隊半隊他隊合テ一小隊半応援ヲ命セラレ、速ニ駆付  
 横合ヨリ進撃、全軍モ返戦遂ニ追退ケ対壘固守ス、其後  
 川尻口敗軍ノ際、(山鹿市)上鍋へ退キ、一兩日(山鹿市)弓削渡シヲ守リ、夫  
 ヲリ惣軍(矢部町)矢部へ引揚ケ、同所ニテ振武隊ト變号、九番中  
 隊トナリ、振武隊ハ鹿兒島進撃ノ軍議決シ、人吉ヲ經テ鹿  
 兒島城及甲突川下ヨリ攻撃スト雖モ甚タ利アラス、(鹿兒島市)田上  
 村へ退キ守計ヲ為ス、同所ニテ官軍兩度襲来スレトモ悉  
 ク追退ケ、六月中旬頃我背後ヨリ襲来セラレ同所保ツ事  
 能ス武岡ニ退キ烈戦終日、遂ニ敗走、翌日(鹿兒島市)川上村ヲ經テ  
(加治木町)蒲生郷へ退キ、又襲来セラレ利アラスシテ加治木ノ内菫  
(垂水市)蒲谷へ引揚兩三日滯陣、後チ牛根郷屯在ノ官軍ヲ振武隊  
 三小隊ヲ分テ攻撃、海岸迄退ケ、克ヲ得テ末吉郷ニ引揚、  
 同所ニテ市成郷、百引郷、大崎郷其他各所ニ官軍屯在ノ  
 由ヲ聞キ、恒吉郷ニ振武隊全軍ヲ纏メ、先ツ百引郷屯在  
 ノ兵ヲ進撃ノ議ニ決シ、徹夜兼行、曉霧ニ乘シ、哨兵ノ  
 意リヲ探偵シ一同ニ攻撃、勝ヲ瞬息ニ決シ、生捕將校会

計官其他人夫迄百余名、死傷モ少カラス、分捕大砲二門・  
 弾薬・兵糧ニ至リ算ナシ、其夜分捕品ハ生捕ニ負ハセ残  
 品ハ之ヲ火シテ、又恒吉郷ニ引揚、翌日大崎郷ニ向ヒ進  
 撃、此亦勝利ヲ得テ志布志郷ニ引揚、兩三日滯陣ノ処、  
 高原口ノ味方高原表へ進撃スルノ報アリ、依テ応援ノ為  
 メ振武隊ハ彼地へ向ヒ、(山田町)兩度高原へ進撃スト雖モ利アラ  
 ス、惣軍ヲ上莊内ノ内山田村へ引揚兩三日滯陣、此際福  
 山口ノ行進隊(大隅町)岩川表へ進撃スト、依テ彼ノ隊へ交代シテ  
 財部郷ノ内今別府村ヲ守リ一兩日滯陣、七月下旬都之城  
 味方惣敗軍ノ際負傷イタシ、竊ニ間道ヲ經テ噲啖郡ニ至  
 リ療養ヲ加ヘ、九月廿三日鹿兒島ニ歸リ、翌廿四日谷山  
 警視出張所ニ就テ降伏、帰順仕候也、

鹿兒島県

明治十一年第三月

脇田 寛

七 坂元平八郎上申書

昨十年二月十六日四番大隊七番小隊押伍トナリ鹿兒島県  
(編野利秋隊長)発程、同廿二日進テ熊本城ニ迫ル、此ニ於テ植木へ官兵  
 ノ応援至ルヲ聞キ、翌曉天熊本ヲ発ス、途ニテ先鋒ハ既



ニ植木ノ敵ヲ敗リ、聯隊旗ヲ取り、斬獲無数ナリト云報

ヲ得、直ニ転シテ山鹿ニ向、路ニシテ木ノ葉口ノ炮声烈

シキヲ聞、間道ヲ経テ木ノ葉ノ側面ヲ突キ、大ニ是ヲ敗

ル、銃二百余挺ヲ取り、斬獲無数、此ニ於テ我兵ハ木ノ

葉ヲ守ルノ間、夜ル池ノ上(五番大隊長)四郎本営ノ令ヲ伝ヘ植木駅ニ

引揚タリ、三月三日又転シテ山鹿ヘ向フ、翌日戦フテ大

ニ是ヲ敗リ進撃スル事里余、退テ山鹿ヲ保ツ、同七日岩

村ヘ進撃、互ニ勝敗ヲ分タス、時ニ本営桐野利秋令ヲ伝、

翌日山鹿ヘ引揚タリ、直四小隊田原坂ヘ応援シ互ニ勝敗

アリ、此時小隊長創ヲ蒙リタリ、時ニ分隊長トナリ、三月

下旬負傷、川尻病院ヘ入室、川尻敗ニ際シ木山、御船等

ヲ経テ馬見原ニ到リ、四月上旬帰県、日ヲ経テ我隊モ振

武八番中隊トナリ鹿兒島ニ滞陣シ、五月下旬帰隊シ、時

ニ武ノ岡等敗走シ我隊モ下田、吉田、帖佐等ヲ経テ、恒

吉ニ滞陣セリ、六月中旬百引ニ進撃シ大ニ利ヲ得タリ、

大炮二門・小銃・彈薬無数ヲ得、医員名ヲ虜ニシタリ、

同下旬大崎ニ戦、大ニ利ヲ得タリ、其後高原・高崎等ニ

於テ毎戦利ヲ得タリ、七月上旬末吉ノ内通山ニ戦ヒ大ニ

敗リ、都ノ城ニ戦ヒ敗走ス、隊伍散乱、山中ヲ忍ンテ帰

家シ、九月上旬帰順仕候也、

鹿兒島県三大区一小区

十一年三月 坂元平八郎

### 八 鎌田 政上申書

昨十年二月十五日第一番大隊十番小隊押伍トナリ鹿兒島

県出發、同廿一日熊本川尻ニ至ル、翌日攻城勝敗分タス、

続ヒテ白川橋ヲ守ル事数日、此ニ於テ分隊長トナリ段山

ニ転陣、川尻ノ敗ニ際シ木山ニ退キ、此地ニ於テ半隊長

トナリ御船ヘ転戦、大ニ敗レテ矢部ヘ退キ、萬坂村ヘ壘

ヲ築テ防戦ス、而シテ人吉ヘ引揚、田野ヲ経テ鹿兒島県

大口ニ出テ、山野小木原等ノ諸所ニ於テ戦ヒ、敗テ吉田

ヘ退キ、再ヒ大口ヘ進撃、山野ヲ敗リ肥後水俣迄追撃ス、

同所イラ迫ニ守兵シ、屢々戦フテ終ニ利アラス、翌日水

俣ノ内猪ノ嶽ニ進撃ノ際銃創ヲ受ケ、大口病院ニ入り、

八月上旬帰順帰宅仕候也、

鹿兒島県

十一年三月 鎌田 政

九 芦谷八太郎上申書

昨十年二月十六日第三番大隊三番小隊兵士ニテ鹿兒島県  
(木山弥一郎隊長)  
 発程、同廿二日熊本県川尻着、同日ヨリ三月上旬迄攻城  
 イタシ、夫ヨリ同十五日比迄梅木谷ニ於テ番兵、同十六  
(鹿火町)  
 日頃植木駅へ引揚、同日同地ニテ戦ヒ大勝利、翌日分隊  
 長ニ挙ラレ、四月上旬マテ同所ニ於テ連戦、敗軍ニ付武官  
(薩軍)  
 へ引揚ケ暫時相戦ヒ、手負致シ、矢部病院入室、其後帰  
 県ノ上加養、輕快ノ砌六月上旬振武八番中隊半隊長トナ  
(薩北町)  
 リ、日向国百引ニ於テ六月上旬戦ヒ大勝利、当日恒吉へ  
 引揚ケ、同月中旬高原口進撃勝利、同日夕方上庄内山田  
(山田)  
 村へ引揚ケ、其節小隊長代理トナリ、同月下旬末吉ノ内  
(野部町)  
 通山ニテ戦ヒ、敗軍ノ砌官兵ニ遮レ、夫ヨリ帰宅致シ、  
 八月廿日帰順仕候也、

鹿兒島県第三大区一小区

第十一年三月

芦谷八太郎

一〇 濱田兼長上申書

昨十年二月十七日第二番炮隊給養掛兼大小荷駄ニテ鹿兒  
(隊長田代五郎)  
 島県下発程、同廿二日熊本県下春日村へ着陣致シ候処、  
 開戦ニ及居候ニ付、花岡山炮台其他持口へ兵糧・彈藥分  
(熊本市)  
 配致シ、夫ヨリ戸坂村並ニ出町へ半隊出陣ニ付出張、松  
 橋へモ同断、其後川尻へ引揚ケ暫時滞陣、終ニ敗戦相成  
 木山・矢部へ引揚ケ、同処ニ於テ右炮隊解隊、夫ヨリ振  
 武隊大小荷駄トナリ、即日鹿兒島県下へ帰陣、上伊敷村  
(鹿兒島市)  
 へ宿陣諸所持口へ同断運送、六月廿五日同所敗戦ノ砌、  
 官兵ニ道ヲ遮ラレ本隊へ帰ル事不能、諸処ニ潜伏仕居、  
 其後帰順仕候也、

鹿兒島県下第三大区二小区

十一年第三月

濱田兼長

一一 平井政舉上申書

昨十年旧正月一日五番大隊四番小隊ニ編入、同五日鹿兒  
(二月十三日)  
(池上四郎隊長)  
 島県発程、同十日熊本着ク、翌日段山口ノ守兵ニ交代シ、  
(二月十七日)  
 同廿五日迄对壘、同下旬田原坂ニ応援シ大ニ利ヲ得タリ、  
 遂ニ田原ノ守兵タリ、二月六日田原坂敗走ノ節銃創ヲ受、  
 川尻病院ニ入り、川尻口敗走ニ付、木山ヲ経テ矢部ニ至

ル、創稍快復セリ、因テ帰隊シ、三月中旬馬見原、人吉

ヲ經テ鹿兒島ヘ向フ、同所友田ヘ守兵、五月中旬武村ヘ

向ヒ、同所引揚ケ帖佐(給良町)、蒲生(蒲生町)、國府ヲ經テ、福山ニ退キ、

同下旬貴島清ノ指揮ヲ受、牛根二川ヘ屢進撃シテ利ヲ得

タリ、其後チ末吉ニ引揚ク、六月上旬庄内ノ通山ヲ守リ、

軍大ニ敗テ(日南市)、肥ヲ經テ清武ヘ引揚、夫ヨリ延岡ノ内内山

ニ於テ分隊長トナリ、長井村ニ於テ銃創ヲ受入院、七月

十日同所ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県

十一年三月十七日

平井政學

## 一二 吉村貞寛上申書

昨十年二月上旬(桐野利秋隊長)第四番大隊四番小隊ノ押伍ニ編入シ、同

十六日鹿兒島県下発程、大口街道ヨリ肥後水俣ヲ經テ、

小川駅ニ着スルヤ、先鋒既ニ熊本城ヘ開戦ノ景状アリ、炮

声山岳ニ轟キ烟焰天ニ漲ル、陪道疾駆シテ熊本ニ至レリ、

是実ニ二月廿二日ナリ、翌日官軍ノ援兵ト植木ニ戦フノ

報アリ直ニ進軍、山鹿駅ニ官軍屯在ノ赴キニ付同廿四日

未明兩道ヨリ進撃、官兵既ニ岩村ヲ退却セリ、因テ山鹿

ニ胸壁ヲ築キ固守ス、二月廿六日官軍襲来、迎撃テ大ニ

是ヲ敗ル、二月下旬岩村ヘ本・間兩道ヨリ進撃ス、戦利

アラスシテ亦退ク、三月上旬官兵鍋田ノ壘ヘ未明ヨリ襲

来ス、身方頗ル苦戦、我隊救援シ格闘接戦、午後六時ニ

至リ遂ニ官兵敗シ、銃器或ハ死骸ヲ捨テ走ル、其後數々

戦互ニ勝敗アリ、三月下旬田原坂敗軍ノ際鳥ノ巢村ヘ退

軍、对壘固守ス、四月上旬官兵大軍ヲ以テ攻撃ス、退事

半里余遂ニ返戦シテ大ニ進撃ス、四月十四日川尻口敗戦

ノ際大津駅ヘ退陣、四月中旬惣軍矢部ヘ引揚、同所ニ於テ

隊号ヲ變シテ奇兵隊ト改名シ、四月下旬求摩人吉江代村

ヘ引揚ケ、同所ニ於テ分隊長ニ挙ラレ、奇兵隊ハ豊後口

ニ進撃ノ策ニ決シ、道ヲ日州ニ転シ富高新町ニ出、延岡

ヨリ豊後竹田ヲ略シ、數日对壘戦争ノ処、五月中旬遂ニ

敗軍トナリ我隊ハ佐伯ヘ退キ、外隊ハ臼杵城進撃捷ノ報

アリ、居事旬余臼杵城敗軍ノ際官兵攻撃スルニヨリ、五

月下旬ニ至リ日州陸城峠ヲ守ル、同所ニ於テ对壘數旬ニ

シテ亦敗ル、矢ケ内ニ退キ固守ス、六月上旬官兵襲来激

戦ノ際胸部ニ重創ヲ被リ、延岡病院ニ入り療養ス、稍快

氣ニ付八月上旬帰県仕候也、

鹿兒島県鹿兒島第三大区

一小区

十一年三月

吉村貞寛

郷警視派出分署ニ於テ自首帰順仕候也、

鹿兒島第三大区四小区

式百六十式番地

十一年三月

伊藤應助

一三 伊藤應助上申書

明治十年二月十七日(五代五郎隊長)第二番炮隊臼炮打手伍長トナリ、鹿

兒島県出発、同廿二日熊本県へ着ク、其夜安政橋脇へ炮

台ヲ築キ攻撃日アリ、然ル処四月上旬川尻口大敗ノ時木

山町(城町)ニ引揚ケ暫時滞陣、夫ヨリ矢部ニ引揚、当所ニ於テ

解隊、奇兵隊ト改名シ拾番中隊ノ押伍トナリ、湯山(永上村)マテ

繰込ミ同所滞陣中鵬翼三番隊ノ中隊長ニ挙ラレ、求摩人

吉ノ内(市之瀬、芦北町)一ノ瀬ニ於テ防戦、勝敗未分内甲ノ瀬(珠磨村)ヘ引揚、同

所ニ於テ遊撃九番小隊ノ監軍トナリ、五月上旬人吉ノ内

炭山越ニ番兵、六月上旬同所ヲ引揚日州宮崎へ進撃、当

所ニテ急応隊ト合併同所ニ於テ防戦、同七月上旬敗戦、

高鍋ヨリ美々津迄引揚、当所ニ於テ防戦敗走、夫ヨリ延

岡ノ内三輪ニ於テ番兵、同所モ不日引揚ケ終ニ長井村ニ

繰込、同所ニ於テ防戦、終ニ官兵ニ囲マル、八月十八日

ニ至リ囲ヲ解キ再ヒ鹿兒島へ襲入ノ途中平病ニ罹リ、隊

ニ後レ終ニ城山ニ入事不能空ク帰家、九月十九日加治木

一四 平山小左衛門上申書

昨十年三月廿七日鹿兒島出発、熊本県鳥ノ巢村へ着シ、

奇兵一番小隊押伍トナリ直ニ進撃大ニ克ツ、番兵スル事

凡ニ週間余ニシテ矢部へ退ク、三小隊合シテ奇兵拾六番

中隊ト改メ、其時半隊長トナリ直ニ南郷街道へ番兵凡ニ

週間、夫ヨリ馬見原ノ内鏡山へ進撃大勝利、官兵ノ即死

八十余名ナリ、味方ノ戦死僅ニ二十余名、即日三田井(南千穂町)へ

引揚、四週間滞軍ノ処官兵屢々進撃シ、来ル毎ニ撃テ退

ク、終ニ敗軍、延岡官原へ退キ、大楠へ連絡ヲ通ス、此

時小隊長ニ挙ラレ速ニ豊後地へ進軍、重岡ノ陣(宇目町)ケ塚へ進

撃大ニ捷ヲ得、然レ其地形ニ明ナラサルヲ以テ阿武美ト

云所ニ引揚ケ二週間位滞陣、後ニ三河路へ援兵ノ為メ赴

キ此夜七時ヨリ交戦、大勝利後亦三河路ニ番兵、夫ヨリ

延岡長井村ニ引揚ケ、交戦ノ節手負致シ該地ノ病院へ入

り、八月十七日病院ニ在テ帰順仕候也、

鹿兒島県下谷山郷

第四大区一小区

明治十一年三月

平山小左衛門

一五 松井十郎上申書

明治十年三月廿六日第九大隊大小荷駄トナリ、鹿兒島出立、熊本県下人吉エ大小荷駄ヲ置キ、各隊給養方ニ彈藥・糧米配分ス、其後チ同所坂本(坂本村)ニテ戦ヒ、古田(八代市高田)・神ノ瀬(球磨村)ヘ宿陣ノ時中隊編制ニテ八代并頭地口其外諸所ニ於テ戦争ス、同五月卅日人吉大畑ヘ引揚、夫ヨリ鹿兒島吉田并佐土原ニテ同断、同八月中旬延岡長井村(北川町)ニ於テ降伏仕候也、

鹿兒島県

第一大区四小区

明治十一年三月

松井十郎

一六 榎並兼起上申書

昨十年三月廿七日鹿兒島出発、熊本県鳥(西台志町)ノ巢村ヘ着シ、

奇兵一番小隊押伍トナリ直ニ進撃大ニ克ツ、番兵スル事

凡二週間余ニシテ矢部ヘ退ク、三小隊合シテ奇兵拾六番

中隊ト改メ、其時半隊長トナリ直ニ南郷街道ヘ番兵凡二

週間、夫ヨリ馬見原ノ内鏡山(五ヶ瀬町)ヘ進撃大勝利、官兵ノ即死

八十余名ナリ、味方ノ戦死僅ニ貳拾余名、即日三田井(高千穂町)ヘ

引揚四週間滞軍ノ処、官兵屢々進撃シ、来ル毎ニ撃テ退

ク、終ニ敗軍、延岡官原(白之影町)ヘ退キ大楠(宇目町)ヘ連絡ヲ通ス、此時

小隊長ニ挙ラレ速ニ豊後地ヘ進軍、重岡ノ陣(鏡、北川町)ケ塚ヘ進撃

大ニ捷ヲ得、然レ共地形ニ明ナラサルヲ以テ阿武美ト云

所ニ引揚ケ、二週間位滞陣、後ニ三河路(三川内カ、北浦町)ヘ援兵ノ為メ赴

キ此夜七時ヨリ交戦大勝利、後亦三河路ニ番兵、夫ヨリ

延岡長井村ニ引揚ケ、交戦ノ節手負致シ其地ノ病院ヘ入

リ、八月十七日病院ニ在テ帰順仕候也、

鹿兒島県下

谷山郷居住

明治十一年三月

榎並兼起

一七 鮫島仲二上申書

昨十年四月廿四日鹿兒島県出発、戦場ニ於テ拔刀隊第十

六番隊小隊長トナリ、求摩<sup>(球磨)</sup>人吉へ出兵、五月廿日同所ニ

テ交戦終ニ敗軍、六月六日鹿兒島県下大口郷へ引上ケ、

同所ノ戦利非ス、七月四日飯野郷<sup>(えびの市)</sup>へ退キ、同廿二日國府<sup>(國分市)</sup>

郷警視分署ニ於テ自首帰順仕候也、

鹿兒島県大崎郷第百三大区

一小区

明治十一年三月

鮫島仲二

### 一八 伊集院兼一上申書

明治十年二月<sup>(永山勢一隊長)</sup>第三大隊十番小隊押伍トナリ、同月十七日

本營護衛ニテ鹿兒島出発、同廿二日熊本県へ着、積日城

外へ番兵、中隊編制ノ時半隊長トナリ、八代へ援兵トシ

テ出発ス、川尻刃ニテ数々戦ヒ利アラス、四月十八九日

ノ頃御船エ攻撃ス、戦致刻ニシテ官兵ヲ追散シ、同廿三

日早朝官兵襲来リ戦ヒ頗烈シ、遂ニ味方利アラスシテ退

ク、其時右足ヲ撃タレ矢部へ送ラル、夫ヨリ延岡、高岡、

都ノ城ヲ經テ鹿兒島へ歸ル、其後同所敗軍ノ時吉田郷エ

引揚ケ日州へ赴、終ニ延岡長井村ニ於テ降伏仕候、

## 二 宮城県上

鹿兒島県第一大区四小区三番地

明治十一年三月

伊集院兼一

### 一九 貴島良藏上申書

明治十年初春西郷隆盛兵ヲ拳テ東肥ニ突入ス、総軍凡二

万ト称ス、熊本二本木村ヲ以テ本營トス<sup>(熊本市南部)</sup> 我軍母シテ大本營ト云ヒ且ツ是所ニテ諸將ノ

向ヲ所ノ部、是時ニ当リテ官軍ノ将谷干城部下ノ兵ヲ引テ熊

本城ヲ守ル、我將篠原國幹一軍ヲ引率シテ城ノ東南段山

口ヨリ攻撃ス、我レ命ヲ受テ兩軍戦情ヲ望視シテ還ツテ

戦景ヲ本營ニ具陳ス<sup>我伝令使目ノ斥候長、</sup> ヲ兼タルヲ以ナリ、是実ニ第二月廿二日

ニシテ兩軍鋒先ヲ交ユルノ初トス、而シテ復タ同夜報ア

リ、官軍援兵已ニ植木ニ着スト、故ニ疾馳シテ植木ニ赴

ク、向坂ニ至レハ戦已ニ酣ナリ、仍テ戦情目撃際偶々我

友人長坂某重傷ヲ蒙リ頗ル困難セリ、故ニ助けテ將二病

院ニ送ラントス、同人言フ、官軍総員二大隊ニ不過、今

我兵二小隊ヲ以テ向坂ノ左松中ヨリ官軍ノ中軍ヲ衝キ、

夾テ之ヲ攻メハ一戦ニシテ取ル可シト、是ニ於テ我長坂

ニ代リ隊下ヲ指揮シテ疾馳、向坂ヲ環シ突出シテ官軍ノ

中堅ヲ撃ツ、官軍乱潰ス、機ニ投シテ我本道ノ大軍鯨波

ノ声ヲ発シテ大ニ進撃ス、我隊下勝ニ乘シテ抜刀シ急ニ

接戦追撃ス、官軍遂ニ大ニ敗走ス、亡ヲ逐イ北ヲ追イ斬級算無シ、遂ニ聯隊旗ヲ取ル旗ニ步兵第十四、騎隊ト記載アリ、長驅里余七本村(植木町)

ニ至リテ引揚ケタリ是時良馬一、足分取タリ、還テ捷ヲ二本木村ニ報ス

彈丸二千発並ニスナイド、桐野利秋ニ謁シテ戦情ヲ告ケ、長坂カ

謀策ヲ陳述シ、我長坂ニ代リ官軍ニ突入セシ事ヲ言フニ、

同人不満ノ色アリ、暫時アリテ、人ヲシテ謂ハシメテ曰

ク、子軍律ニ背犯シ伝令職トシテ兵ヲ引テ戦フ事不当ナ

リ、仍テ軍律ニ処ス可キ処口、情ヲ顧ミ伝令ノ職ヲ免スト

是時石井竹之助ナル者予ニ耳語シテ曰ク、桐野モ是ヲ命スル、

八本意ニ非ス然リト雖トモ軍律不可乱、足下意トスル勿レ

怒ニ堪ヘスト雖トモ思考スルニ、我レ誠ニ軍律ニ背ケリ

ト、復タ桐野ノ法ヲ正シウスルヲ喜ヒ居ル事二三時間ニ

シテ、再ヒ伝令ニ任セラル、明レハ廿三日我裨將諸軍ヲ

督シ大ニ木ノ葉駅ニ進撃ス(玉東町)、是將ハ池上四郎ナリ、木

大ニ撃破ル是報午後二大本營ニ至ル、是時分捕銃器ヲ、夜ニ入り我

二本木ヨリ令ヲ木ノ葉ニ伝フ二本木ハ總督本營、則チ諸軍

ヲ植木ニ引揚タリ木葉村ノ敵ヒハ我關係ナシ、是戰ヒ大勝利ニテ、居ル

事ニ日、隊長ニ任セラレ高瀬口ニ進発ス五日ナリ、到レハ則

チ兵火江ン々々トシテ空ニ漲リ大小炮鯨波ノ声山嶽モ崩

ル、カ如シ、而シテ両軍川ヲ來ミ烈戦ス時三川水、大ニ漲ル、是時我總

軍千ニ過ス、我レ丘ニ登リ親シク両軍ノ戦情ヲ望視スル

ニ是ノ手ノ將ハ西郷小平ナリ、前峠ハ峻絶、官軍ノ大軍攢瘞之ヲ

守ル、已ニシテ官軍將一隊ヲ指揮シテ攻來ル、我諸軍之ニ

応シテ接戦數時間、遂ニ彼將ニ彈丸ニ中リ馬ヨリ墜ツ、

進テ大ニ撃破ル是時、官軍死屍十四五計リ有リ、中ニ生捕一名、官軍、居

ル事三日、官軍復タ攻來テ戦ヲ挑ム、我軍復タ撃テ大ニ之

ヲ破ル、是時我隊下先登官軍ノ壘ニ迫ル、鏖戦追撃ス、

官軍高瀬ニ火ヲ縱テ擾走ス、是時我將西郷使ヲ送テ捷ヲ

本營ニ報ス、且ツ請フ、今援兵ヲ出セヨ、然ラハ是ノ勢

ヒニ乘シテ南ノ關官軍ノ根拠ヲ衝ン、夫レ功ハ成リ難シ

敗レ易シ、時ハ値イ難シ失ヒ易シ、機失フ可ラス、本營

不許シテ曰ク、城口未タ抜ケス、而シテ先鋒深ク敵地侵

入スルハ不利ナリト、使ヒ返リ報ス、西郷之ヲ聞キ切齒

ス、ナヲ進ンテ諸軍ヲ指揮ス是ノ西郷ハ則チ、日夜接戦或ハ

敗、或ハ勝チ勝敗決セス、而シテ我援兵至ラス將士頗ル

疾疲ス、是時ニ官軍驍兵復タ々々大ニ至ル、其鋒甚銳シ

西郷大ニ怒テ劍ヲ按シテ呼テ曰、是ノ疲兵ヲ以テ格闘他

ニ奇道無クンハ必ス敗セン、勝敗ノ決是ノ一挙ニ有リ、

速ニ一隊ヲ以テ敵ノ中軍ニ切入レ、死ナハ則チ是ニ死ン、

一步ト雖モ退ク者ハ直ニ斬ラント、是ニ於テ我隊下ヲ指

二 宮 城 県 上

揮シテ山下ヲ廻リ隊ヲ乱シテ疾馳シ林ヲ過ル時、官軍一隊突然林ヨリ薄撃ス、我隊下大ニ駭キ敗走ス、官軍勝ニ乘シテ追撃ス、彈丸下ル事雨ノ如シ、而シテ我隊彈丸悉ク尽ス、士卒多死傷ス、是役ニ我隊死傷十二人外、ニ伍長一人、賊卒一人ナリ且ツ戦ヒ且ツ退ク、官軍復タ我帰途ヲ絶ツ、進退已ニ極ル、備路ヲ絶テシ兵ハ、本道ノ官軍ナリ仍テ縦横憤撃ス、之レヲ見テ我山下ニ備ヘシ一小隊来リ援ク、加治木郷ノ兵ナリ、故ニ僅ニ免カル、事ヲ得タリ、而シテ官軍又タ我カ中軍ニ来リ攻ム、我レ散兵ヲ集メテ拒キ戦フト雖モ支ル能ハス、故ニ引揚シ事ヲ西郷ニ言フ、語未タ終ラス彈丸飛来テ西郷ガ胸ヲ打貫ク、是時西郷正ニ死ナントス、左右ノ人ニ告テ曰、予カ為ニ阿兄ニ告ヨ戰ヒ遂ニ意ノ如クナラス、是ノ先語ハ最早聞ヘス、仍テ我総軍大ニ敗潰ス、退事里余〇〇村ニ堅守ス、所ハ、失念、是日ノ戦ヒ曉ヨリ午後ニ至ル、我軍大ニ疲ル、官軍モ又敢テ深ク入ラスシテ退ク、夜ニ入り我兵士報シテ曰ク、我カ援兵將ニ大ニ至ルト、漸ク近テ之ヲ見レハ熊本県大隊長松浦新吉郎部下ノ兵ヲ引テ而シテ来ル、是ニ於テ諸軍ヲ五隊ニ分チ左右翼ヲ縦チ、夜ノ明ラカナルヲ俟テ再ヒ進撃ス、松浦驍名アリ、衆ニ先ンシテ進ム、兩軍互ニ鯨波ノ声ヲ合せ、入乱レ大ニ戦フ事終日ニシテ勝敗決セス、死傷ハ算無シ、夜ニ入兩軍相引ニ引揚タリ、而シテ我軍又木ノ葉村ニ引揚タリ、是レハ本營ヨリ、引揚ノ合衆ル

因テ同所ヲ堅守ス、戦フ事連日、而シテ是ノ地形広大ニシテ我軍不利多シ、因テ復タ退テ田原ヲ守ル、坂ヲ背ニシテ堅守ス、官軍ノ大戦跡ニ繼テ大ニ至ル、未タ相待シテ戦ハス、壘ヲ對シテ之ニ居ル、是時ニ当テ霖雨連日止ム時無シ、因テ互ニ休戦三四日ニシテ人馬ヲ息ム、正ニ是三月初旬ナリ、是ヨリ田原坂、大合戦ナリ、是ノ時ニ当テ我諸軍精兵数千大砲數門ニテ一步モ不退ト死守ス、居ル事二日官軍精兵三百薄撃シテ我壘ニ迫ル、我軍撃テ之レヲ卻ク、勝ニ乘シテ拔刀シ官軍ノ壘ニ切込ム、追事五丁、三壘ヲ抜ク、其翌日官軍復大ニ来リ攻ム、是ノ時近衛兵、警備隊、先鋒ヲ爭テ来攻ム、因テ退イテ原壘ヲ保ツ、是ノ夜竊ニ議決シテ、精兵一中隊ヲ募リ出シ、宵ヨリ壘ヲ他隊ニ渡シ置キ四五丁引揚ケ兵士ヲ休息セシメ、夜ノ深クルヲ俟テ発セント各休息ス、已ニシテ遠寺ノ鐘午夜ヲ報シ唯タ夜嵐ノ荒蘆ヲ吹テ颯々タルノ声ヲ聞ク、而シテ是夜月無クシテ嫩雲雨ヲ醸シ頗ル凄然タル情アリ、時ヨシト令ヲ伝ヘ兵士ヲ起シ、正列セシメテ隊ヲ二手ニ分チ、靴声ヲ潜メテ谷間ヲ回リ林ヲ越ヘテ潛行ス、今ヤ夜色愈々晦ク風声モ亦タ眠ル、漸ク官軍ノ大壘ニ近付竊ニ兵ヲ配ル、是時官軍ノ哨兵怪シシテ声ヲ掛ル、我隊答ヘス、故ニ哨兵呼テ曰ク、氣ヲツケ、是ニ



因テ我兵喝一喝壘中ニ闖入ス、時ニ黒暗咫尺弁シセス、我軍ハ無二無三ニ切回ル、誰レカ驚ロカサルヲ得ンヤ、士官ハ愕然指揮モセスシテ走り、兵士ハ慄然銃モ取ラスシテ遁出シ、正ニ是桜花ノ枝上ニ一嫉風ヲ起シ忽チ宿鶯ノ春夢ヲ破攪シタル如ク狼狽庖丁窮マリ無シ、我兵退テ原壘ニ帰レハ官軍ノ背後ヨリ烈シク炮発ス是ノ時我軍ノ引シテ撃ラナス、我隊轉ヨリ望視ス、知ラス官軍多く同士レハ官軍ノ難否ハ窮リ無シ、天漸ク明ラカナレハ官軍ノ死屍広野ニ横タハリ流血淋漓トシテ何百ノ数ヲ知ラス近衛・警視ノ死屍尤も多シ而シテ是ノ日官軍復タ大ニ攻メ来ル九時頃進メラツバ、左右ヨリ吹テ大ニ来ル、我壘ニ切込ム是ハ警視、巡査ナリ、距キ戦フ事数時間、官軍援兵復タ至ル是ハ近衛、兵ナリ、三面ヨリ掩撃ス、是時我隊下ノ兵多ク死傷ス、寡兵ヲ配置シテ壘イ五ツヲ守ル、而モ先鋒ノ壘僅ニ守兵十二人ナリ、之ニ因テ十二人齊シク戦死ス、我壘是ノ内ニ有リ時二年、十六才、我将ニ赴キ救ハント欲ス、遮リ戦フ、救事能ハス、而シテ我壘モ殆ント陥イラントス、殺傷相当シテ距キ戦フ、官軍勇兵復タ々々横サマニ我壘ニ突入ル、故ニ遂ニ壘ヲ捨テ潰走ス、官軍我三壘ヲ取ル、是時日已ニ暮ス、則チ我カ兵ヲ檢スルニ在ル者僅ニ六十二過キス出兵ノ時ハ二、百五十名ナリ、已ニシテ我援兵夜半来リ援ク三百人、計リ、翌日黎明曉霞ニ乗シテ縦横薄撃ス、官軍モ亦タ善ク戦フ、相

馳突二十余合短兵急ニ接戦ス、遂ニ我三壘ヲ取返シ連進官軍ノ二壘ヲ取ル、是時官軍積骸山ノ如ク僵死相属ス、而シテ是役官軍死屍大凡、五百計リ見ヘタリ、我軍刀刃鋸ノ如ク、士卒身各数創ヲ被ル、而リト雖モ官軍ノ死傷ハ輒ク我軍ニ倍セリ、其翌日官軍亦タ大ニ進ミ来ル凡ソ三天隊計、近衛・警視兵先鋒ナリ、四面進ミラツバ吹キ撃放ノ声ヲ聽テ来ル、四面齊ク翼進ス、我軍之ニ応シテ烈戦ス、戦ヒ將ニ酣ナル時官軍炮隊我隊下ノ壘ニ大炮ヲ発ス、頭上ニテ破烈ス、之ニ仍テ三人一時ニ殪ル内一人ハ、兵内長ナリ、我軍殊死シテ戦フ、官軍援兵亦来リ撃ツ、我軍披靡ス、官軍仍テ躡シテ連進其ノ銳尤モ強シ、我軍遂ニ退ク、官軍亦二壘ヲ取ル、是時二当テ両軍炮壘相對スル事拾歩ニ過キス、然ト雖モ互ニ一歩モ引カスシテ死守ス時或ハ舌戦スル事有リ、官軍ノ壘ヨリ我受持ノ壘ニ餅ヲ投込ミ曰ク、以テ聊カ暇ヲ慰ムト、我軍ヨリ亦タ魚ヲ遣ハシ之ニ謝シテ曰ク、以テ聊カ守備ノ勞ヲ慰ムト、仍チ書フ、願クハ一奉戦セント、(山鹿市)、(西合志町)、(七)、(植木町)、(六)、(七)シテ大津・鳥ノ栖ニマタカリ、西方ハ木留ヨリ奈知山ヲ(玉東町)越ヘ吉次峠ニ相達ス凡ソ七里間、連綿トシテ烈戦、日夜休ム時無シ、時正ニ艶陽春風翩々トシテ両軍ノ旗ヲ吹キ靡シ、刀光明々トシテ旭日ニ輝キ、鯨波ノ声天地震動シ烟焰空ニ張り兵火天ヲ焦ス、復タ夜間ノ飛丸ハ正ニ爛熳タル桜花ノ朝嵐ニ散乱スルカ如シ、而シテ両軍ノ勇兵猛

卒星ノ如ク、霞ノ如ク、各ノ其ノ罌炮ヲ墜メタリ、誠ニ是前代未聞ノ烈戦ナリ、是時ニ当テ我軍彈丸漸乏シ、因テ士卒ニ狼ニ発ヲ禁シ切込ヲ以テ主義トス官軍ヨリ烈シク大砲ヲ発スレハ我軍之ヲ見テ其玉ヲ拾ヒ取り、亦タ官軍ニ発シ返ス、尤モ破烈セサ、中ンツク大砲ノルヲ見スマシテ而シテヒロイ取ル、乏シキコトゴ推知有ン、彈丸尤モ乏シ田原坂ノ役尤モ烈シキ時ニ士卒彈丸尽テ數クユエ会計部ニ取リヤレハ十發カ或ハ二十發カウツ渡ス故ニ我軍彈丸分補ヲ七注目ス、故ニ軍氣ハ大ニ振フト雖、之ニ因テ勝軍ノ所モ、多ク敗軍トナリシ事數ヲ知レス、上ミ將校ヨリ下士卒ニ至ルマテ戦ヒノ罪ニ非ス是レノミ千載ノ遺憾ト大ニ各切齒スル事限リ無シ、是時我隊下田原ヲ堅守スル事凡ソ二週間、士卒大ニ疲ル、故ニ戰場ノ始末並ニ多ク死傷ノ有リシ事ヲ本營ニ報告ス、因テ本營ヨリ令シテ我隊ト別隊ト代ラシム是ノ別隊ハ山鹿口ヨ、里ノ來リシ援兵ナリ、故ニ我レ田原ノ罌ヲ他隊ニ渡シ置キ殘兵ヲ引テ二本木大本營ニ至ル、因テ具ニ戦情ヲ陳述シ兵員配置ノ部署ニ述フ、因テ勞シテ曰、拳兵以降數旬、日夜力戦、子毎ニ之ニ努ム、他日奏功ノ後ニ議セント、因テ留ル事三日西郷將士ヲ撫勞スル事皆是如シ、而シテ將士甘勞ヲ同フス、故ニ將士争フテ為ニ死シ事思フ、是時村田笑テ、鎗兵モ少シハ手ニコ、已ニシテ田原ノ我軍敗走セシト急報到ル、因テ桐野利秋我ニ謂テ曰ク、聞ク田原ノ我軍敗潰セリト、故ニ我レ大ク援兵ヲ出シ官軍ヲ襲殺セント思フ、已ニ多ク援兵ヲ出セシト雖モ願クハ子モ又タ一行ヲ煩ハスト、是

ニ於テ精兵數百ト雷走植木ニ赴ク是時參、軍同行、大ニ戦フ事三十余合曉ヨリ正午ニ至リ、植木駅端迄返ス是ヨリ西南戦争ノ是ノ出先本營長ハ、中島健彦ナリ、我軍大勝利ヲ得テ官軍精兵凡四百名計リ一時ニ撃取ル是ノ内ニ近衛多シ、逐食少々士官、是ヨリ日夜接戦或ハ勝或ハ敗シ烈戦ニ旬余ナリ田原坂ノ合、戦向様ナリ、川尻口ノ軍敗潰ス、因テ引揚ノ令本營ヨリ至ル、則チ木山ニ引揚ケ、後チ長峰ニ進撃ス、是ノ時大ニ勝利ヲ得ル(船船町)ト雖モ御舟口我軍敗軍ニ付亦引揚ノ令本營ヨリ至ル、遺憾ナカラ木山ニ引揚ケ、夫ヨリ矢部、馬見原、三田井、(蘇場町)人吉所々ニ戦フテ転戦、延岡ニ至テ病ニ罹リ暫ク休戦ス、後チニ軍事裁判ノ檢事トナル、三田井ニ出張シテ遂ニ引殘リ所々ニ匿クシテ後チ縛セラル、是ヨリ先キ我延岡ニ在シ時、官軍警視隊ヨリ我軍ニ書ヲ送ル、其文ニ曰長文ナレハ大略ヲ茲、汝等官軍ニ抵抗スル殆んど數旬月ニ至ル、而シテ官軍ノ先鋒一二旅団ハ已ニ都ノ城ヲ抜ク、三田井口モ四五旅団ヲ以テ且夕ニ抜カントス、豊後口モ已ニ陥イラントス、汝等退縮シテ有ル者僅ニ數里ナラスヤ、何ソ速ニ干戈ヲ投シテ轉門ニ降ラサル、然ラハ則チ特典ヲ以テ汝等ヲ処セン、若シ聞カスシテ抵抗セハ悉ク襲殺セント、我軍亦答書ヲ送ル是ノ答文ハ油上内郎命シテ前稿セム、是ノ時ニ友人小倉如平ト共ニ答文ヲ轉ス、外ニ七絶句ノ詩ヲ送ル、是ノ

書ハ今ニ官軍ニ有ラント想フ故ニ別段記載セス、小倉処平ハ総官軍兼軍事裁判所  
長ナリ、是レハ大蔵省少丞ニ奉職中脈シテ西南ノ事ニ関セシ者ナリ、總判所長ハ參  
軍ノ坂田謙潔、  
兼任セリ

鹿兒島県

明治十一年三月

貴島良藏

長ト成、同五日同所龍名越ニ於テ昼夜二日之間連戦ノ節  
銃創ヲ蒙リ、其ヨリ鹿兒島県高岡病院エ入院、同八月十  
日日州長井村ニ於テ降伏仕候事、  
(北川町)

鹿兒島県

明治十一年三月十八日

徳永正八郎

二〇 横山通春上申書

明治十年四月十八日出発、人吉へ到着、  
(本田早苗中隊長)  
十七番隊兵卒ニ

編入シ、  
(水上村)  
江代ニ差越サレ候処、同所ニ於テ小隊長代理ニ

挙ラレ十日許相勤候処、病氣ニ付人吉病院エ入院、其後  
帰郷之上帰順仕候事、

鹿兒島県百七大区小林郷

明治十一年三月十七日

横山通春

二二 堀 勝上申書

明治十年第四月廿日 出生、肥後国矢部郷エ出兵、同所ニ  
(矢部町)

於テ半隊長ニ挙ラレ、  
(天津)  
大津迄出軍、三日ノ間滞留ノ処、  
病氣ニ付日州延岡病院エ入院、全快ノ上製作方申付ラレ、  
其後長井村ニ於テ降伏仕候事、

鹿兒島県百七大区  
小林郷

小林郷

明治十一年三月十七日

堀 勝

二一 徳永正八郎上申書

明治十年三月廿三日振武十四番隊兵士ニテ鹿兒島県発程

同廿六日熊本県人吉エ着、翌廿七日解隊ニテ振武十三番  
(黒肥地、多良木町)

中隊ノ押伍ト成リ、同廿九日同県黒肥ニ於テ戦争、敗軍

イタシ、同四月二日鹿兒島県須木郷エ転陣、同四日分隊  
(合崎県須木町)

二三 丸岡助次郎上申書

明治十年四月十九日兵卒ニテ宿許発足、同月廿五日人吉  
(有馬維介中隊長)

エ着陣、同所ニ於テ常山彦番中隊半隊長ニ挙ラレ当地へ

二 宮 城 県 上

へ地名不詳出軍、同廿九日同所ニ於テ戦、山口エ引揚、同所ニ於テ敗軍ニ付隊伍散乱ニ付、隊伍ヲ纏メ彼地ニテ戦ヒ敗レ、飯野郷エ引揚數日守兵、夫ヨリ野尻郷迄退キ、旧曆(野尻町)七月廿三日、六月十三日帰郷之上帰順仕候也、

鹿兒島県十三大区四小区

五百九十二番地

明治十一年三月十八日 丸岡助次郎

二四 勝目新太郎上申書

明治十年四月十九日兵卒ニテ宿元出立、同月廿五日人吉エ到着、同所ニ於テ常山老番中隊分隊長ニ挙ラレ当地へ操出、同廿九日同所ニテ戦争、山口へ引揚、同所ニテ戦候処敗走、隊伍散乱、十三日間ヲ経テ大畑(大畑市)ニ於テ隊伍ヲ纏メ、同所ニテ戦、飯野郷エ引揚ケ、夫ヨリ野尻郷迄退キ、旧曆(七月廿三日)六月十三日帰郷之上帰順仕候也、

鹿兒島県十三大区壹小区

喜入郷

明治十一年三月十八日 勝目新太郎

二五 兒玉七之丞上申書

明治十年二月十五日、(薩摩國幹隊長)壹番大隊四番小隊押伍ニテ鹿兒島出発、大口ヲ経テ二月廿一日熊本県川尻駅エ到着、翌廿二日未明先鋒隊ニテ熊本城エ攻撃、同廿五日高瀬駅エ先鋒ニテ攻撃、同夜木留邸エ引揚、戦互ニ勝敗アリ、三月上旬吉次峠(吉東町)・田原ニ於テ三十余日連戦、同所ニ於テ分隊長トナリ、其際銃創ヲ蒙リ病院エ入院スル事數日ニシテ帰順仕候也、

鹿兒島県十三大区小六区

明治十一年三月十八日 兒玉七之丞

二六 高良友益上申書

明治十年旧曆(四月十八日)三月五日県下出発、同九日飯野郷エ着、小隊長心得ト成リ、同十一日人吉エ着、拾二番大隊二番小队半隊長ト為リ、鹿兒島県下加治木郷エ引揚、旧曆五月十二日帖佐郷ニ於テ開戦、即日手負仕候ニ付、始羅郡山田郷病院エ入院仕、同十四日清水郷病院エ転院、夫ヨリ

所々転院仕、旧曆七月四日延岡ヨリ出立、同十九日帰着ノ上帰順仕候也、

鹿兒島県第五大区四小区

宮村六十番地

明治十一年三月十二日

高良友益

二七 有馬義定上申書

明治十年五月廿八日、兵卒ニテ宿元出立、同卅日宮崎ニ着ノ処、蟠龍五番小队エ編入、同地エ番兵ノ処、六月十四日宮崎五番小队半隊長ニ挙ラレ、(日之影也)大楠エ操出シ同所ニ於テ戦争仕候処銃創ヲ蒙リ延岡病院エ入院、四日滞留ニテ帰郷仕、兵卒ト偽リ帰順仕候処放免被申付置候処、出先ニ於テ三官相勤候者ハ可申出旨戸長ノ達ニ依リ、同年十二月廿二日自首仕候事、

鹿兒島県小林郷第七大区

二小区

明治十一年三月十五日

有馬義定

二八 大河平隆行上申書

明治十年五月三日兵士ニテ出軍、横川郷ニ於テ同月四日ヨリ数日守兵ノ処、同十五日五ヶ郷隊ノ小隊長トナリ、同所ニテ守兵、六月中旬頃各方面敗軍ニ付、無致方(松嶺町)隔郷エ引揚守兵スル事四五日、同二十日莊内エ出兵、同所ニ於テ暫時守兵、七月三日都ノ城エ引揚、同所敗軍ニ付宮崎エ引揚守兵致居候処、味方敗軍ニ付、自隊モ散々ニ相成、同十八日宮崎出途、廿三日帰郷仕帰順仕候事、

鹿兒島県第百九大区

壹小区百十三番地

明治十一年三月十八日

大河平隆行

二九 奥松新之丞上申書

明治十年五月三日兵士ニテ出発、横川郷エ着、守兵ノ処、同十五日五ヶ郷隊半隊長ト成リ同様守兵ノ処、六月中旬各守口敗軍ニ付隔郷エ引揚、同二十日莊内エ出兵、同所ニ於テ暫時守兵致シ、七月三日都ノ城ニ引揚、市中番兵ノ

処敗軍ニ付同隊モ散々ニ相成、同十八日宮崎ヨリ帰郷仕直ニ帰順仕候事、

鹿兒島県百九大区壹小区

飯野郷十五番地

明治十一年三月十八日 奥松新之丞

### 三〇 三島金之助上申書

明治十年二月十六日(編野別隊後)第四大隊一番小隊兵卒ニテ鹿兒島県

下発程、大口街道ヨリ水俣へ出、同廿一日小川駅へ着陣

ノ処、既ニ我先鋒開戦ノ報アリ、因テ熊本へ駆付安政橋

ヲ固守セントスルノ処、山鹿駅へ進撃セヨトノ令ニ依リ、

同廿四日山鹿へ着ス、官兵鍋田村へ襲来スレ共都テ追撃

ス、同廿六日我兵一大隊高瀬駅へ進撃ス、其時官軍大川

ヲ隔テ要地ニ抛リ、我三小隊ハ潜カニ後ヨリ渡船シ、終

日激戦ノ処遂ニ利アラスシテ山鹿ニ引揚、翌日中隊編制

ニテ押伍ニ挙ラレ、同所ノ要地ニ柵ヲ結ヒ固守ス、官兵

夥多襲撃スレ共悉ク追却ク、其後田原坂敗軍ノ際鳥ノ巢

村へ退陣ス、同所ニ於テ屢々戦ヒ互ニ勝敗アリ、其時分隊

二 長ニ挙ラレ央ニ川尻口敗走ノ際大津駅エ引揚三日滞陣、

夫ヨリ矢部へ退キ、富高新町へ引揚、亦熊田へ転陣、同所ニ於テ病ニ罹リ帰郷、帰順仕候也、

鹿兒島県

明治十一年三月 三島金之助

### 三一 吉田 精上申書

明治十年二月十六日(永山弥二郎隊長)第三大隊九番小隊押伍ニテ鹿兒島県

下発程シ、同廿二日熊本県下ニ着ス、即日ヨリ城外干反

畑ニ守ヲ付ケ、同三月三日頃城内ヨリ進撃シ来ル、終日

ノ戦官軍遂ニ利アラス死傷ヲ遺テ、敗走ス、直ニ我隊明

午橋ヲ守ル事凡三四日ニシテ、植木口へ転進ス、官軍進

撃シ来テ終日大戦ス、官軍利アラス屍三百余名ヲ棄テ、

田原ニ向ヒ敗走ス、我隊尚堅ク守ル、其後諸方へ進軍シ

固守スル事殆ト二週間ニシテ、川尻敗軍ノ際小田窪へ退

キ両日守リ、夫ヨリ全軍矢部ニ引揚、同所ニテ振武七番

中隊ト変号シ、振武隊ハ鹿兒島進撃ノ軍議決シ、人吉ヲ

経テ鹿兒島城山及ヒ甲突川下ヨリ攻撃スト雖トモ甚タ利

ヲ失ヒ田上村へ退キ守計ヲ為ス、同所ニテ官軍両度襲来

レトモ悉ク追却ケ、六月中旬頃我背後ヨリ敵襲来リシト

(鹿兒島市)

(國分市)

キ銃創ヲ蒙リ、上伊敷村病院ニ入ル、翌日清水郷へ引揚  
ゲ、其他諸所へ転院ス、遂ニ延岡ニ於テ宮崎一番小隊監  
軍トナリ、同所方財村ニ守兵スル事四五日ニシテ延岡敗  
軍ノ際、長井村ニ於テ降伏致候也、

鹿兒島第二大区二小区

第四百九十九番地

明治十一年三月

吉田 精

### 三二 伊集院兼丈上申書

明治十年二月十六日第一大隊七番小隊給養方ニテ鹿兒島

(熊本縣幹隊長)

県下発程ス、同廿一日熊本県下川尻へ着、翌廿二日熊本

城外ニテ斥候隊開戦ノ由注進シ来ル、直ニ攻城ノ議ヲ決

シ未明ニ発シ城外ニ於テ開戦、終日勝敗不決、暮ニ及テ

(熊本市)

(熊本市)

春日邸へ兵ヲ退ク、同廿二日未明ヨリ八幡山へ進撃ス、

同所ニ於テ昼夜戦鬪ス、同廿六日暮ニ及テ再度春日村へ

兵ヲ引揚ケ、同廿七日高瀬村へ進軍午前第九時頃高瀬村

(玉名市)

へ着ス、同所川越ノ戦ニテ勝敗不決終日戦ヒ、暮ニ及テ

(玉名市)

木ノ葉ニ兵ヲ転シ、同廿八日同所へ胸壁ヲ築キ守ル、同

卅日官軍進撃ス、我隊苦戦午後四時頃敗レ悉ク兵ヲ田原

坂へ引揚ケ同所ヲ守リ、諸所へ番兵ス、昼夜連戦三月一

日ヨリ同七日ニ至ル、此兵交代ノ兵来ル、我隊即夜春日

村へ引揚ル、休兵スル一日、同三日京町ノ番兵ニ代リ、

同所へ四十余日哨兵ス、時ニ川尻苦戦ニ及テ敗レ、悉ク

(益城町)

木山へ兵ヲ引揚、諸所ノ戦悉ク敗ル、ニ及テ日州上井野

(井ノ口町)

村ニテ大小荷駄掛トナリ長井村へ在陣、八月下旬同所ヨ

リ鹿兒島へ向ヒ進軍、諸所ニ於テ大戦数々大勝利アリ、

九月一日鹿兒島城山へ着シ、戦鬪中兵糧・彈丸等之事ヲ

司リ、同廿四日帰順仕候也、

鹿兒島第一大区二小区

明治十一年三月

伊集院兼丈

### 三三 志和屋良彦上申書

明治十年第二月十五日第二大隊五番小隊兵卒ニ編入セラ

(村田新八隊長)

レ鹿兒島発程、大口街道ヨリ肥後水俣へ出テ、同月廿一

日川尻駅へ着、翌未明先鋒ニ熊本城へ攻撃ノ報ニ因リ、

我隊疾ク馳テ同所八幡山口へ進軍鬪戦スル事終日、暮ル

(松橋町)

、ニ及テ同所二本木村へ引揚、同廿五日官兵松橋駅エ

突入ノ報ニ依リ直チニ出兵、爰ヲ固守スル事数日、同三

月上旬熊本迎(熊本市)へ町ニ陣ヲ移、二日ヲ過ルルヤ官兵大津駅(大津町)へ襲来ノ報ヲ聞キ、我隊援兵ノ為出兵ス、三日過ルルヤ阿蘇郡黒川村(阿蘇町)へ出兵、翌日官兵ノ斥候襲来リ開戦ノ処遂ニ官軍敗走、同月中旬此ノ地へ官軍再ヒ進撃シ良久敷闘戦、終ニ官軍利ヲ得スシテ敗走ス、我隊勝ニ乗シ追撃スル事数里、同月下旬官兵坂無シ峠ヲ退クノ報ヲ聞クヤ同所へ進軍、此地ヲ固守スル央、同四月上旬官兵ヨリ進撃シ来ル、互ニ勝敗分タス格闘スルノ処、銃丸ニ左手ヲ貫レ、此峠ヲ降り居タル所病院ニ送ラレ療養ス、同四月中旬川尻敗軍ノ際高千穂ヲ越ヘ延岡へ出テ、日向路ヲ経帰県(牧園町)ノ途中踊郷温泉ニ於テ治ヲ加ヘ、四月下旬帰県仕候也、

鹿兒島県下第一大区四小区  
下伊敷村百九十六番地  
明治十一年第三月  
志和屋良彦

三四 竹之内清一郎上申書

明治十年第二月十六日第三大隊三番小隊押伍ニ編入セラレ鹿兒島発足、出水口ヨリ肥後水俣へ出、同月廿二日川尻駅へ着ス、先鋒已ニ熊本城エ攻撃ノ報ニ因リ、我隊同

所寺町へ進軍終日闘戦固守スル数日、同三月四日官兵ノ応援植木駅へ来ルノ報ニヨリ、同所梅木谷村(鹿火町)へ出兵、対壘ノ央三月中旬田原坂敗軍ノ際植木へ出兵、此地ニ於テ闘戦二日ヲ過ルルヤ木留村(熊本町)へ出兵ス、同所へ官軍ヨリ進撃ニ及ヒ鋭戦ノ処、首部へ銃創ヲ受ケ、川尻病院ニ送ラレ療養ヲ加ヘル央、八代口敗軍ニ付木山へ転院ス、旧二月下旬帰県、旧四月上旬鹿兒島ニ於テ振武十四番小隊監軍ニ挙ラレ同所武村へ対壘ス、旧四月中旬官兵進撃闘戦ノ処官軍遂ニ敗走ス(此ノ所へ官軍ノ死、屍二十余ヲ遺セリ)、旧五月十四日官軍総進撃トナリ互ニ勝敗不決、鋭戦極リ無ク、翌十五日午後ニ及フヤ終ニ敗軍致シ、加治木郷ノ内納屋町へ引揚、翌日蒲生郷へ移陣ス、同月十七日同所冷ミ松へ守禦ノ処、官軍進撃ス、我隊十四五名ニテ防戦遂ニ敗走、同月上旬庄内郷(都城市)へ引揚ケ、翌日末吉郷ノ内通山(財部町)へ転陣爰ヲ守ル事数日、此ノ地ニ於テ官軍進撃我隊敗ヲ取り、同所ヨリ都ノ城へ引揚ル途中、官兵ヨリ道ヲ遮ラレ、我隊ニ帰ルヲ得ス、遂ニ山路ヲ越ヘ帰県仕候也、

鹿兒島県下第一大区四小区  
下伊敷村二百三十三番地  
明治十一年第三月  
竹之内清一郎



三五 黒木東朔上申書

明治十年旧二月廿四日遊軍隊分隊長トナリ、熊本二本町(木脱カ)へ同廿九日着、翌日川尻ノ応援ニテ戦争仕、遂ニ不利ニシテ木山町へ引揚途中砂取ニテ烈戦、夜ニ入大谷村へ引揚ケ一週間番兵シ、夫ヨリ矢部へ引揚亦馬見原へ転陣、直ニ人吉へ引揚ケ、夫ヨリ帰県致居候処、高崎郷へ官兵出張ニ相成候ニ付、都ノ城分署へ七月廿二日自首仕候、

鹿兒島県日向国高崎郷

明治十一年三月

黒木東朔

三六 寺田休五郎上申書

明治十年三月十六日(池上四郎隊長)第五大隊三番小隊給養ニテ鹿兒島ヲ出立、同廿八日熊本城へ攻撃度々戦争、其後植木・木ノ葉・山鹿(山鹿市)(三加和町)(西合志町)・岩村・鳥ノ栖・大津・其外諸所ニ於テ烈戦大勝利、弾薬・銃器分捕数知レス、後チ奇兵十四番中隊ト改メ矢部へ引揚、四月中旬鹿兒島へ出張、半隊長トナリ鎮撫三番中隊ヲ指揮シ復タ戦争ニ及ヒ、遂ニ敗軍トナリ、

伊集院石谷村へ引揚ケ解隊イタシ、同廿一日川田村ニ於テ降伏仕候也、(松元町)  
(郡山町)

明治十一年三月

鹿兒島県第三大区一小区百三番地  
寺田休五郎

三七 重久佐平太上申書

明治十年三月廿六日第九大隊大小荷駄トナリ鹿兒島出立、熊本人吉エ大小荷駄ヲ置キ、各隊給養方ニ弾薬・糧米配分ス、其後チ同所坂本ニテ戦ヒ、古田・神ノ瀬へ宿陣ノ時、中隊編制ニテ八代并頭地口其外諸所ニ於テ戦争ス、同五月卅日人吉大畑へ引揚、夫ヨリ鹿兒島吉田并佐土原(人吉市)ニテ同断、同八月中旬延岡長井村ニ於テ降伏仕候也、(北川町)  
(えびの市)

鹿兒島県第一大区一小区

明治十一年三月

重久佐平太

三八 佐多浦三省上申書

明治十年二月十七日(池上四郎隊長)第五大隊押伍トナリ鹿兒島出発、同廿一日肥後松橋へ着シ同夜川尻迄進軍、翌廿二日熊本城

ヲ攻撃、暫時ニシテ三間町へ引揚タリ、三月上旬田原へ進撃ス、同所山手西山ニ於テ戦ヒ勝利ヲ得ル、此地ニテ防戦スル事十余日、同月中旬田原敗軍ノ時植木へ引揚、同所裏手ニ於テ戦ヒ大勝利ヲ得テ(改竄村、北部町)荒木村へ宿陣、同月下旬(植木町)木留へ進撃ス、同所ニテ連日戦ヒ、四月上旬重傷ヲ蒙リ木山病院ニ入り、夫ヨリ日向高岡病院ヨリ数日ヲ経快氣セシニ付、郡代取締トナリ巡兵ヲ募リ、八月二十日宮崎ニ於テ降伏仕候也、

鹿兒島県諸郡高城郷大井手村

明治十一年三月

佐多浦三省

### 三九 大山新助上申書

(前野利秋隊長)

明治十年二月十六日第四大隊八番小隊分隊長トナリ本県ヲ出立シ、同廿二日熊本県下安政橋ニ着陣ス、而シテ本営ヨリ直ニ植木表へ進発セヨト令至ル、之ニ因テ同所へ赴ク、同廿三日朝植木ニ着シ、夫ヨリ木ノ葉ニ進撃ス、同所ニテ午前九時ヨリ開戦シ頗ル憤戦ス、我隊下大ニ勝利ヲ得テ追撃益甚シ、午後五時迄ニ悉ク官兵ヲ撃退ケ、分捕高名数知レス、而シテ七時ニ至リテ植木ニ引揚タリ、

同廿四日早朝ヨリ山鹿口ニ進軍ス、同廿五日官兵大ニ攻

メ来ル、我隊兵員ヲ配置シテ距守ス、烈戦十余合、遂ニ大ニ之ヲ破リ連進追事数丁、是ノ役ニ官兵精兵多ク撃取ル、夫ヨリ山鹿(山鹿市)鍋田原ニ於テ壘ヲ対シ日夜接戦ス、我軍毎ニ勝利得、已ニシテ三月上旬総軍ヲ二手ニ分ケ、一隊ヲ岩村ニ進撃ス、是ノ戦ヒ頗ル烈戦ニシテ官軍死屍所々ニ横タハリ何百ノ数ヲ知ラス、是ノ際ニ銃創ヲ蒙リ川尻病院ニ入院ス、夫ヨリ軍事ニ関係ナク、田原敗軍ヨリ各所ノ病院ヲ経テ、延岡長井村ニ転院ス、已ニシテ八月中旬旬官兵襲来ノ際ニ帰順候事、

鹿兒島県第二大区一小区

明治十一年三月

大山新助

### 四〇 野崎半兵衛上申書

(永山第一船隊長)

明治十年二月十七日三番大隊四番小隊給養ニテ出立、熊本別所へ着シ、八幡山其外田原・植木戦争ノ時兵糧・彈薬ヲ運送ス、其後チ彈薬製造掛トナリ二本木へ転陣ス、夫ヨリ三番大隊大小荷駄トナリ兵糧配付ス、其後川尻口敗軍ニ付木山ヨリ(矢部町)矢部へ引揚二三日宿陣、糧食ヲ那須(那須)マテ

運送ス、夫ヨリ人吉へ引揚、後チ鹿兒島へ帰陣シ出納事

務ヲ取扱ヒ、夫ヨリ同所敗軍ノ時横川ヲ越へ都ノ城ヨリ

宮崎・延岡各所ノ戦地へ兵糧運送ス、其後チ諸道敗軍ノ

時長井村ニ引揚、再ヒ大小荷駄代理トナリ榎ノ嶽ノ官軍

ヲ撃破リ、三田井・地藏ヶ峯ヲ越へ鹿兒島へ帰り、上伊

敷村ニ於テ降伏仕候也、

鹿兒島県

明治十一年三月

野崎半兵衛

#### 四一 園田彌左衛門上申書

明治十年旧二月廿三日本県出立、同廿七日人吉ニテ三ノ

六番小隊ニ編入シ分隊長トナリ、三月廿七日鹿兒島山野

郷ヲ進撃シ、夫ヨリ水俣マテ進撃大勝利ヲ得テ、同廿八

日ヨリ数日対壘、遂ニ苦戦引揚ケ、大口ニテ戦ヒ、夫ヨ

リ横川マテ退軍、庄内ヲ越へ六月九日霧島ニテ戦ヒ大ニ

勝利、数日戦ヒ、夫ヨリ末吉へ退軍シ、同所戦ノ時銃創

ヲ蒙リ宮崎病院へ入院、後チニ延岡長井村へ転院、旧七

月十日同所ニ於テ降伏候事、

鹿兒島県谷山郷四十三番地

明治十一年三月

園田彌左衛門

#### 四二 宇都字左衛門上申書

明治十年二月十七日一番炮隊大小荷駄ニテ鹿兒島出立、

同二十二日熊本春日村へ着シ、開戦ニ及ヒ候ニ付、花岡

炮台其ノ他炮隊持口へ兵糧・彈藥配分シ、夫ヨリ植木并

木留へ半隊出軍ニ付同所ニ出張、田原并吉次峠へモ同断、

其後春日村へ転陣シ同様配付ス、其後チ川尻口破軍ヨリ

武ノ岡・桂山へ炮隊出軍ニ付同様運送、六月廿五日同所

破軍ヨリ吉田へ引揚ケ、加治木ヨリ都ノ城・宮崎ヲ越へ

延岡・所々戦地エ運送、夫ヨリ長井村ヲ切抜ケ榎ノ嶽官

兵ヲ追退ケ、中軍大小荷駄トナリ九月一日鹿兒島へ突出

シ、官兵ヲ鑿殺シ籠城ス、同廿四日敗軍ノ時降伏仕候事、

鹿兒島県三大区六小区

明治十一年三月

宇都字左衛門

### 四三 松崎藏右衛門上申書

明治十年二月十六日(網野利秋隊長)第四大隊一番小隊押伍ニテ出立、小

川駅へ同廿一日着ス、已ニシテ先鋒熊本城ニテ戦ヒ、我

隊ハ同廿四日山鹿へ出張、同廿七日同所鍋田村(山鹿市)へ官軍襲

来撃卻、同廿九日我兵一大隊(玉名市)高瀬ニ進ミ戦争ス、其時官

兵川ヲ隔テ距守ス、我三小隊潜カニ後ヨリ川ヲ渡リ大ニ

進撃、終日戦テ後チニ山鹿ニ引揚ケ、翌日中隊編制ニテ

分隊長ニ挙ラレ、同所ノ要地ニ壘ヲ築キ固守ス、官兵屢

々襲来スレトモ悉ク撃卻ク、其後田原敗軍ノ際鳥ノ巢(西合志町)へ

退陣、同所ニ於テ数度戦ヒ互ニ勝負アリ、是ノ時統創ヲ

蒙リ木山病院へ退キ、帰県降伏仕候事、

鹿兒島県

明治十一年三月

松崎藏右衛門

### 四四 加世田 工上申書

明治十年二月十三日県令ノ達ニ依リ熊本迄病院ノ荷物護

送シテ出立、同三月三日二番大隊大小荷駄代員トナリ、(村田新八隊長)

二本木村へ宿陣シテ木留・植木・吉次峠・諸所ノ戦地へ

弾薬・兵糧運送等ノ事ニ従事ス、夫ヨリ川尻口敗軍ヨリ、

矢部へ引揚ケ弾薬製造并糧食ノ事ニ従事シ、夫ヨリ那須

山ヲ越シ人吉へ越(水上村)江代ニ宿陣、糧米ヲ配分ス、其後延

岡へ出、三田井口并諸道ノ軍用諸品ヲ運送ス、六月十四

日佐土原ニ於テ金札製造掛トナリ、十七万円余ヲ製造シ

テ日々出来高ヲ官崎軍務所へ差廻ス、七月初旬佐土原破

レ候ニ付、高鍋・美々津(日南市)ヲ越へ、延岡迄引退ク、其後チ

同所モ敗軍トナリ、八月十三日大武村へ退キ降伏仕候也、

鹿兒島県

明治十一年三月

加世田 工

### 四五 美代清吉上申書

明治拾年二月十五日(藤原固幹隊長)一大隊九番小隊押伍ニテ出立、同二

十二日熊本へ着シ、黎明ヨリ攻撃スル事十余日ナリ、是

ノ時八代へ官軍上陸ノ報ニヨリ、本営ノ指揮ニ依リ鏡(鏡町)ノ

駅へ出兵、鏡川ノ堤ニテ邀戦、我隊下不利ニシテ遂ニ引

揚ケ、是ノ時ニ半隊長トナリ、三月中旬砂川(松橋町)ノ戦イニ傷

ヲ蒙リ帰県ノ上降伏仕候事、

鹿兒島県三大区四小区

二百七拾番地

明治拾一年三月

美代清吉

月一日城山ヲ攻取り数日戦争、九月二十四日敗軍ノ際捕縛ニ相成候事、

鹿兒島県第一大区四小区草牟田

明治拾一年三月

川上郷之丞

四六 川上郷之丞上申書

明治十年第二月上旬(編野別隊隊長)四番大隊四番小隊兵士ニテ同拾六日出立、大口街道ヨリ水俣へ出テ小川駅へ着ス、是ノ時先鋒已ニ開戦ノ報アリ、因テ我隊ハ直ニ進軍、熊本ヲ越ヘ

二月下旬山鹿へ出軍壘ヲ固シ柵ヲ結ヒ、官兵ノ襲撃ヲ悉ク追退ケ候処、田原口敗軍ノ報ニヨリ鳥ノ栖(西合志町)へ退陣、同所ニテ数日戦争、四月拾四日川尻口敗軍ニ付大津へ引揚ケ同所ニテ戦リ、四月中旬惣軍矢部へ引揚ケ同所ニテ奇兵隊ト号シ押伍ニ用イラレ、四月下旬人吉ニテ豊後口進軍ニ決シ、日向富高新町ニ出テ延岡ヨリ豊後竹田ニ至リ、

数日対壘戦争ノ処、五月中旬遂ニ敗軍シ佐伯表へ退キ、守ル事数日、官軍追撃スルニ付、五月下旬日州陸地味ヲ守、又タ敗レテ水ヶ谷へ固守ス、此時分隊長ニ挙ラレ、数日戦争ノ際延岡口敗軍ニ付熊田へ引揚ケ、長井村ヨリ八月中旬榎ノ嶽ヲ敗リ、三田井ヨリ諸所ヲ越ヘ米良ニ出、九

月一日城山ヲ攻取り数日戦争、九月二十四日敗軍ノ際捕縛ニ相成候事、

鹿兒島県第一大区四小区草牟田

明治拾一年三月

川上郷之丞

鹿兒島県下第二大区一小区

四七 大野清満上申書

明治拾年三月二十六日雷撃炮隊兵士ニテ鹿兒島県下出発、四月二日人吉へ着、同隊半隊長トナリ、同八日八代口へ進軍、古田村ヨリ櫻馬場迄追撃得勝利、同所ニテ三日間ノ激戦、終ニ敗軍トナリ、古田村へ引揚ケ、官軍襲来ニ付大炮三門ヲ以テ打退ケ、程ナク神瀬村へ引揚ケ、直ニエビラ瀬へ進軍、同所へ三十日間連戦、利アラスシテ渡

リ村へ引揚ケ、再ヒ馬場村へ進軍、同所へ七日間対戦、勝敗不決央、人吉へ退陣、一日防戦シ大畑へ退キ、官兵尾撃又敗レテ日州小林へ退キ、同所へ十日間滞陣ノ際飯野へ進撃大捷利ニテ再ヒ小林へ引揚ケ三日滞陣、亦飯野へ進撃同所へ二十日間連戦勝敗不決央、病氣ニテ庄内病院へ入、延岡長井村ニ於テ帰順仕候也、

鹿兒島県下第二大区一小区

明治拾一年三月

鹿兒島県下第二大区一小区

鹿兒島県下第二大区一小区

明治十一年三月

大野清満

四八 山下金助上申書

明治十年旧正月一日(永山弥一郎落後)三番大隊七番小隊ニ編入シ四日(二月十六日)県下

発足、同日肥後熊本へ繰込ミ、翌日川路村(河内町)へ海岸固メ

トシテ出張、翌日高瀬(玉名市)へ進撃ノ処、大勝利ニテ銃器・弾

薬等許多分取シ、兩日対壘シ、同拾四日川路村へ退軍、

同廿日野井手(野田、河内町)へ引揚ケ、然ルニ旧正月下旬木留本道固メ

トシテ出張シ当日ノ戦争大勝利、旧二月下旬(樺木町)ホ夕窪迄退

軍、翌日於同所苦戦ノ央、矢部へ引揚ケ翌日馬見原(蘇陽町)ヨリ

江代(水上村)・人吉ヲ経、鹿兒島へ退軍、磯紡績所ノ上へ胸壁ヲ

構へ守戦ノ際分隊長ニ挙ラレ、旧四月上旬犬迫村(鹿兒島市)へ応援

トシテ出張大勝利、本日原壘へ引揚ケ固メ候央、武村(鹿兒島市)敗

軍ノ際加治木へ退軍シ、於同所戦争ノ節銃創ヲ負ヒ、延

岡病院へ入、旧七月十日於長井村帰順仕候也、

鹿兒島県

明治十一年三月十七日

山下金助

四九 永野祐喜上申書

明治拾年四月六日戸長達ニヨリ遊軍第壹番小隊兵卒ニ編

入、鹿兒島県小林郷出發、人吉へ同八日着、同所ニ於テ半

隊長被申付、同拾四日ヨリ十六日迄甲ノ瀬(深窓村)へ番兵致居候

処、病氣ニテ帰郷私宅ニ於テ療養仕、九月十五日郷内分

署へ帰順仕候也、

(居住地脱)

明治十一年三月拾七日

永野祐喜

五〇 榎並新五左衛門上申書

明治拾年三月十七日鹿兒島発程、大口郷ヲ経テ直ニ熊本

県鳥ノ巢へ着陣、奇兵宅番小队押伍ニ挙ラレ、直ニ進撃

シテ勝利ヲ得タリ、当所へ哨兵ヲ張りニ週間滞留、其中

連戦互ニ勝敗ヲ決セス、既ニシテ川尻口潰走ノ報アリ、

故ニ本營ヨリ楢ノ尾ニ引揚ケ黒河へ守リヲ付ヨト承知、

此所へ一週間滞在ス、夫ヨリ人吉へ引揚ノ途中矢部濱町

ニ於テ中隊ヲ編制シ分隊長トナリ、南郷境へ哨兵ヲ張り、

旧四月上旬馬見原ノ内鏡山ニ進撃シテ大ニ利ヲ得、銃器・

彈藥數多分捕タリ、此時ニ当テ敵ノ死骸八十余ヲ遺セリ、

即日三田井ヘ引揚ケ四週間滞在、時ニ旧四月拾四日官軍

ノ大進撃ヲ受ケ、我兵大ニ敗レ宮ノ原ヘ引揚ノ際銃創ヲ

蒙リ、延岡病院ニ入ル、療養ノ為帰郷仕候也、

鹿兒島縣第四大区三小区

六百三十壹番地

十一年三月廿日

榎並新五左衛門

明治拾壹年三月十七日

山田早苗

五二 尾上正右衛門上申書

明治十年五月二日勇義拾二番小隊半隊長ト成リ、阿久根

ヘ出軍、同所ニ於テ戦利アラス、同月拾二日帰郷ノ上自

首帰順仕候也、

鹿兒島縣隈之城郷

明治拾一年三月十八日

尾上正右衛門

五一 山田早苗上申書

明治十年旧曆二月拾九日鹿兒島縣大門口郷ヘ出張、直ニ熊

本巢人吉ニ到リ、十番大隊拾番小隊給養トナリ、八代口

妙見山ニ於テ戦利アラス神ノ瀬村ヘ退キ、同所ニ数十日

番兵シ、人吉ノ内山田原ヘ転陣、同所ニ於テ苦戦大畑迄

引揚ケ数日番兵、夫ヨリ鹿兒島縣飯野郷ヘ引揚ケ、同所

ニ於テ破竹五番中隊半隊長ニ挙ラレ、同所ノ戦利アラス、

野尻郷ヘ引揚ケノ節給養ト病院トノ掛ト成リ、美々津ノ

山毛村迄引揚ケ、同所敗軍ノ際降伏候也、

鹿兒島縣都之城郷五百九拾二番地

五三 岩元弘平上申書

明治拾年二月十五日一番大隊四番中隊兵士ニ編入、鹿兒

島出発、同廿一日熊本城攻撃、同廿五日高瀬ヘ進撃、同日

木留村ヘ引揚押伍トナリ、三月上旬ヨリ吉次・田原其他

所々ニ於テ戦フ事三十余日、其後矢部ヘ引揚ケ、鹿兒島

ヘ向テ進軍ノ途中吉田ニ於テ分隊長トナリ、鹿兒島吉野

村ニ於テ小隊長トナリ、戦フ事四拾余日ニシテ大ニ敗レ、

加治木・岩川・國分ニテ戦リ、末吉敗軍ノ際帰郷順候

也、

鹿兒島県一大区四小区

明治十一年三月拾八日

岩元弘平

旧五月上旬同所引揚ヶ鏡山へ進撃ノ節分隊長トナリ、同  
月中旬同所引揚ヶ大楠迄退キ苦戦、夫ヨリ長井村敗軍ノ  
際帰順候也、  
(日之影町)

五四 伊地知啓吉上申書

明治十年二月十五日(篠原固幹隊長)一番大隊四番小队押伍トナリ鹿兒島

出発、同廿一日熊本城攻撃、同廿五日高瀬へ進撃、其後

吉次・田原・木留ニ於テ連戦、四月下旬矢部へ引揚、鹿

兒島ニ向ツテ進撃、吉野村ニ於テ連戦ノ際分隊長ト成リ、

六月上旬福山・岩川・末吉ニ於テ戦リ、小隊長トナリ夫

ヨリ宮崎・美々津ノ戦悉ク敗レ、八月中旬富高新町ニ於

テ自首帰順候也、  
(日向市)

鹿兒島三大区八小区

明治拾一年三月拾八日

伊地知啓吉

五五 山下彌七郎上申書

明治拾年旧曆二月廿三日鹿兒島県出立、四月七日熊本県

へ到リ正義六番小队へ編入、同中旬安政橋口へ番兵、夫

ヨリ坂本へ引揚ヶ同所ニ於テ苦戦、田尾マテ退キ番兵シ、  
(五ヶ瀬町)

鹿兒島県

明治拾壹年三月十七日

山下彌七郎

五六 鎌田政敏上申書

明治拾年六月十七日鹿兒島谷山町出張、鎮撫隊本営ヨリ

呼出ノ書面到来出頭候処、当隊編制ニ付一番小队半隊長

可相勤旨依頼有之、再三固辞スト雖モ聞入無之承諾致居

候内、同廿四日朝官兵同所へ進撃ノ際、同所裏手相固メ

候様本営ノ達ヲ受ケ防戦ノ用意致候得共、本隊ノ儀ハ編

制涯ニテ銃器等不揃ノ事故到底防禦ノ目的無之、空シク

山田村へ引揚經溜村へ一宿、翌拾五日伊集院郷石谷村へ

転陣ノ処、我全軍敗スルニ際シ、廿六日朝解隊ノ報ヲ得、

依テ各自帰家仕候也、  
(鹿兒島市) (玉利村カ、鹿兒島市谷山) (松元町)

鹿兒島県二大区三小区上之園

明治十一年三月拾七日

鎌田政敏



五七 松山善左衛門上申書

明治拾年二月十六日(永山第一部隊)三番大隊拾番小隊兵士ニテ鹿兒島発程、同廿二日熊本へ着、三月上旬マテ守兵シ、同五日木原山へ攻撃、戦利アラス同日下中間村へ引揚ケ守兵、夫ヨリ木山町へ引揚、四月初ヨリ九日迄御船へ守兵ノ際官兵ヨリ襲撃ニ付迎戦シテ大ニ利ヲ得タリ、同十三日同所邀戦之際創ヲ負ヒ、矢部病院へ入院、四月廿六日帰県、八月二日自首帰順候処、隆盛再ヒ鹿兒島襲来ノ際再度出兵、城山落城ノ際捕縛相成候也、

鹿兒島県三大区八小区

二百五拾番地

明治拾一年三月十七日

松山善左衛門

五八 岩崎伊兵衛上申書

明治十年陰曆二月廿四日(四月七日)遊軍隊押伍トナリ肥後国熊本二本木町へ同廿九日着、翌日川尻ノ応援ヲナスト雖戦利アラシテ木山町へ引揚ノ際、砂取町ニ於テ戦亦利アラス、

即夜木山町へ引揚、(おやつ、小谷カ、益城町)大谷村へ一週間程番兵、夫ヨリ矢部濱町へ引揚、(蘇陽町)馬見原駅ヲ経テ人吉ニ引揚、同所へ三週間滞陣、夫ヨリ同所茂田村へ守兵、同所ニ於テ遊撃七番小隊小隊長ト成リ、同所札松ノ戦ニ敗レ再ヒ人吉へ退キ、陰曆四月中旬同所(程角ハ照岳ノ誤記、人吉市北端)テイカクニテ敗軍ニ付大畑村ニ引揚、

又飯野郷ニ引揚、夫ヨリ須木郷ニ到リ一本杉ノ戦ニ利ヲ得タリ、夫ヨリ大崎郷ニ到ル、五月下旬同所ノ戦モ亦利ヲ得タリ、(大隅町)恒吉郷ニ到リ一週間守兵、夫ヨリ財部通山ニ到リ、六月初旬福山本道阪ノ上ニ攻撃シテ利アラス通山へ退ク、夫ヨリ莊内荒曾ノ戦ニ銃丸ニ中リテ傷ヲ負ヒ、

都城病院ニ入り、後帰郷ノ上自首帰順仕候也、

鹿兒島県日向国高崎郷

明治拾一年三月十七日

岩崎伊兵衛

五九 東郷恕兵衛上申書

明治拾年二月十六日(永山第一部隊)三番大隊四番小隊ニ編入鹿兒島出發、同廿二日熊本県川尻駅へ着、直ニ平病ニ罹リ、夫ヨリ二本木病院へ入院シ、三月廿日速ニ帰県仕候処、六月十六日鹿兒島県出水郷へ官軍進入之際、勇義隊本営ヨリ向田

郷へ出兵申付ラレ、同廿日勇義廿番隊分隊長ト成リ番兵致シ候処、同廿三日ノ敗軍ニ依リ、竊ニ帰郷ノ上帰順仕候也、

鹿兒島県三十二大区

一小区六十六番地

十一年三月廿日

東郷惣兵衛

六〇 讚良彦四郎上申書

明治十年四月廿一日人吉ニテ遊撃拾壹番大隊八番小隊半隊長トナリ、同所へ番兵致シ候砌、病氣差起リ帰郷イタシ、七月廿日帰順仕候也、

鹿兒島県下第五大区三小区

明治拾一年第三月

讚良彦四郎

六一 上村嘉左衛門上申書

明治拾年二月第六大隊輜重方トシテ鹿兒島県下加治木出

(熊本市)

発、同廿日熊本県下川尻着、同廿五日同県下春日村へ転

(益城町)

陣、三月上旬木留村並ニ同中旬植木へ同断、同下旬田崎村

へ引返シ、輜重ノ名号他隊ニ準シ大小荷駄ト改称ス、四

月川尻口敗レ木山へ退キ、同下旬矢部並ニ馬見原ヨリ求

摩人吉へ退キ、一泊ニテ加治木へ引返シ居候処、五月下

旬人吉表応援トシテ大畑迄出張候処、人吉既ニ敗レ同所

ニテ十日程滞陣、六月上旬大畑同断ニ付鹿兒島県下吉田

へ退キ、飯野・小林・高原ニケ郷ヲ經、再度加治木へ引

返シ末吉ニ転陣、日数廿日程滞在、同下旬末吉・岩川・

庄内三箇所ノ敗レニ、日州都之城ヲ經山之口迄退キ、一

泊ニテ宮崎之内船引村へ退キ、妖肥之内板屋敗レニ宮崎

迄退キ、高岡ノ敗レニ佐土原之内越ノ村へ退キ、夫ヨリ

(日向市) 美々津迄同断福瀬へ転陣、山蔭ノ敗レニ延岡へ退キ、三

(千鶴町) 田井口同断ニ付長井村へ退キ、八月十二日諸所口々敗レ

ニ付同所ニ於テ降伏仕、戦地事情此段上申仕候也、

鹿兒島県下第五大区八小区

加治木郷小山村居住

明治十一年三月

上村嘉左衛門

六二 山口榮喜上申書

明治十年第四月拾八日人吉へ出兵、拾七番隊兵士ニ編入

(本田早苗隊員)